
たちこね！

五十嵐優哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たちこね！

【Nコード】

N5871G

【作者名】

五十嵐優哉

【あらすじ】

夜の街を散歩してたらいきなり誘惑されちゃった！？どうしようボク、×××なのに……！新感覚タチ×ネコラブコメ。

1st・love・Cherry Kiss! (前書き)

BL・GL要素はありませんので安心してお召し上がりください。

1st・love:Cherry Kiss!

シャワーの音で鼓動の強さはごまかせない。ボクは状況を飲み込まずにただ熱さに打たれ続けていた。このままじゃ大変なことになる。まず、自分がどこにいるのか把握しなくちゃ。

湯あか一つ見当たらない浴槽はジェットバスになっていて、真っ白くて広い。四人ぐらい入っても余裕がありそうだった。全面を飾るタイル地の壁もまた白くて、清潔そうな印象を与えていた。蛇口は黄金色で、ざっとお風呂全体を見渡すといかにも高級な感じがした。

このお風呂はどこにあるのか、それがきつと重要なんじゃないか。記憶を巻き戻してみる。そもそもこんなところに連れ込まれたのは。

『まだかかるのか?』

「ひゃっ、そ、そんなことないですっ」

声が裏返ったことについてはふれないで。

今お風呂場の外から声をかけてきた人に、誘われたのがきつかけだった。誘われたというか、誘惑されたというか……いや待って、どっちも意味がおんなじだ。やっぱり相当ボクはパニックになっている。でも、それも仕方ないんだよ。だって、

『背中を流してあげてもいいんだぞ?』

「ちよっ、それは大丈夫ですからっ」

ボクがあわてて返事をしたこの人に、いきなり唇を奪われたんだもの。

あんまり説明してる時間はないっていうか、きつとあとで十分釈明の時間があるから(この状況を守れるとは思えないし)その時にするとして、

『ああ、じれったいなあ』

「わーわーわー!」

……ボクにはもう猶予がないみたいだ。余裕は最初っから持ち合わせていないんだけどね。ってそんな冗談言ってる場合じゃない、どうにかしてこの場を切り抜けないと。

『もう我慢ならん、開ける』

そんな、強引すぎる……！あ、でもきつと力はボクの方が強いはず、この扉を押さえて、必死に訴えれば（この場合は）何とかなるかもしれない。

「おそいぞ、君。私はもう待ちくた……のぼせてないか心配になったところだぞ」

否定するのが遅いと思います、あまりにも。姿をさらされたボクは最後の抵抗でタオルを腰に巻いた。

「あ、あの、もうちょっとしたら上がりますから、それまで待っててくれますか、すぐに向かいますから」

「うん、それなら　いや、風呂場でそのままっていうのもオツではないか？」

いやだからオツとかシチュ萌えとかそういうんじゃないんですねってちよつと目を輝かせてどうしたんですかつ、鼻息荒いですよ……！

「かまわん、いただく」

なまめかしい肌色をさらしたその人はボクを抱き寄せ（ボクは最速で腰を浮かせた）そのままボクの胸に埋める。そして、

「ひゃんっ」

「なに、くすぐったいか？」

ナニをされているかはご想像におまかせします。恥ずかしすぎてもとまらないけど言えない。というかここもその、『気持ちいいポイント』だったりするんだ……って感心してる場合じゃない。火照りが止まらなくて倒れそうになりながらも、愛撫する身体を押しつけた。驚いた表情を浮かべ、舌なめずり。怒らせたのかもしいとボクの脳が危険信号を発する。涙目になりながら、訴えた。

「本当に、待ってください、ボクにだって心の準備が……」

これは効いたんじゃないか、とボクはその人の表情を見て思った。輝かせていた瞳を伏せ、一言謝る。

「少しやり過ぎてしまった、可愛い子を見るとすぐこれだ、普通だったからお縄ちようだいだ、分かった。大人しく待っているよ」

苦笑い一つ。ボクはその表情に謝りながらも内心では安心したのだった。でも、分かっている。ばれるのは時間の問題だと。むしろなぜ気付かないのか不思議なくらいなのだから。

これ以上の籠城は無意味だと判断したボクはさっさとお風呂から出た。下着を身につけ、一応ブラも付ける。パッドのごまかしはもう効かない（むしろ喜んでいたような気がする）ので、それは挟まなかった。ワイシャツを着る。素肌に当たる若干の冷たさが心地よかった。その裾をフックに噛ませないように気をつけながらスカートを履く。ソックスは履こうかどうか迷って、結局やめた。どうにしろ脱がされるので気を遣わなくてもいいかなとは思ったけど、そうした方が喜ぶような気がしたからやってみた。いや、喜ばれても困るんだけど。

洗面所を出て、さらに広い部屋へ移る。相当にいい部屋なんじゃないかな。一見したところ、とても『ソレ』のためのホテルだとは思えない。誰かを連れて行って、『ここは一流ホテルの一室です』とか言いながら目隠しを外しても納得されるに違いない。アジアンリゾートを意識した室内は木目調の家具で統一されていて、とにかく一つ一つが大きい。テレビもそうだし、ベッドもダブルベッドが二つだなんて、贅沢すぎる。きつと一つで済むのだろうけど。ベッドには天蓋が付いていて、ちょっとしたお姫様気分だった。そしてその人はそこで待っていた。

「さっきはすまなかった」

そう言いながら、ボクをすぐ隣へと寄せる。もう裸身ではなくて、タイトなズボンと少し癖のついたワイシャツという姿だった。けど身体は密着していて、その人の熱が伝わってくるようだった。

「たまに自分が見えなくなってしまうってね。怖かったかい？」

「少し」

「ごめん、と言いなから髪を指ですくい、匂いをかぐ。その仕草がとても自然で、気持ち悪いとは思わなかった。お風呂に入らなくてもいいのかと訊くと、子猫に逃げられてもね、と意味深に微笑む。どうやら逃がすつもりは本気でないようです。くさいかな、と服の匂いをかぐのを、ボクは首を振ってやめさせた。独特の、いい香りがしている。香水か何かだろうか。ボクにはよくわからなかった。」「やさしくするから」

その言葉に重なるように言葉を告げた。

「あの、その前に言わなきゃいけないことがボクにはあるんです」さて、目の前の人が待ちの姿勢に入った。どういう風に切り出そうか正直迷う。どう言ったところで何らかの釈明は必要だと思う。でも、謝罪するのはむこうだ。だって、無理矢理こんなところまで連れ込んだわけだし。

「……で、言いたいことって」

よし、とつてもかわいい声を出そう。

「じつはボク……オトコなんです」

「ふーん、ん？」

あ、今度は思考が停止しているよ、いや逆なのかも。オーバーロードで応答しないみたいだな。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

目が点だ。手を振っても反応がない。もう一回呼びかけようとしてところ、反応が戻ってきた。

「私はオトコの胸を舐めていたのか」

「そついうことですね」

でも問題ないと思います、だってあなた女性だし。

「残念ながら、私は男に興味がないのだよ……さて、話を聞かせてもらおうか」

ん、表情がなんか凍ってませんか？その問いに彼女は答えない。というか、さらにとカミングアウトしましたね、ボクもそんなあつ

けらかんとした性格だったら幸せだったのかも。

「大体にして、なんでそんな格好してるんだ？」

「うわー、すごい眉間に皺が寄ってるよ。あれだね、何処かのスナイパーも顔負けなぐらいだ。今のうちにスイス銀行に振り込んでおこうかな。そんなことを漠然と考えていて、答えにつまずいてしまった。」

「早く答えんか」

「いやー、簡単に言えるようなことじゃないっていうか、うまく説明できないっていうか」

「うるさいだまれ……じゃないとつと吐け」

確かに黙ったら答えられないね。と言って彼女を怒らすのも困るので、正直に話すことにした。

「ようは、ボク、オナナなんです」

「……遺言はそれだけかね」

ほらやっぱり理解しない。そりやそうかもしれない。身体が男である以上、素人目には認めたがいことではある。学校でもまだ理解してくれない人はいるし、今日初めて会ってそんなことを言われたところで誰もが同じ反応をすると思う。

「面倒な言い方をする『性同一性障害』っていうやつで、自分では女として生きてるつもりなんですけど、身体はこのまま育ってしまったというか。やっぱり違和感はあるんですね」

そう言いながら、胸やおなかをさすってみる。まな板と言うより胸板だし、男としてのソレはちゃんと付いている。でも、別に手術まですることはないと思っている。

「むむ、私は申し訳ないことを言ってしまったか……？」

いつの間にか眉尻を下げた表情に彼女はなっていた。ボクはそれに首を振る。余計なことだけど、その前の険しい顔とのギャップがかわいらしいと思った。

「うっん、そんなことないです。女装ができれば性自認に関しては満たされますし。……やっぱり変ですよな？」

「確かに理解は難しい。でも、受け入れられないわけじゃない」

「ありがとう」

ボクは短く答えを返した。下手に同情されたら縁を切るつもりだった。

「それに」

「それに？」

「こういうのも、ありだな」

いや、ちよつと待って、受け入れるってこつちの話ですか？ボクは素直に話せばこの状況から抜けきれると思ったのに、なんで押し倒すんですかつ、ちょ、首元にキスしないで、制服を脱がさないで……！

2nd・love:つかの間のMeet again・

気持ちのいい朝、教室に着くなり大あくびをしたボクに、彼が苦笑いした。

「おいおい律、かわいい女は大口なんか開けないもんだぞ」

骨太なその声にあわてて口を塞ぎ、会釈をかえす。

「今度から気をつけるよ、純平^{じゅんぺい}」

そう、彼に返事をしながら席に着いた。彼の席はボクの前で、黒板に近いところだ。彼はすぐ居眠りをするので教師の面前と授業の始まった早々から決められた。ちなみにボクはくじ引きで決まった。て、別に話すようなことじゃないか。純平と違って教師に目を付けられたわけではないってこと。あと言わずもがな、ボクが男だってことを彼は知っている。

ホームルームまではしばらく時間があるから、人もまばらだ。もう一つあくびをすると純平が椅子をボクの方へ向けた。部活で引き締められ、かつ筋肉で太い身体はブレザーにとっても似合っていないかった。どちらかと言わなくとも学ランがよく似合いそうだ。彼はボクを一瞥すると、首をかしげた。

「なんだ、昨日寝てないのか？」

たしか、彼の両腕には五キロのリストウエイトが巻かれているんだよなと思いつながらあまり寝られなかったことを告白する。もちろん何があつたかは伏せた。

「あんまり寝不足ってのはおすすめしないなあ、ちなみに俺は毎日十二時間睡眠を実践してるぜっ」

「一日って何時間？」

反射的に質問が出てきて、彼は不服そうに顔を曇らせた。

「おまえ、俺を馬鹿にするなよ？そんな幼稚園児でもわかるっつの。……ああ、一日は二十四時間だよな、だから」

だから？

「四十八時間」

「あなたはちがう星の人ですかあ？」

ボクがツツコミを入れる前に声がして、顔を上げる。ちんまい女の子　と言っちゃ失礼だ　がボクたちに向かつて腕組みをしている。今時、蛙のキャラクターがあしらってある髪飾りなんて幼稚園児でも付けないだろう。

「おはよう、美緒先輩」

「おはようです、りっちゃんくん」

挨拶もそこそこに、彼女は質問に戻った。

「というか一回答えが出てたじゃないですか」

「それは、納得できなかったからだ」

訝しげに眉を寄せる先輩。その仕草もちょっと愛らしい……別に惚れてるわけじゃないから、そのへん勘違いしないように。納得できなかつたとは、と説明を促す彼女。

「一日が二十四時間だとしたら、俺はその半分眠りこけてることになったまう」

きつとそれ、事実。十二時間睡眠を実践しているのなら。

「だから、保険として倍にしてみた。どうだ」

「あなたの保険のために地球の自転のスピードを遅めるのはやめてくださいです」

冷静な（しかも知識ありげに）ツツコミを入れるさまと制服を着た小学生のギャップがすさまじい。いや、ませた女の子としてみればいいのかな？

「いや、昼と夜が二回来ることにすればいいんだ。そうすれば地球のことを心配せずにすむ」

というか問題が地球規模に発展してるよさつきから！これ以上話し合ったところで平行線は避けられそうになかったので割り入って話を中断させた。なんでそんなに不服そうなんだ二人とも。ツツコモうか悩んだけど、さつき純平の話に納得しかけてなかった美緒先輩？

「そ、そんなことないですよ？むしろそれ二日間でもいいじゃんと言
い返そうと思ってましたですよ？」

それは全くツツコミきれてない。くだらない話をしていると時間
の消化が早い。そろそろホームルームの始まる時間だ。教室に戻る
ように彼女に促す。

「でも、その前に」

首をかしげるボクの際を突いて抱き付く。背の低いボクより小さ
な少女は満足そうに溜め息をつくとぼつり、呟いた。

「君が女の子だったらいいのに」

言ったあとで気がついたのか、すぐに顔を上げて舌を出す。謝る
ほどのことじゃない。でも彼女の謝り方は心から伝えてくれるそれ
だから胸心地は悪くならない。

「またおやすみ時間にねー」

それって就寝時間じゃないのというボクの疑問は口に出さなかつ
た。ボクたちは元氣娘を見送ってからホームルームが始まるまでの
時間雑談をしようと二人の会話に戻ろうとした、そのとき。

「お、どうした？」

ボクは彼のその問いに答えられなかった。視線と意識は違うほう
を向いて止まってしまった。肩に掛かる黒い髪は廊下を歩くスピー
ドに合わせて揺れる。ボクの世界はゆっくり時が流れた。見える角
度が変わるにつれて、見える表情が露わになっていく。首元のほく
ろ、すっきりした頬は笑うとえくぼになる。モデルのような鼻、主
張しすぎることはないそれには細めの瞳が似合う。前髪は垂らしつ
ぱなしだった昨日とは違い、ヘアピンで分けてあった。視線を落と
せば小振りな胸。もう一度、視線を上げる。

目が合う。一番静かに遅く、時間が流れる瞬間。

昨日は見られなかった表情。瞳を大きく開け、口を開くそれは
きつと驚きだ。新たな発見とまだ残る照れくささでボクの頬はゆる
んでしまう。ボクはあとで、と口パクで告げてみる。彼女は 頷
いた。きつと、伝わったのだと思う。そう思いたいという願望では

ありませんように。そうして、時間はスピードを増し、元のそこま
で戻った。彼女を隠すように教師が入り、またいつもの月曜日が始
まる。ボクは静かに唇を指でなぞった。……まだ残っている唇の感
触を確かめるために。

授業中、何も手に付かない。黒板の字は確かに読めるのに、写そ
うという気が起きない。あとで友達のノートを借りよう。純平のは
頼りにならない。だって、寝ぼけて宇宙文字を書いているか字が汚
いかの二択しかないのだから。しかもその二択、どちらを選んでも
はずれ。だったら安全な方を選ぶよボクは。

溜め息ばかりついていたら休み時間、純平に訝しげな表情をされ
た。

「おまえ、パンクでもしたのか？」

「……なかなかセンスのある質問だと思うよ」

けれど、彼が彼なりにボクを元気づけようとしていることはわか
ったので嬉しかった。そして、あまり心配させても困るので気合い
を入れ直して授業に向かうことにした。昼休みまで、あと一時限。
彼女との再会までそう遠くはないはずだ。と、一つ思い直したこと
があった。昨日会ったというだけで、ついさっきまでこの学校の在
校生だとも知らなかったし、ろくに名前も訊いていなかったのだ。
夜の街を散歩してたボクにいきなり声をかけ、唇を奪い、（女とし
ての）ボクを虜にしまった彼女。なんでそんな肝心なことも訊
かず夜を明かしたんだろう。ボクは彼女のことをどう呼んだんたろ
う　うまくは思い出せなかった。

ちなみに、彼女は昨日の夜、ボクの首元にキスしたぐらいであと
は頼ずりとか猫なで声を出しながら悶えてました。それ以上の展開
はないんですから。勘違いしないよーに。

3rd・love: 違いたくて。

昼休み、純平の誘いを断って教室を出る。ぶーたれたいかつい顔が明日カツサンドおごりなとか言っていたが全然ボクには聞こえなかったよ、うん。かわいい女の子（心が）にそんなことをさせるなんて間違ってるんだぞって、ずいぶん都合のいいアイデンティティだよな、ボクのそれは。

結局ボクは何になりたいんだろうとか微妙に重いことを考えながら学校を散策してみる。彼女がどこにいるのかあてもなかったのにくまなく探してみるしかなかった。思考を一時中断して、いろんなところを見やるといつもは気にもしない細かいところが目に付く。

例えば窓についた指紋だとか、壁に付けた鉛筆の落書きだとか、廊下に無造作に置かれていたかわいげのない蛇のぬいぐるみとか？

「ってそれがここにあるのはおかしいっ」

「ごめーん、それ私のですー」

ぬいぐるみ（にしてはやたら光沢がある）を持ち上げて顔を上げる。申し訳なさそうに両の手を合わせた女の子が小走りで行ってくる。ボクはそれを手渡した。

「ありがとうございますよ、りっちゃんくん」

「どういたしまして、美緒先輩」

ところで、と彼女の口調が変わる。何かおかしいことでもあっただろうか。怒ってもかわいいから困る。きつとクラスではマスコミ的存在なのだろう。

「さっきマロンちゃんをばっちく指で持ってたのはなんでかなあ？」
いや、だってそれちよつとヌルってしましたよ？

「うーん、きつとそれただの仕様」

触るとぬるぬるするぬいぐるみって聞いたことがないんだけど、どう対応した方が安全なのかしら。

「巻きますか？ 巻きませんか？」

「巻きませんっ」

ボクは即答した。ただのぬいぐるみだから大丈夫なのに、という彼女。その一言からはそういったニュアンスが伝わってこないんです……！マロンちゃん（という名前らしい）を首に絡ませ、にこにこしながら彼女は去っていった。あまりのインパクトに質問をしそこねてしまった。といっても身体的な特徴を伝えたところでわからないだろうし、しょうがないと片付けた。

また搜索が始まる。限られた時間で彼女の姿を見つけられるとは思わなかったけど、何もしないよりはいい。もとより、ボクは探検とか探索とかすることが好きだ。よく男の子に混じって遊んでスカートを汚したっけな。昔から女の子のつもりでいたんだけど、家でじつとしてるタイプではなかった。ほら、よくいう行動的な女の子。ボクはそんな感じだった。

ボクは一階まで降りて、引き戸に手をかけた。芝、緑木、草花がそれぞれ協和する空間。古びた学校の唯一胸を張れるところ。この中庭はコの字型に建てられてた校舎を挟んだところにあり、よく日が当たる。用務員の方が毎日手入れするおかげもあり、とてもよく整備されていた。そう人気の多い場所といったこともないのだけれど、シートを広げ昼食をとる人たちの姿があつたりする。騒がしくなく、かといって寂れていない居心地のよい場所だった。

おなか为空いているのもすっかり忘れ、人捜しに夢中になっていて、それゆえに彼女の姿を見つけることはできなかった。

ボクからは。

「みつけたっ、私の子猫さん」

制服の上から胸をもみしだいてくる。ボクにそれが無いってわかってるでしょ……。

「あれ、意外と胸あるんだな？」

「パッドです」

短い解答におなかを抱える彼女。そんなにおかしなことかな？ひ

としきり笑ったあとに、またボクに抱き付いた。さすがに気がついたのか、お茶会をしていた数人や窓からボクたちの姿を見かけた人たちがボクたちを見てくる。目が合うとそらすあたり、やましいことでも考えていそうな気がした。

「一つ提案がある」

肩にのせていた顔を上げ、ボクを見つめる。まっすぐすぎて、直接できない。ボクは頬に熱を帯びていくのを感じながら、首肯した。「なんででしょう」

「性転換しないか」

ストレートすぎます。それにそこまでしようなんて思っていない。いずれはきつと……このままではいけないのだから。残念がる彼女に微笑みだけを返す。立ち話も疲れるだろうからとボクをベソチへと誘う彼女。

「きつと君のことだから、私を捜すので頭がいっぱいだっただろう？」

そんな君のために多めに作ってきたんだよ、と弁当箱を広げる。はい、と彼女の手にあるのはサンドイッチ。ボクがそれを手に取るうとすると言げな目をされる。カツの入ったそれが遠ざかる。こういうときは口を開けて待つものだという。

「って、は、はずかしいですよ……」

気にするな、ほら、と促される。彼女が喜ぶのならそれでいいか、と思つて口を開ける。一口だけかじり、味わってから飲み込んだ。

「おいしい」

自然に、頬がゆるむ。どうおいしいか説明するのも野暮つたいぐらいだ。説明せずに、ボクだけの知る味にするのも悪くない。そう思えた。

「本当か？」

料理好きのボクが言うんだから間違いないです。そう微笑みを彼女に向けると、満足そうに目を細めた。食事の続きを彼女がせかす。ほとんどボクがサンドイッチを食べてしまった。

「食べなくていいんですか？」

そう訊くと、あんまりおなかは空いていないんだと答えが返ってきた。

弁当箱が空になると同時に予鈴が鳴る。ボクは心からお礼を言った。

「食べたいものがあつたらなんでも言ってくれ、おねーさんが腕を振るうぞ」

気丈よさそうなのはれとした笑いをボクに見せてくれる。白い八重歯がのぞき、また一つ彼女のチャームポイントを見つけた。これからいくつ見つけられるだろう。楽しみでしかたなかった。

別れ際、ボクは彼女の名前を訊いた。今までよく会話できたな、と苦笑混じりに彼女は言った。女の子らしい名前ですねと率直な感想を述べると彼女はむくれた。

「むむ、私はこれでもれっきとした女の子なんだぞ、ちなみに一つ先輩だ」

そのあと、二人で微笑みを交わした。じゃあまた会いましょう。そう言うともう一度ひと抱きしめてくれた。ボクはその名前を忘れないように何度も、何度も心に刻んだ。

4 t h . l o v e : その気になって

放課後になるまでさんざん純平に中庭での出来事で冷やかされた。彼はこれから陸上部の練習へ向かう。ほんと、朝練だってあったのによく身体が動くなあと感心する。ボクならランニングでへばつてしまいそうだ。小学生のころはよく動いたけれど、中学のころからさっぱり運動しなくなった。色々あって、一人で遊んだり本を読むことが多くなったからだ。そんな内向的な世界から引つ張り出してくれたのは純平だった。彼の背中を見送りながら、改めてありがとうと思う。

ボクは教室を出る前にぼんやりとグラウンドへ目をやった。新人戦が近づいていることもあって、そこは活気に満ちあふれていた。この学校は部活動が盛んで、運動部文化部問わず優秀な成績を上げている。ボクも一応部活には入っているものの、幽霊部員状態になっていた。ボードゲーム部なんて、あつてないようなものだし、そもそもつじつま合わせで入部を頼まれたので行かなくてもいいことになっていた。一年以上行っていないければ、行く意味もないし。

人気のなくなった教室を出た。階段を下り、玄関に向かう廊下は人気もなく、春が過ぎたのに少し肌寒い。なんとなく通り過ぎていく道でも、不安になっているボクははたして何を気にしているんだろう。気を取り直して美術準備室の横を通り過ぎようとする。

耳がざわついた。

玄関はもう目の前だ、そのまま帰ることもできる。第一、何かの聞き間違えかもしれない。でも、聞き覚えのあるその音は無視できない要素でもあった。振り向いて、音がした方向へ向かう。足音は立えないように。確かに、聞こえる。とても、微かだけれど、その微かな声はボクの耳に届いた。

それと同時に罪悪感も芽生えてきた。美術準備室の扉の前まで来ると話の内容がなんとなく分かった。そして音が漏れている理由も

やや開いた引き戸はまるでボクを誘っているようだった。ボクが取るべき行動は一つのはずなのに、取ってはいけないそれを選んでしまいそうになる。少しだけ残った理性がボクを思いとどまらせる。けどそれも　突然膨らんだ甘い声に消された。

大きな声を出しちやいけないとたしなめる。ボクはその声の主を確かめに一步踏み出す。隙間から覗き見えたのはこの場所にはふさわしくない、甘く苦い世界だった。

ボクの目に映る二つの横顔は恥じらいと期待で朱に染まっているようだった。制服はわずかにはだけ、肌の色が露わにされていた。二人は腰を下ろし、一人の女生徒を後ろから抱き寄せている。抱き寄せる彼女の片方の手はあごをなぞり、もう一方はゆっくり身体を愛撫する。目を離したいのに離せない。その行為に夢中になっている彼女たちが自分の知らない人だったら、すぐに目をそらしただろう。確かに抱かれている人は知らない。一年上なのは校章のバッチの色で分かった。でも同じ色のそれを付けるもう一人は、ボクの知っている人だった。

思考がぐるぐる回る。疑問符ばかりが浮かんできてくる。なんで、の問いはその数を増していく。その時点でボクは彼女に惹かれてしまっていたのだと気付かされた。たった一日の邂逅だったのに、ボクは彼女を必要としていた。だからこそ、この風景は　痛い。この感情は言葉にできるものなのか、ボクにはよく分からなかった。嫉妬？……違う。怒りじゃなくて、もっと切なく繊細なもの。ふと、彼女の一言がよみがえる。　残念ながら、私は男に興味がないのだよ　　やっぱり、ボクは彼女にとって意味のないものなのかな。ボクの身体は、女の子とは違う。どれほど女の子らしくあっても、それゆえに、女の子『らしく』でしかない。ボクは、ボクは　。

静寂は急に破られる。

気付いたときにはボクの手から鞆が落ちていた。地面はそれを呼んで、騒がしく存在を主張させる。息を飲むボクは鞆から隙間へと目を向けた。彼女と視線が合う。ボクは耐えきれなくて目をそらし

た。ずるいことをしたのはどっちか、もうそんなことどうでもいい。ボクはもう一人の生徒に気付かれないうちに鞆を廊下から奪って、逃げるように美術準備室をあとにした。

ああ、視界がぼやけている。玄関はどっちなんだろう。ボクは前に進めているのかもわからない。歩みがやがて止まる。頬に伝うしよっぱい水は、きつとボクの心だ。この泉が枯れ果てたら、すべて元通りになりますか？我慢すれば、この思いを閉じこめれば、彼女は幸せになりますか？もしそうなら、ボクはそれを選ぼう。難しいことじゃない。難しいことじゃないんだから……。

だから、そんなに優しく後ろから抱きしめないで。こんなに早い結末だったけど、あなたに会えて嬉しかったから。

「そんなこと、言わないでくれ」

でも、あなたは彼女を選んだ。ボクはどう悪あがきしても男になるしかないなら、あなたの理想にはなれない。

「違う、話を聞いてほしい」

これじゃ、あなたの方が男みたいだ。泣きたいのか、笑いたいのかわからなくなって口元が歪む。彼女は抱きとめる腕を弱めない。強く打ちつけつづけていた鼓動と逃げ出したい気持ちは自然に静まっっていく。けれど、消えない。この痛みだけは。

「彼女のことを好きでやったわけじゃないんだ」

「ひどい人です」

反射的に、そう言っていた。あなたは好きでもない人を抱けるの？あんな、甘い囁きを誰の耳元へでも伝えられるの？そんなずるいことってない。

「あの人もそうやって言うんですか？……君のことは愛してないんだって。あの人のことをあんなにして、それでも愛してないんだ」

彼女の腕をとると、力なくしがらみは解けていった。ボクは向き直り、涙を制服の袖で拭いた。今のボクがどんな顔をしているのか、彼女の瞳からはうかがい知ることができなかった。無言の彼女に、

ボクは別れを告げる。

「彼女を、選んであげてください」

今のボクは、うまく笑えているんだろうか、よくわからなかった。「ボクは、あなたに会えて本当に楽しかったです。……ちゃんと名前も呼べなかったけど、あなたに触ってもらって、すごくときどきしたけど、恥ずかしかったけど、それ以上に、嬉しかったです、だから」

だから、これで最後にしましょう。傷付くのはボクだけでいいから。

「あ、あの、なんかシリアスなシーンおじゃましてすみません」

新たな声に足が止まる。ほんと足を止めるべきではなかったのかもしれない。でも、ボクは立ち止まり、振り向いた。

さっきの女生徒がふたりの様子を見ていかにも拳動不審な様子であわてていた。

「わ、わたしにはなぜこんなことになっているのか全く理解が追いつかないのですがっ」

ボクより背の高い冷静な彼女も首をすくめる。

「さっきから全く話を聞いてくれないんだ、おかげでちょっと修羅場。代わりに説明願いたい」

頷いた女生徒は一度何もなかったところでつまずいてから、ボクに向き直った。背はボクと同じぐらい。さっきはしていなかった眼鏡をかけていた。

「簡潔に申し上げますと、私、部長にマッサージしてもらったんです。確かに体勢は怪しかったですが……」

……さて、状況を整理しようか。ボクは何を見て、何を見てないのか。それとも、その余裕すらないのだろうか。

「そもそも、のぞき見たのはどこの誰だったかなあ？」

「私は肩周辺のマッサージしか受けてないんですけど。なぜあごを触っていたのかはよくわかりませんが」

「あれは顔の引き締めだ。ちゃんと意味があってやってるんだぞ」

涙が引つ込んでいく、それはもう鮮やかに。驚くぐらい。なぜ、ボクを美術準備室へ連れ込もうとしてるんですか二人とも！

「何、君も同じことをしてもらいたいんだろう？ 乙女二人にされるなんて天国じゃないか、これ以上何を望む？」

私を困らせた罰だ、と最後に彼女 菜月清華^{なつきさやか}さんはにんまりと笑うのだった。

5th・love：化粧

夜、三面鏡を見つめるボクはどんどこわいらしくなっていく。化粧のテクニクではまだかあさまにかなわない。どうしてチークが自然にたたけるんだろう。ボクがやるとどうしてもわざとらしくなってしまうくない。

かあさまは最後に背中まで伸びた髪をすいて、肩をたたいた。鏡ごしに微笑む。ボクは目の前の自分に見とれていた。まるで、
「私たち姉妹みたいね」

かあさまがボクの気持ちを代弁してくれたように、鏡に映る二人が親子には思えなかったからだ。ボクは童顔だし、かあさまも母というより仲のいい姉のような身なりだからだ。背もボクとあまり変わらない。ボクは胸がくすぐったくて目を細める。

「うん、かあさまの言うとおりだと思う」

ふわふわとしたフリルのついた寝間着を彼女は着ている。かあさまがボクに化粧や女装をさせるのはボクが幼いころからの趣味だった。そしてボクはそれを違和感なく受け入れてきたし、これからも続けると思う。どんなメイクのお仕事よりも、ボクをメイクしている瞬間が一番好きだと言ってくれる。そのことがとても嬉しい。

玄関まで見送ってくれたかあさまに、ずっと訊きたかったことを口にした。

「なんで、とめないの？」

心底不思議そうに首をかしげる彼女。靴を履くために彼女に背を向けた。

「だって、こんな夜中に歩くなんて、普通だったら止めない？」

「あら、りっちゃんママに止めてほしいの？」

そうじゃないけど、とボクは口ごもる。するとかあさまはかがんでいるボクを後ろから抱きしめた。

「もちろん心配よ、暴漢に襲われないかって夜も眠れないくらい」

暴漢ではありませんが女性に襲われたことはあります、と言おう
と思ったけどやめた。話がこじれてしまう。

「でも、りっちゃんのこと信じてるから。それに、どんなに遅くな
っても帰ってきてくれるしね」

さらりと言われ、頬が暑くなる。まるで子供を寝かしつけるか
のような優しい声が耳を通して胸に響いた。温もりが不意に離れ、ボ
クは後ろを振り向いた。

「今日は人に逢いに行くんでしょう？」

……なぜわかるのですかあさま？ その問いに彼女はとぼけて
ごまかした。

最終のバスに乗り、三十分ほどで駅前に着く。いつものことだか
ら運転手さんも素性を訊いたりしない。降りると不意に風が吹き付
けて身体が震えた。制服に軽い上着で十分だと思っていたけど甘か
ったみたいだ。もう五月といっても、そうだからこそ温度差は激し
い。足に鳥肌がたつてないか確認して、スカートの裾をなおした。

大通りに出ると、いくつかの群衆がまとまって行動していた。大
声を出して、馬鹿笑いしながら歩く様子を見ているときつと酔って
いるのだろーと思った。スーツ姿の人たちがいれば、大学生なんだ
ろー、私服の人もいた。

ボクはそんな人たちを避けたり気付かれないように小さくなりな
がら、駅に背を向けて大通りを進んでいった。そんなことしなくて
も気にとめる人なんていないことはわかっていた。でも、気を抜く
ことはできない。こんな夜に、味方は一人しかいないのだから。

裏路地に入る、待ち合わせの場所まではもう少し。少し肩の力を
抜く。それがいけなかった。

「ねえ、君。こんなところでどうしたの」

熱っぽい声はうわずって汚れている。ボクは無視するように道を
急いだ。それでも声は耳に入ってくる。

「なんで逃げるの、どうせウリでもやってるんでしょ」

うるさい、勘違いするな。振り切ろうとした瞬間、男が走り出てきた。不意を突かれてスタートを切るのが遅れる。たやすくボクに何かが触れた。首だけを動かし、それが腕であることを確かめた……こんなやつがいることに腹が立つ。力のないボクはたやすく男に捕まり、無理矢理振り向かせられた。

何処がおかしな方向を見ている男。身がすくみ、どうしたらいいかわからなくなる。

「こうしてほしかったんでしょ、黙ってないでよ」

なでつけるだけの愛撫に吐き気がしてくる。ボクは必死に清華さんを呼ぼうとした。けれど、声が出ない。

「すぐに気持ちよくしてあげるから」

「ほう、ならば私が先に逝かしてやろう」

その言葉をきっかけに、男の力が弱まる。気付けば首に回された白い腕がしっかりと男をとらえていた。男も強く抵抗しているはずだけど、その後ろの女性は涼しい顔でホールドしている。

「二度と女子に手を出さないと誓うなら、この腕を放してやってもいいが」

「な、なんだ、このあま……ナイチチが」

「お前が死に憧れていることはよくわかった」

ぐっと力が込められる。同時に男が蛙の鳴き声のようなうめき声を上げる。少し間をおいて彼女が力を弱めると横に図体のでかい男は力なく崩れ去った。

「心配するな、殺してはいない」

男に襲われたことよりも目の前の女性の強さに驚きを隠せない。それを心配ととらえたのか清華さんは男の無事を伝えたのだった。立ちすくんだボクの制服を直してくれる。最後にはこりを払うようにスカートの脇をたたくといったものようにしっかりと抱きしめる。

「遅くなってすまない」

もう大丈夫だから、と言ってくれる。しばらくそうしたあと、身体を離れた。自分の胸をなでながら、疑問を口にする。

「胸の小さい女はその、嫌いか？」

清華さんでも気にするのかと新鮮な気持ちになって、ボクはつい笑ってしまった。

「むむ、失礼なやつだと思わんか？」

「ごめんなさい、だってかわいいこと言うんですもの」

なおさら失礼だ、とすねた彼女は頬を膨らまし、そっぽを向いてしまった。謝っても、なかなか目を合わせてくれない。こんなときの奥の手、はたして効くだろうか。

「清華さん」

「なんだ」

「キスしたら許してくれますか？」

ばかもん、と小さく小突かれた。それでも、彼女の腕を掴んでみる。抵抗はなかった。もう一方の腕も掴み、ボクに向き合わせる。う……今の清華さん、すごく熱っぽくボクを見つめてきて、その、ものすごくかわいい。かわいいなんて便利な言葉じゃダメだ。ものすごく、愛おしい。

「ばかもん、そう言われたら……許せないわけがないだろ」

瞳を閉じる直前、そう愚痴る彼女の声が聞こえた。

6th・Love:Peace Of Mind

「この人、まだ起きませんね」

よくよく冷静に考えれば、この状況はあまり喜ばしいものじゃない。とはいうものの、放っておくわけにもいかないし、

「ほっておけ」

と、提案する前に答えがきた。汚いものを見るような目つきでもっとも、彼女にとってはそうだと思う　それを一瞥する。

「自業自得だ。女子供に手を出そうとするやつは死ねばいい」

さらりと恐ろしいことを言ってくれる。こめかみに皺を寄せ、視線をそれからそらす。清華さんはボクを見るころにはすっかり笑顔になって、ボクに目を細めた。さあ行こう、とボクの手を取り促す。教訓、清華さんを怒らせると怖い。

最初に会ったときに履いていた黒のタイトパンツ、灰色の上着の上にジャケットを羽織っている彼女は凛々しく、夜の闇に溶けることなく歩みを進めていた。手を繋いでいるからはぐれることはない。さっきまで感じていた寒気も彼女がいれば気にならない。

「今日はちよつと寄りたいところがあるんだ」

そう言う彼女はどこか嬉しそうで、語尾が弾んでいるようにも思えた。大通りを堂々と歩く清華さんと、恥ずかしさで下を向くボク。この二人は道行く人にどう映っているんだろう。それとも誰の目にも映らず、風景の一部にちやんとなれているんだろうか。よくわからなかったけど、彼女がいてくれるから不安にならずにすんだ。ボクが彼女に目をやると、彼女もボクと目を合わせてくれた。そこで立ち止まり、道端でぽつねんと突っ立っている自販機を指さした。

「あそこで一休みしよう」

気を遣ってくれたのかもしれない。歩いて数分も経っていなかったから疲れてはいなかったけれど、その言葉に甘えることにした。彼女は無糖のコーヒー、ボクが果実入りのオレンジジュース。自分

で買おうと思っただけで清華さんに断られた。やっぱり温かな飲み物にしとけばよかったと舌を出すと彼女が苦笑した。とりとめのない話をして、今度は手を繋ぐに、目的地まで歩いた。

大通りをまっすぐ、駅からはずいぶん遠ざかる。目の前に四車線の大きな橋が見えたら、その手前の信号を渡って左へ折れる。ぐつと人氣が少なくなった。時折タクシーがボクらの横を徐行して、やがて遠ざかる。それぐらいのものだった。裏路地に入り、目に入る古ぼけた看板は切れかかったライトで照らされていた。そのいくつかを通り過ぎて、彼女の足が止まった。

店内に入ると人の良さそうな若い女性が出迎えてくれた。ダイニングバーよろしくの店内には他にお客さんはいないようだった。小声で清華さんに尋ねると親戚が開いているお店だということをお教えしてくれた。ボクたちはカウンターに座る。キッチンではいかつい男性が小さなコップを丁寧に拭いていた。

「マティーニ」

「嬢ちゃんにはまだ早いぞ」

そう言いながら、カクテルグラスに紅色のシロップと砕いて細かいけらになった氷を入れ、硝子ビンに入った液体をそこへ満たした。小さな泡がかわいらしく揺れる。

「これは何？」

一口飲んだ彼女が不思議そうにグラスを見つめる。

「シャーリー・テンプル」

そう言っただけで、マスターは簡単なレシピを彼女に教える。アルコールが入っていないと知って不服そうに目を細めると、彼は豪快に笑った。

「そんな顔をするお子様にはぴったりだろう？　んで、おまえさんはどうするんだ」

どうする、と言われてもこんなお店には来たことがないし、お酒の知識もないので悩む。どうしようかと思いいくぐねていると清華さんが助け船を出してくれた。

「プッシー・キャットを出してやってください」

「わかつてるじゃないの」

にんまりとするマスター。正直大熊が口を開けたのだと思いまして、はい。彼が色鮮やかなくつかの液体と氷をシェーカーに入れたかき混ぜている間、さっきのママさんは棚をいじっていた。やがて懐かしさを含んだ音楽が流れ出す。

「ベイカーブラザーズのセカンドか、悪くない」

「さやちゃん詳しいわねー」

カウンターに置いてあったタンブラーを片手にママさんは瞳を輝かせる。

「私が好きなのは、彼らのように狙って懐かしいサウンド作りをする人たちなんです。ただ古いだけのものとか、ただ新しいだけのものにはあまり興味がない」

そうグラスを空けた彼女はかわりを頼む。了解したマスターがボクの元にグラスを置いた。赤みがかったオレンジに、スライスされた果実が飾られている。甘酸っぱさがなぜか胸を締め付けた。ちびちびと飲みながら、なぜこれを頼んだのか気になった。

「マスター、『プッシー・キャット』ってどういう意味なんですか？」

そう訊いた途端、またもや意味深な笑顔を浮かべ、ヒゲをさする。そしてボクの横で清華さんは難しい顔で口元を歪ませていた。酔ってもいないはずなのに、彼女の頬が赤くなる。

「さあな、あとで嬢ちゃんに訊いとくれ」

その通りにしようと思い、その質問は先送りすることにした。しばらく音楽に身を委ねる。清華さんは二人と音楽や身の上話をしていった。段々とぼんやりしてくる。睡魔がまとめて、一気に襲ってきたみたいだった。

……肩を揺らされるまで、ボクは寝ていたらしかった。眉尻を下げ、軽い溜め息をつく清華さん。

「置いてけぼりにしてしまっただか、その　かわいい子猫ちゃん」
頬をかく。ボクは一瞬きよとしたあと、何を言われたかはつきりした瞬間に熱が上がった。こういうときに浮かぶ言葉なんて、何もない。マスターは腹を抱えて笑い、ママさんが彼を酔い半分に止めていた。

また来る、と彼女が二人に別れの言葉を告げ、店を出た。少しお酒の匂いがする。ごまかすように彼女はガムをかみ始めた。ボクにも一粒くれる。苦く、冷たい。目がさえたところで、清華さんはボクに尋ねた。

「夜中で歩くようになったのはいつごろから？」

それは高校に入る前の春休みからだったから、ごく最近の話だ。この姿で夜道を歩いてみたかったと話すと心底からとも思えるほどの溜め息をついた。

「さつきみたいな経験をしたのは？」

それは実は初めてだった。注意深く行動していたつもりでいたし、あまり危ないところに行かないようにしていた。

「では私みたいな女性に襲われたことは？」

私みたいな、というかいきなり壁に追い詰めて唇を奪う人なんてあなた以外知りません。そう言っても最初は納得しない彼女。真剣なやりとりをする前に二人とも笑えてきてしまった。

「そうだな、たしかにそうだ」

二人は違う方向の列車に乗って、一緒に帰った。そして日付が変わる前にボクたちは別れた。

7th・love：朝の眩しさと気怠さと違和感

寝不足のまま夜が明け、ボクは大きなあくびをしながら緩い坂を上っていた。桜が散ったのは一ヶ月ほど前のことで、今は目に鮮やかな緑道となっていた。まだ寒い夜の風も、朝になると柔らかくボクの素足をなでていった。ひとつ背伸び。細めた目を開けると、見覚えのある後ろ姿を見つけた。走って、彼女に追いつく。息を整え、挨拶をした。清華さんは微笑み、挨拶を返してくれる。見上げる彼女の後ろから日が差し込んで、まぶしかった。

坂は緩いカーブになっていて、曲がりきるとそこが校門だ。二人は他愛もない話をしながら坂道を進んでいく。ずっと話していられたらいいのに、そう思ってもそれは願わない。だからせめてたくさん話をして、気持ちを紛らわそうと思った。校門を抜け、他の制服たちと同じように玄関へと吸い込まれていく。一年の下駄箱と、二年のそれは両端にあって、ボクたちは真ん中で手を振った。

教室も彼女とは逆方向だ。よくよく考えれば、清華さんがボクの教室の横を通ることはおかしなことだった。三階には特別教室もないし、よほどの用事でなければ上級生が来ることはない。あ、美緒先輩は別。遅刻というリスクを冒してまでもボクたちと雑談がしたいらしい。というかボクに触りたいらしい。ひとつ先輩ではあるけど妹みたいにかわいらしい人なのでそれは別にかまわないけど。

噂をすれば、なんとらだ。廊下で美緒先輩に挨拶をすると彼女は勢いよく頭を下げ、そのモチベーションを保ったまま顔を上げた。

「ふえっ？」

そしてなぜか背中から倒れそうになった彼女にあわてて手を差し伸べる。背中に手を回すと彼女を抱きかかえる格好になった。

「ふわあ」

「ふわあ、じゃないですよ。どこに重心があつたら転びそうになるんですか」

「ん」

さつきから日本語になってませんよ先輩。怪訝に思いながらも気をつけてくださいと抱き起こし頭をなでた。

「なんか、さつきからりっちゃんくんが王子さまみたい」

ボクを見上げる二つの輝く瞳が、まっすぐ見つめていた。まあこんななり（女装制服）だけだね。ボクが教室に入ろうとするとくいつ、とボクのスカートの裾を引っ張る。振り向くと、うつむく彼女。「あの、よかつたらまた、さつきの……だっこしてください」

なんだかおこちゃまになったようです。変な先輩だと思いながら了承する。なんだか腑に落ちないようなもやもやした気分になりながらも教室に入る。と。

「どうしたのですか、お姉様っ」

ボクが呼ばれたわけではなかった。廊下からしたその声は美緒先輩のもので、それは違う誰かに向けられていた。困ったように返答は揺れている。

『いや、気になって来たただけだが……』

聞き覚えがあつて足が止まったけど、とりあえず荷物を置き、再び引き戸を開けた。目に飛び込んできた風景に思わず和んでしまった。全身で女生徒に抱きつく美緒先輩。とても心地よさそうに目を細めている。チークを付けたかのように頬が暖かな色に染まっていた。対する抱きつかれたほうはどうしたらいいか困っているようで、どうしようもないといった様子で頭をなでていた。

「りっちゃんくんも気持ちいいですが、お姉様にはかまいません」
ああそうですか。さつき感じた心のもやもやが今となってはどうでもいいものに思えてきた。こうしてみると、まるで仲のよい姉妹のようだった。もっとも、姉のほうは扱いに困っているようだったけど。

「どうしたの、清華さん」

「律の様子が気になって来たのだが、思わぬ伏兵にやられてしまった」

「はうつ、美緒は敵ですかっ？」

ぱつと清華さんへ見上げる。せわしない女の子は何かに気付いた様子で言葉を繋いだ。

「なんでりっちゃんくん用事があるのですか？」

なんで、と訊かれて、清華さんの目があからさまに泳ぐ。ボクとも目をそらす。言いたくなさそうにしていたが、意を決したのか口を開いた。

「律に会いに来たんだ、文句あるか」

ぶつきらばうに横を向く。そういう仕草がかわいらしくてボクは好きだ。それでも納得できないのか、美緒先輩は意地が悪そうに質問を重ねてくる。

「りっちゃんくんとお姉様ってつながりありましたか？」

清華さんがボクたちの仲をおおやけにしていけないのならば、理解できる質問だ。けど、正直ボクにはうまく説明できそうになかった。清華さんが頼みの綱になる。

「まあなんというかその、律とは要するに 恋人関係なわけだ」

うわぁ、思いつきリストレートに言いましたね、しかもそこに行くまでの過程を全く説明せずに。美緒先輩は清華さんから離れ、ボクたちを目やり、目を細めて手を振る。

「ないない。またまたご冗談を」

そのまさかなんですけどね。あの夜に出会えていなければこうなることもなかったんだろうし。大ざっぱに清華さんはいきさつを美緒先輩に説明している。話を聞くにつれ、先輩の唇がわなわなと震えていくのがわかった。ぼく、どうされてしまうんでしょう。

「むー、ということは美緒とりっちゃんくんはライバルというわけなんですわね」

大幅にリードしているのはボクだということはあえて伏せた。人差し指をボクに向け、大きく息を吸い込み、決めぜりふひとつ。

「絶対お姉様を私のものにしてみせるんですから！」

うーん、別に清華さんを自分のものにしたいわけじゃないんだだけ

どなあ。そろつと戻らなければいけない時間になつて、二人は退散した。教室に入り、自分の席に着くなり机に突つ伏した。頭に鈍い刺激。顔を上げると純平がにやけた顔でボクを眺めていた。さつきボクにチョップでもかましたのだらう、手刀を右手に作っていた。

「朝から賑やかなこつた」

なぜか三角関係に持ち込まされたボクの身もなつてほしい。ボクのそんな思いも意にせず彼はあごをさする。

「しかし、お前が菜月清華とねえ……」

彼女のことを知っているのだらうか、ボクは尋ねてみたけど返ってきたのは素っ気ない返事だった。

「名前しか知らねえよ、男勝りだとも知らなかった。まあ、お似合いなんじゃねえの？」

彼が色恋沙汰の話になるとどこか投げやりになるのはいつものことだ。色恋沙汰というよりも、ボクの動向に関心があるのだと思う。「まあ、一言言えるとしたら、美緒ちゃんは意外と強敵だと思つぜ？」いつも先輩を変な呼び方で呼ぶ純平が口を大きく開けて笑う。知っているような口ぶりにさつきから違和感を覚えながらも、ボクは振り返ってきた睡魔に負けたのだった。

8 t h . l o v e : 増えていく違和感、ささやかな幸せ

昼になり、ボクは立ち上がった。むかう場所は決まっている、中庭だ。何をしに行くのかも。清華さんに逢いにいく。身体を扉へ向け、外へ出ようとしたのに、それを邪魔された。また席に座らされた。

「どうかしたの、純平」

「……まさか、昨日の約束を忘れたわけじゃないだろうな？」

はは、まさかこのボクが約束をおぼえてるわけじゃないか。そう開き直ろうとしたけどその前にやけにぎらぎらした目にやられてしまった。これを蛇に睨まれた蛙というのかな。よくわかんないや。

「えーと、カツサンドが何でしたっけ？」

よしわかってるんならこい。ボクはごつい手に腕を捕まれ、食堂まで連行されるのだった。

ここが戦場と呼ばれるようになったのは、いつのころからなのだろう。勝者には希望の食事が与えられ、敗者は黙って残り物かもつぱらまずいと評判のラーメンを涙ながらにすすするしかない。それがここでの唯一のルールだ。そしてその戦場へとボクも乗り込まなきゃならない。仕方ないと意を決する。『コロシウム』の名を持つパン売り場へ、ボクは身を乗り込んだ。

「はあっ、はあっ、はあ……」

「うむ、実に見事な戦いっぷりだったな」

思わぬ人の声に驚いて、パンを放ってしまう。清華さんがそれをうまくキャッチしてくれた。彼女もまた勝者のようで、片手に三個パンを持っていた。

「私はこれから中庭に行くんだが、一緒に来るか？」

本当は行きたかったけど、猛獣を怒らすのは勘弁だと思ったのでそれを断った。清華さんは何か考える風に目を閉じ、うんうん頷い

てから独り言を呟いた。

「たまには、食堂で食べるか」

そういうとボクの手を取り席へ案内する。その途中、純平にぶつかった。清華さんの足が止まり、掴む手の力が弱まる。

「真枝君……」

「なんですか」

短い言葉には感情がこもらない。手はいつの間にか離れて、所在なさげに指を曲げたり伸ばしたりしていた。純平は同じ言葉をもう一度、繰り返した。

「な、なんでも、ない」

そう返答した清華さんは目を泳がせ、右手は警戒するように左腕を掴んでいた。ボクは二人の物々しい雰囲気口に出せずにいる。やがて耐えきれなくなったのか彼女は顔を伏せ、失礼する、とだけ告げて食堂を出た。喧噪が溢れ、食堂に人がたくさんいたことを思い出す。三人しかいないと思ったことは錯覚だと気付く。溜め息をひとつ吐いて純平はボクを促した。怒りにも似た表情はもう彼からは伺えなくて、それだけに清華さんとの関係について訊くのはためらわれた。

「ごめん、ボク、清華さんのところに行ってくるよ」

昼食（結局ボクはラーメンだった）を食べ終え、そう話をするとな彼は表情も変えず、了承した。

「んなの勝手にしろよ、ただし」

俺の話はするな。そう釘を差された。ご飯粒ひとつないカレーの皿を横にずらし、カツサンドに手を出した純平はどこか不機嫌そう、それがボクのせいなのか清華さんのせいなのかはわからなかった。

中庭、いつかのベンチに彼女の姿を見つけた。目があっても彼女はそらしてしまう。ボクはそれでも清華さんの隣に腰掛けた。彼女は落ち着かない様子で視線をさまよわせている。ボクは彼女が話しかけてくれるまで待った。最初に口にしたのは友人を食堂に残して

よかったのか、ということだった。苦笑しながら　それはうまく笑える自信がなかったからだけど　大丈夫だということを伝えた。「さっきは取り乱してしまって、すまない」

あの生徒はどうしても苦手でな、とだけ理由を語り、またそれ以上は話そうとしなかった。ボクはそれで十分だと思って話題を変えようとした。くしゃくしゃ、と優しくボクの髪を撫でる少し冷たく柔らかな手。

「優しいんだな、律は」

違う、きつと違う。ボクはこういうやり方しか知らないから。単純で、不器用なだけ。だから、彼女の言葉に何も言えずに、ボクはなすがままにされていた。ゆっくり手を動かしながら、言い含めるように彼女は言葉を転がした。

「人は多かれ少なかれ、辛い過去を背負いながら生きていくものだ。いつ癒されるかもわからない、癒されことなどないかも知れないそれを嫌でも背負わなければいけない。でも今のことを思えば、人は常に幸せなんだと思えないか？」

たとえば、私が愛しい人に触れられていられるように。でもボクは今は幸せなのかよくわからなかった。この世界はわからないことだらけだ。そして、知らなくても明日はやってくるし、確かに日常が訪れる。たとえそれをいいこととは思えなくても、今隣に自分の好きな人がいることは確かだから、幸福を願おうと思った。

9th・love:トライアングル。

教室に戻る途中、不可思議な行動をとる美緒先輩に会った。マロンで遊んでいるのだと思うんだけど、

「よくできましたですよマロンちゃん！ご褒美のカエルです」

なんだと……！というか持ち歩いているんですかカエルを？やばい、ツツコミどころが多すぎる！マロン（確か人形だったはずだ）は突然口を大きく開けカエルを飲み込んだ。胴体が丸く膨らむ。というか横切る人たちはなぜ通り過ぎていくんだ？カエルの補食シーンですよ？

「はうつ、見ましたですねりっちゃんくん！」

振り向いた彼女に見つかってしまった。彼女に背を向けると、

「このまま帰すわけにはいかねーです、マロンちゃん」

そう叫んでマロンに命令した。ねえそれ絶対人形じゃないでしょ、なんでボクの足に絡みついてきたの、こいつ刺さないよね、大丈夫だよ？ハイソックスごしに締め付けるぬるぬるに背筋が凍る。

「たいした毒じゃないから心配しないでくださいです」

「やつぱりあるんだ！？」

「見てしまったからには仕方ないです、マロンちゃんは実は人形ではないのです」

一目見た瞬間からそんな予感はしていたんだけどね。あるときよく動かず人形のフリができたなと感心する。

「ちなみに将来はスネークマンショウを私と組むのです。そうでしょう、マロンちゃん」

マロンちゃんは反応したようにいつの間にか回り込んだ美緒先輩に顔を向けた。ああ、まだ消化し切れてないものがこぶになってて気持ち悪いよう……。まじめに具合が悪くなってきたのでとにかく蛇を足から離してもらった。

「な、何でこんなのを飼っているんですか」

「こんなのとは失礼な。マロンちゃんはこの学校のマスコットなのですよ?」

嘘だつ、と叫びそうになった。その手前で思いとどまり、いつかそんな話があったような気がした。でも、これは何か違う気がする。「放し飼いで大丈夫なんですか?」

「まあ脱走したときはそのときです」

にこやかすぎます美緒先輩! だって動物が苦手な人だって学校にはいるでしょう? それをつつこんでものらりくらりとかわされる。気がつけば予鈴が鳴り、美緒先輩とマロンは教室へ戻ってしまった。理解できないことがひとつ増えた。

「ぜーったい納得できません!」

つん、とそっぽを向く美緒先輩と正対するのはボクと清華さん。

放課後、美緒先輩の教室まで出向いたボクたちはこのままボクたちの関係を隠し通すのは無理だと判断して、彼女に全部話すことにした。まあ、納得されないのは承知の上だったけれど顔を真っ赤にして怒られるとは思わなかった。

「だって、お姉様は私だけを見てくれると言ったじゃないですか」

美緒先輩はずいと清華さんに近づいてじつと彼女を見つめた。両手を胸の前でお祈りをするように組んでいる彼女は、清華さんの前だとすごく饒舌になる。次の瞬間には手を広げて訴えるような仕草をしたりと身振り手振りも大きくなり、芝居がかった感じにもみえる。もちろん自然とそうなってしまうのだと思うのだけれど、演劇部の部長をやっているだけあるなと思った。全身から溢れるパワーさだ。

「あれは、なんというか、言葉のあや」

「言葉のあやだなんて今更信じられせんっ! あのと私の私を見つめる目はとても透明でした、それを言葉のあやで片付けるだなんて……りっちゃんくん」

軽く傍観しはじめていた矢先ボクの名前を呼ばれたので驚いて身

体が震えた。

「な、なんでしょう」

「戦争です」

彼女は高らかにそう宣言した。これには清華さんも目をぱちくりさせた。というかさすがに物騒すぎる。これ以上彼女のテンションをあげるわけにもいかなないので何とかなだめようとした。

「ボクは美緒先輩と戦うつもりはないし、奪い合ったところで清華さんが喜んでくれると思いますか？」

「私は正直、君と律がそういうことをしているのを見たくないな」
うにゆう……と口ごもったまま黙り込んでしまった先輩。きつと清華さんの一言が効いたのだろう。わかりましたという彼女はやら疲れ切ったような表情を見せた。

「では、私は金輪際お姉様に近づいてはいけないということなのでしょうか……」

それは違うよ、とボクは教えた。みるみるうちに表情が輝きに満ちていく。ほんとに子供みたいな人だな、とボクの頬はゆるんだ。

「じゃあ、こういうのはどうでしょう」

ぼん、と手を叩いた美緒先輩はボクと清華さんの手を取ってぐつと自分のほうへ引っ張った。三人の身体が密着する。もつとも、清華さんに二人が抱きつくかのような形になってしまったけれど。

「ほんとのことを言えば、お姉様もりっちゃんくんも大好きなので。だからこれでラブラブです」

思わぬ三角形は綺麗な正三角形のようだ。彼女が満足するまでボクたちはこのままの格好でいた。清華さんと目が合う。困ったように眉尻を下げた笑み。でも、まんざらじゃない、そんな感情がなんとなくだけど伝わってきた。

10th・love: Love is not game.

部活があるというので美緒先輩とは途中で別れた。彼女の背中を見送ると小さく清華さんが溜め息を吐いた。

「本当に元気な人だな」

その瞳はどこか優しく、まるで妹を思ふ姉のようだった。ボクはそうですね、と頷きを返した。体育館へと続く廊下からは斜めに日が差し込んでいて、影はより濃い色を付けていた。二人はそこから背を向け、玄関へと歩き出した。

今日は美術部の活動はないらしい。よく考えれば、みんな部活動をしているのに何もしていないのはボクぐらいのものだった。ボードゲーム部の部室ってどこにあったっけ？生徒手帳を取り出し、部活教室の位置を確かめる。第一理科室。いかにもその手のゲームが隠されていてそんな場所だった。

部長がどこにいるかわからなかった（むしろ顔すら思い出せなかった）ので、教務室まで行って鍵を借りた。突然の活動に教師が訝しげになるのもよくわかる。変なことにだけは使つなよ、と余計な釘を差された。何を想像しているんだろう。

「なんか悪いことをしているみたいだな」

踊るような口調で清華さんが言う。誘ってみたら目を輝かせて首肯した。どうせ家に帰っても暇だし、退屈しのぎにはちょうどいい。教室に向かう廊下の途中でそう理由を明かしてもいた。

鍵を開け、教室へと入る。思いのほか薬品くさはない。ボクは教師に言われたとおりの棚を探して、また鍵を使った。がたつきのある戸をスライドさせる。いくつかのゲームが出てきた。何かできるゲームはあるか清華さんに尋ねる。彼女はオセロを選んだので、下校を促す放送があるまでそれで遊んだり、談笑したりして暇を潰すことにした。

楽しい時間はあっという間に過ぎていく。何で時間は一定に感じ

ることができないんだろ。あるいは、楽しい時間こそゆっくり流れてくれればいいのに。痛みや辛さなら一瞬だけでいい。二人でオセロを片付け、戸棚に鍵をかける。彼女は教室の扉に背中を預け、ボクを待つてくれているようだった。

教室を出ようかと促して、彼女の様子がおかしいことに気付いた。歯切れの悪い返事をしながら、決して譲ろうとはしない。どうかしたのか尋ねてもちゃんと答えてはくれなかった。カチャ、と音がする。

「なあ、鍵を閉めたら、もう誰もこれないよな？」

その確証はできないのに、ボクは納得していた。それよりも、彼女の考えがわからなくて、ボクは首をかしげてしまう。

「いや、もう帰りましようよ」

清華さんの目が潤む。次の瞬間、ひしと抱きしめられた。

「我慢しなきゃっていうのはわかってるんだ、でも、まだ私にはそれができそうにない」

ボクは彼女が暴走するのを必死に押さえた。このまま流されてもいいような気はしたけれど、どこでもそういうことをするのはさすがに節度がなさ過ぎる。だから、なだめた。言い聞かせるように言う、反抗心なのかほっぺをつねってきた。痛くない。

「つまらんな。私はてつきり雰囲気によられるかと思ったんだが」
どうやらボクを試していたみたいだ。そのことに気付いてボクも仕返してほっぺを掴んでやる。お互いに手を離し、ボクは不機嫌なつもりでつぶやいた。

「ボクは雰囲気恋するわけじゃありませんから」

言うてくれる、と彼女は笑った。そしてもう一度抱きしめてくれた。うんうん、と何度も頷く。

「やっぱり、私の選んだ人だな」

「どういう意味ですかそれ」

さて、なんだろうなととぼける彼女。今度は素直に扉を開け、ボクが鍵をかけた。部として機能しているうちはたまにこようと思っ

た。外は薄暗くなっている。二人でいられるまで手を繋ぎながら、ボクたちは家路を辿った。

最近ぐつとかわいくなった、とかあさまに言われた。その言葉とお手製のフレンチトーストの甘さが混ざり合って、ボクは幸せな気分になる。朝のニュースは相変わらず暗い出来事ばかりだったけれど、それでもコーヒー牛乳は甘い。コップなみなみと注がれたそれを飲み干し、食器を片付けようとした。ちょっと待って、とかあさまが立ち上がり、ハンカチをポケットから取り出した。

口元が汚れていたらしく、優しく拭われた。まだお子さまね、とたしなめられる。高校生にもなつてこんなことをされるのはどうかと思うけれど、おせっかい好きなあさまにされるがままになってしまう。最後に彼女はおどけたように、頬にキスをした。びっくりして思わずとびのく。ふふ、と口到人差し指を当てるかあさま。…ほんと、いたずら好きなんだから。ボクは照れをごまかしながら食器を洗い、着替えをしに自分の部屋に戻った。

玄関に続く廊下でかあさまが呼び止めた。指で自分の頬をさわり、何か考え事をしているようだった。ひとつ頷き、口にする。

「りっちゃん、もしかして今　恋をしてる？」

この人がわからないことなんて何一つないんじゃないだろうか。何でわかったのか素直に気になった。

「恋ってね、人を変えるとでも強力な魔法なのよ」

私も色々な恋をしているからわかるの。もちろん、愛してるのはパパだけよと付け加える。パパは今出張中で家にいない。ボクも大好きだから早く帰ってきてほしいなと思った。ボクにいろんな服を着せてそれを写真に撮るといふ趣味だけは何とかしてほしいけど。魔法か……。清華さんも魔法にかかった一人なのかな。頬がゆるむ。ぼおつとしているとかあさまに遅刻するわよと指摘され、あわてて家を飛び出した。青空はボクに届きそうもないぐらい高いところにあった。

どうやら走る必要はなさそうだと判断して速度を緩める。息を整えているといきなり腕に抱きつかれた。今日は毎の髪飾りが揺れるボクよりも背の低い女の子　美緒先輩だ。この時間ぐらいになると顔を合わせることになるらしい。もうやっているかもわからない商店街を通り過ぎる。通学路だから人はいたけれど、この通りに用のある人はもういないのだろう、シャッターはほとんど閉められていた。

「美緒が子供のころはこの時間帯もにぎやかだったです。町は変わってしまったです」

神妙そうに彼女がシャッターを見やる。ボクは語る彼女を見ていた。

「変わらないものもありますけどね」

「それは、もしかしたら、もしかしくても美緒のことをいつてますか？」

おもちみたいに頬を膨らませる彼女がかわいらしい。ほう、と溜め息を吐いた。

「正直、お姉様がうらやましいです。背は高いしかっこいいし、美緒の持っていないものをたくさん持っていますよ」

でも、胸は先輩と変わらないよと口走ってしまう。朝から何を言っているんだ。ちょうど坂にさしかかったところだった。

「朝から何を美緒に吹き込んでいるのかな？」

背中がざわついた。恐る恐る後ろを振り向くと腕組みをしてさぞかしご立腹のようすの清華さんがいた。眉間に皺が寄っている。口元は笑っているというよりも引きつっている。ボクは彼女のオーラに動けずにいた。まさしく蛇ににらまれた蛙だ。

先輩は彼女を見つけるやいなや飛びついていったので攻撃は免れた。怒りが戸惑いにかわり、また姉妹に戻る。ボクは遠巻きにそれを見て、先に学校へ向かおうとした。仲睦まじいことはいいことだ。それを先輩は逃げ出したと思ったらしく、清華さんの手を取って走り出した。すぐに追いつき、ボクの手を掴む。

「先に行っちゃダメですよー、三人で仲良しなんですから」
満面の笑みを浮かべる彼女は自分の言葉にうんうんと頷いた。

11th・love：式日

「あーあ、今までは俺が一人占めできてたのによう」

教室に入るなり、純平の第一声がそれだった。両手に花というか、ボクもまあ花のほうに入るんだけど、とにかく彼の声はひどくつまらなそうだった。

「純平君は授業中に一緒だからいいでしょー。あ、美緒もこの教室で勉強しようか」

それは学年的な問題で無理です先輩。純平も手を振る。

「美緒ちゃんがここにきたらうるさくてかなわねえや」

どーせうるさいですよー、と舌を出す先輩。清華さんといえば、居心地が悪そうにそっぽを向いていた。やっぱり彼女と純平とは何かがあつたのか、あまり彼女の態度は自然と思えなかった。

「あ、そろつと行きましようかお姉様」

「そ、その名前で呼ぶな、恥ずかしい」

「だってお姉様はお姉様であるからしてお姉様なんですもの」

頭がこんがらがる説明をして先輩は清華さんを連れて行った。そのあと、純平が愚痴のような独り言をつぶやいた気がしたけどすぐに忘れてしまった。そのときは、他愛のないことだと思ったからだった。

昼食時、純平はボクを誘わずに先に行ってしまった。こういうときは大体部活の集会がある日だ。特別機嫌の悪そうな素振りもなかった。今日はまた清華さんがサンドイッチを作ってくれたというので中庭にむかう。今日も晴れ、外で昼食をとるには絶好の日だった。指定席に着き、腰をかけようとしてボクの動きが止まった。うつむく彼女は返事をしない。何かあつたらと思ひ、下から彼女の顔をのぞく。ただの昼寝だとわかって安心の溜め息を吐く。たいしておなかには空いていなかったから、ボクは彼女が起きるまで待つことに

した。

「……起こしてくれてもよかったんだぞ」

あまりに気持ちよさそうに寝ていたものだから、彼女を起こすことができなかった。そのことは清華さんには言わず、言葉を濁らせて適当に理由をつけた。

まだ予鈴には十分時間があるからゆっくりサンドイッチをほおばる。丁寧に作られたそれは文句のないおいしさだ。おいしくないと思えたら、それはきっとボクの舌が間違っている。ふと視線に気付くとじつと清華さんがボクを見つめていた。恥ずかしくて赤くなる。「集中できませんよお、そんなに見つめられたら」

くすくすと微笑する彼女の瞳は綺麗に細められて、はっとするほど綺麗だった。気付けば、ボクも彼女の顔をじつと見つめていた。

「むむ、確かに気が紛れてしまうな」

そう言われてからそのことに気付き、視線をそらす。恥ずかしさをごまかすようにストローをくわえた。ちよっただけ飲み、口を離す。このままチャイムがこなければいいのに、そう愚痴をこぼすと清華さんはふと真顔になった。

「そうだな……そうだ、今日はさぼろうか、具合が悪いとかなんとか言つて。気にするな、内申になんか響きはしない」

思い立ったが吉日とでもいうようにまだ食事中のボクを引っ張り、中庭を出る。ボクは残りのパンをあわてて口に入れて飲み込んだ。具合が悪そうにするんだぞと念を押される。いざ、職員室へ。

……これでもいいのかボクの高校生活。坂を下りるボクたち、後ろめたさのなさそうな清華さんに、ちよっとそのあるボク。こうやって清華さんのペースで進んで、たまにはボクのペースで進んでいく日常。これからも続いていくと思っただらそう、とても。

とても楽しいじゃないかと思えた。

12th・love：独白

教室からはボクの住む町を一望することができる。消失点を超えて続く空は時刻と共にその色を変える。今日は午後休校だったので昼食を前に帰り支度をはじめ。ふと見やった空は青。まるでボクを外へ誘うかのようだった。ボクはさっさと荷物をまとめると教室から出ようと立ち上がった。……うん、だいたいにしてこういうときに限ってうまくいかないものだよね。どうにかして急に捕まれた純平のごつい手をふりほどこきたいんだけど、どうしたいかな。

「ごめん、純平」

「どうした？」

「実は今日、あの日なんだよね……」

彼はその言葉を聞いた瞬間目を見開いて手を離れた。あれ、周りまでざわついている？

「それじゃあ仕方ないか……また今度だな」

よし、今日は何とかまける。周囲のざわめきを気にせずボクは教室を出ようとした。

「って、お前オトコだろうがぁ！」

彼の脳が違和感に気付いたのか、やっとツツコミが入る。純平、気付くのがかなり遅いよ。というかまあその、性別的にはって意味だよな、純平？本気を出した彼から逃げおおせられるわけもなく、廊下で彼につかまえられた。叫んだら先生くるかな？と思っただけで厄介ことになるのも困りものなのでやめておいた。頬を膨らませてそっぽを向く。

「だってボク関係ないじゃない」

「仕方ねえだろ、他の部員がバツクれやがったんだから」

ちらりと視線を戻すと困ったように眉尻を下げた純平がいた。頭を下げ、手を合わせて拝む。

「一生のお願いだ、どうにか手伝ってくれねえか」

「んー……パンツ見せてあげるからそれで勘弁してくれない？」

「パツ、ってだからオトコの下着姿なんか見たくねえっつーの」

なぜそう言いながら頬を赤らめるんですか君は。ちよつときも……

いやなんでもありませんよ？まあ、一生のお願いとまで言われると断りづらいものがある。彼の一生のお願いをボクは数え切れないほどには聞いているんだけど。ボクはふてくされながらも了承した。「おお、心の友よ！」

なんか聞いたことあるセリフですよ？いつものことながら深入りはしないことにして、渋々ボクは教室に戻った。ジャージに着替えるとのことらしい。ニーソックスを脱ぎ、運動用のソックスをはく。スカートは脱がずにズボンをはき、それからスカートのホックを外す。上は別に白の半袖の体操着を着ているので気にせずにワイシャツを脱いだ。おおってなんだおおって。

「っていつかボクの着替え見て楽しいんですかみなさん！？」

なぜかボクの着替える様子を見ているクラスメイト疑問を投げつけつつも着替えを続行した。やっていることは女子のそれと変わらないのに、そんなに物珍しいのだろうか。今度小一時間ぐらい問い詰めてやろうかしら。長袖に腕を通すと廊下から純平がボクを促した。

こういうのって普通一年生がやるもんじゃないの、と彼に尋ねると今回はたまたま陸上部二年の担当だったという。基本的に誰もやりたがらないので掃除しているのは純平と部長ぐらいなものらしい。彼の愚痴を聞いているうちに部室棟に着いた。

校舎から外れたところにあるコンクリート造りのそれは運動系、特にグラウンドで活動する部活のために用意された場所で、有り体に言えば物置だった。片付けがきちつとされている部室などなかった。散乱しているのはお菓子の袋や雑誌。軍手越しても気持ちの悪い感触を我慢しながらゴミ袋へつつこんでいく。純平はゴミ捨てや整理整頓を文句一つ言わずにやっていて、いちいちリアクションを取っている自分が恥ずかしくなった。

雑誌を積み重ねて机の上に置き、一通り床を掃いたら次の部室へ。全部きれいにしていっただけがない。ある程度きれいになっていれば文句は出ないとのこと、気にしないことにした。まだ片付けですめばいい。ひどい部屋では袋をどかした瞬間に黒くてかてかした物体がさがそことうごめいていて、ボクは正直失神しかけた。何とか意識が遠ざかるのを拒んで、我を取り戻す。虫の存在に気付くと純平が退治してくれた。ボクが虫に触れないことを知っているの黙ってしてくれる。そのことをボクはありがたく思っ礼を言う。あさつてのほうを向いてどうも、と口にする。そのやりとりは昔から、それこそボクたちが出会ってから続く伝統みたいなものだった。そう呼ぶには大げさかも知れないけれど。

最後の部室の片付けが終わると午後二時ごろだった。食堂もやっていないので食事をするには外を出るか家に帰るしかない。お小遣いもそろつとなくなりそうだったのでボクは後者を選ぶことにした。純平が弁当を教室に忘れたと言ったので彼が昼食を食べ終わるまで付いてやることにした。動いて気が紛れたのか、おなかはまだ減っていないかったので、それぐらいの我慢はできた。ボクが制服に着替え直すのを待つて、彼が弁当箱を広げた。食事中の会話の途中で、ボクはなんとなく聞いてみた。

「そつえばさあ、純平って彼女いないの」

「げほ、がは。思いつきり彼が咳き込む。ボクはあわてて麦茶のペットボトルを差し出した。喉を鳴らし、流し込む。蓋をひねったばかりだったそれは半分ぐらいの量になった。

「ごめん、聞かなかったことにして」

「いや、急に質問がきたもんで……気にするな」

ご飯を吹き出さなかったのが不幸中の幸いか。彼はとにかく口の中につつこもつとするので。鼻をむずむずさせたりやたら鼻をこすりながら彼は答えた。きつとご飯つぶが鼻の気道につまったんだと思う。

「まあ、彼女はいないなあ。つーかいらん。何でそんなことを聞く

んだ？」

なんとなくだよ、とボクはごまかした。ほんとはもうちょっとつこんで話がしたかったけど、立ち入ってもいい話なのかどうかためらった。

「昔は……いないこともなかった」

純平のほうから、言葉が続いたのはこれが初めてだったかも知れない。

「まだガキで、あのころは何もかも自分の思い通りになると思ってたんだよ。実際うまくいつているつもりだった。でも、全部間違ってた……俺のエゴを押しつけて、自己満足にひたったんだ、それで俺は――」

純平がはっと顔を上げる。箸を持つ手はとつくのとうに動かず、白米は軽く乾いてしまっていた。おかずだけを食べ、のっそりとした手つきで弁当箱に蓋をした。

「俺はまだガキだから、もっと大人になったらいい人を見つけるさ」
そういつて豪快に笑う。空元気だということは他人の目から見ても明らかだったけれどボクはそれを指摘しなかった。つられて一緒に笑いながら、ボク自身は彼女と正しく接していられているだろうかと考えた。そんなこと、わかるわけもなかった。

教室を出ても、雑談の話題は絶えない。でも恋の話になることはなかった。二人とも、それを避けるかのように本当にくだらない話だけ続けた。玄関に着いて、いよいよ帰ろうとしたところ、大きく泣き叫ぶ声がした。どうしたと純平の声に手振りで応え、声のした方向に目をやる。小さな女の子が廊下で泣きじゃくっていた。手の甲で涙を拭う。彼女に手をやる女子は困っているように視線をさまよわせていた。言葉を投げかけるが、少女は頷きを返すばかり。気付いたらボクの後ろに純平がいた。

「ありや、美緒ちゃんと菜月先輩じゃねえか」

ボクたちは理由を訊きに二人の元へと駆け寄った。

13th・love：なくしもの

清華さんがボクの姿を見つけると胸を撫で下ろしたような柔らかな困り顔になった。でもすぐに表情が固まる。なぜ純平と目が合うだけでこうなるのかわからない。純平は小さく息を吐いて、頭をかいた。

「こないだは、律をもつてっちゃって、すみません」

清華さんはその言葉に少し頬を歪め、けれどすぐに目を伏せた。

「いや、気にしてない」

「でも、一応」

お互いに関係をよくしようとしているような気遣いが見えた。でもどんな関係だったんだろうか？今は訊けずにいるけど、いつか知るような気がする。それよりも、と純平が話を切り替えた。

「美緒ちゃん、なんかあったんすか？」

「いや、それがな」

簡単に説明を聞く。二人は図書館で本を読んでいたという。そこに一匹のネコが現れて、美緒先輩が愛用していたしおりを盗んで逃げていってしまったらしい。美緒先輩も色々と説明を補足していったがしゃくり上げたり鼻をすすったりとで何を言っているのかよくわからない状態だった。

まず、美緒先輩に泣きやんでもらうことが先決だった。大柄な男が行っても余計怖がるだけだし、ということではボクが対応することになった。しかし、清華さんでも泣きやませられないのに、いったいどんな魔法を使えばいいんだ？

「美緒先輩、とりあえず落ち着いてください」

そう言いながら、頭をなでてやる。ゆっくり、できるだけ優しく。しゃくり上げる肩が段々落ち着いてくる。涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔をハンカチで拭ってやる。

「ボクたちが、絶対見つけてあげますから、安心してください」

二人は頷いてみせる。ね、と美緒先輩にまなざしを向けると、今度は抱きつかれた。すごい勢いで、背中から倒される。痛みがあつて、目を細める。すぐに目を開けると、

近い。

熱で真つ赤になつた頬に潤んだ瞳がすぐ目の前にある。このままの体勢でいるわけにもいかないのでどいてもらうように言う。あわてた先輩がボクからどけてなぜか隣で正座になつた。取り乱してすみません、と小さな声。ふと視線をあげると鼻を押さえる清華さんとあつちの方を向いて固まつた純平がいた。

「二人とも、ボクたちでよからぬ妄想をしてはいませんよね？」

手をぶんぶんと振り否定する二人。ボクは不審に思いながら急に空腹を覚えた。

「えつと、早く搜索しなきゃいけないんだけど、ボクおなか減つちやつて……」

とりあえず、食堂へ行こうと清華さんが促す。

14th・love：道草。

「えっと、早く搜索しなきゃいけないんだけど、ボクおなか減っちゃって……」

とりあえず、食堂へ行こうと清華さんが促す。あれ、食堂は閉まっているんじゃないかな？

清華さんだけが先に食堂に入り（部屋は開いていた）、ボクたちは扉の前で待っていた。数分後、彼女が戻ってきた。

「厨房を使う許可を特別にもらった。残り物なら使ってもかまわないそうだ」

厨房で働く方の一人が清華さんと知り合いらしい。ボクは心底感謝して食堂へと入っていった。私も手伝います、と元気娘が手を挙げる。なぜかそれを制する純平。訴えが彼からしか出なかったため、彼女は清華さんと調理室へ入っていった。

近くのテーブル席に着いて、調理の様子を眺める。手元は見えないけど、順調そうな清華さんの横で、頭を抱えたりやたらせわしく動き回ったり爆発音を連発させたりってあれ？何が起こっているんだ現場では。しばらくするとすっかり肩を落とした美緒先輩が戻ってきた。

「どうしたの？」

「君は兵器を作っているのか、と言われてしまいました……」
だからいわんこっちゃない、と純平が肩をすくめる。ボクと清華さんは彼女が料理下手だと知らなかった。

「下手ってレベルじゃねーぞ、調味料で致死毒物が作れるって噂だ」
「そんなのあるわけじゃないじゃないですか！」

確かに具合を悪くされた方がいるらしいですけど……とさりげなく怖いことを言ってくれる。ボクは彼女には申し訳ないけど、心中で胸を撫で下ろした。

「お前は調理師免許より危険物取り扱い免許を取ったほうがいい」

「むー今に見てやがれですよじゅんじゅんが！」

「その名前で呼ぶのはやめろっ」

じゅんじゅん？思わず聞き返してしまう。思いつきり睨み付けられました、はい。いいじゃん、減るもんじゃなし、と純平の頭をなでる美緒先輩。気付けば純平がしてやられている！　いよいよ賑やかになってきたところ、香ばしい匂いがテーブルへ運ばれてきた。

「ほら、君たちも手伝ってくれ　ああ、美緒君はいいや」

「美緒はそこまでドジじゃありません！」

立ち上がる先輩に苦笑する清華さん。野菜炒めとボクにはご飯。箸は人数分。みんなで手を合わせた。一口入れて、やっぱりおいしいと頷いた。絶賛する元気娘に対して大柄な男はひとつ頷いただけだった。

「うん、みんな満足そうな顔していて嬉しい限りなんだが　肝心な目的を忘れているわけじゃないよな？」

一番はつとしていたのが美緒先輩だった。本人がこれでどうするんでしょう。

「まさかお姉様、餌で釣ろうと……！」

「いやそんなつもりは全くないからな。あと基本的にはこれは律のために作ったんだからな」

はた、と二人の箸が止まる。いや、気にせず食べてもいいから。というか問題はそこではないと思うのですがいかがでしょう。

「とりあえず手分けして探そう。みんな携帯電話はあるよな？」

何かあったらそれで連絡すること。それから、探す場所の分担を決めた。美緒先輩は校舎の三階と四階、清華さんは二階と一階、純平はグラウンド周辺、ボクは中庭。反対意見が出なかったので食事が終わったあとそのように行動することに決まった。

食後（食堂のおばちゃんには深く感謝しておかなければ）、廊下で美緒先輩と清華さんと離れ、純平とは玄関で別れた。一人になり、その心細さを思い知る。ついボクは人の背中に頼ってしまいがちだから、いつかはちゃんと一人でしゃんとしていたい。それだと清華

さんがつまらないと愚痴るかな。それでも、いつかは。

中庭に人気はなかった。動物は網に囲まれて育てられているウサギぐらいなものだ。ざっと見ただけでは分からないので、隅から探すことにした。草を手で払い、ネコが隠れていないか調べる作業は思いのほか大変だ。気配がもつとわかりやすいとか、やたら大きくて自分の背より高いとかだったらわかりやすいのになあ、でも戦えるのかなあそんなやつが現れて。そんなやつどうでもいい妄想を広げながら搜索を続けるが、それらしい気配はなかった。白と黒のブチネコ、身体の色は緑に交わらないから、比較的見つけやすいと思う。もう一周してみたけれど、ネコ一匹すら見つからなかった。念には念を押してもう一回調べたあと結局成果はなかったとして清華さんに連絡した。これから彼女と合流する。

清華さんは二階、ボクの教室にいた。ボクの席に着いて、住宅街の見える窓のほうを眺めていた。声をかけると、彼女が振り向く。なんで、悲しみを帯びるように目を細めているのだろう？状況を聞くと、彼女もまだ猫を見つけられていないようだった。すぐに広がる沈黙に耐えられなくて、ボクは口を開いた。

どうかしたの、と短く訊くと清華さんは別に、と返した。

「ほんのちよつと……律のクラスメイトがうらやましくなつてな」
目を細めたまま、頬を緩める。まるで泣いているようだった。

「私も君と同じクラスがよかったな」

そんなこと言ってもしょうがないか、と苦笑いでごまかす。一つ学年が違うだけなのに埋まらない大きな穴。それは無いものねだりだとわかっていても、彼女にとっては欲しくてしょうがないものなんだと思う。

そんな彼女が急に愛おしくなつて、ボクは座っている清華さんを後ろから抱きしめた。

「じゃあ、逢えない時間が不安にならないように、一緒にいられるときはずっと近くにいましうか」

……こんなこと言えちゃうやつだったけ、ボクは。清華さんは耳

たぶまで真っ赤にさせてうつむいた。そんな彼女の肩に顔を置いて、頬をくつつける。

「あの、こないだはあんなこと言っちゃいましたけど　キスしませんか？」

もう数え切れないキス。けれど、学校では我慢していた。見境なくそういうふうにするのはどうかと思ったからだ。でも今は人でもないし、何より彼女にそうしてあげたかった。身体を離し、手で優しく振り向かせる。上目遣いの彼女が新鮮で、どうにか耐えてしまいたいそうになるのを押さえる。どちらかともなく、瞳を閉じた。そのまま、近づいていく、そと。

着信音。

「ごふっ！？」

ヘッドロックをかまされ、意識が飛びかける。顔面がまんべんなく痛い。清華さんの頭蓋骨は何でできているんだ？彼女は電話をとリ、しきりに頷いた。電話を切り、顔をさするボクにいきまいた。「純平が猫を見つけたらしい、すぐ姿を眩ませたというが校門の方へ行ったそうだ」

そう言ってボクの腕をぶんぶんと振る。勢いについていけなくなっているボクに気付き、急に視線を落とす。かと思えば、小さく頬に口づけをくれた。

「さっきは、ありがとう」

ボクは返事のかわりに彼女と手を繋いだ。途中で合流した美緒先輩にそれを見られて結局三人で手を繋ぐことになった。でも悪くない。ボクの近くに彼女の笑顔があるのなら。

15th・love：繋ぐ手

例の如く、ボクたち三人を見て純平が悪態を吐いた。

「ちっ、俺だけ仲間はずれかよ」

「美緒と手を繋ぎたいのですか？」

空いている手を彼に差し出す。彼は腕を組んで、それを拒んだ。

「別にそんなんじゃないよ」

彼が意固地になると美緒先輩もなぜか意固地になる。ボクの手から離れ、ぐい、と純平へ手を差し出す。

「なんだよ、これ」

「繋ぎたいんでしょう？美緒、そういうのよくわかります。なめやがるなー！ です。」

いや別になめてはねえけどよ、とつぶやく彼からはもう怒気が抜けていた。美緒の小さな手を取る大きな純平の手。アンバランスな二人だけど、どこかほえましくもある。少しの時間が経って、ふりほどくように彼女の手が離れる。

「うお！？」

「美緒は何か重要なことを忘れているような気がします！覚えてますかりっちゃんくん」

覚えているも何も、忘れているのは美緒先輩だけだったような気がするんだけど。猫を探しにきたことを告げる。ぽむ、と手のひらを打ち、純平に訊き直す。

「あの泥棒猫はどこいったのですか？」

彼女の口癖が段々子供っぽいつてレベルじゃなくなってきたんですけどどうでしょう。しかも泥棒猫ってちよつと意味が違うような……。

「美緒ちゃんと漫才してたら忘れちゃったよ……」

夫婦漫才ですね、とツツコんだら二人に怒鳴られた。そんな本気で否定しなくてもいいじゃない。

「でも確かにこつちへきたんだよ、すぐに見失っちまったけどな」
玄関周辺はまだ誰も探していない場所だったので、みんなで手分けして探すことにした。一人で探し回っているよりも心強い。玄関から校門まではたいした距離もない。コンクリートで舗装されたそこは車を校舎側、校門側と四台ずつ止められるスペースがあつて、教職員がそこを利用している。今は二、三台停まっていた。

あとは花壇と植樹された木々が校門を沿うように設置されている猫が隠れるとしたらそこか車の下ぐらいだと思う。ボクは中庭でしていた要領で隅から搜索に当たっていった。数十分搜索したけど、それらしい姿は見あたらなかった。少しずつ、気がつかないうちに日が傾きはじめていた。

さすがに外を探索するのはためらった。そこまでの時間はボクたちにはなかった。それに追い打ちをかけるように美緒先輩が細い声を出した。

「ありがとうございます、みなさん。美緒のためにここまでしてくれて…

…あとは、自分で探してみます」

表情こそ微笑んではいたけれど、ボクはそうとは取れなかった。でも、手伝えないことがもどかしい。結局、今日はしおりを見つけれないままお開きとなった。それぞれ、荷物を持って校門を出る。美緒先輩が小さく、手を振った。

清華さんとも用があるとすぐに別れた。純平と下校するのは久しぶりだ。彼は朝も放課後も部活をやっているから、一緒に登下校するのはこういう午後休校のときぐらいなものだった。遠い目をする彼は、何か考え事をしているようだ。やがて手のひらを打ち、いきなり訳のわからないことを言い出した。

「俺たち、カップルに見えるか……？」

カップルに見られたいんですか？身なりは女子だけど身体は立派な男なボクと付き合いたいんですか？

「いや、それは想像すら勘弁だ」

ですよねー。でも、よく考えれば見た目でしか判断しようがない

人たちにとって見れば、ボクたちはそのように見えるのだろうと思
った。

「そういえば、菜月先輩とはうまくやってんのか？」

どう答えたらいいものかと思っただけど、素直に頷いた。夜の逢瀬
も相変わらず続いていたし、大きな展開がないかわりに大きなトラ
ブルもなく順調に続いていた。ボクの簡単な話を聞くとそうか、と
短い答えが戻ってくる。それっきり彼女との話題が出ることはな
かった。ずっと違和感だけが残る。それ以上のことは、やっぱり、い
まだに訊けるとは思えなかった。

16th・love：黒猫と新たなセカイ。（A）

下校時間になって、ボクは一人玄関を出た。いつもの面々はみんな部活があるといっていた。最近は一になる時間が少なかったのだ、こうなることは楽しくなかった。けど、文句を言っても仕方がないことなので素直に帰ることにした。未練がましく一階の美術室のほうへ目を向ける。窓際の席で清華さんは何かをデッサンしているようだった。ボクの視線に気付いたのか、彼女がこっちを見て手を振ってくれた。ボクも手を振り返す。それだけで心が軽くなるなんて、ボクも単純だなと苦笑しながら彼女に背を向けた。

寂れた商店街は一日中店を開いている様子はない。そろそろ夏服の季節だというのに、どこかひんやりとした空気。早くこの通りを出ようと早足になる。それに、後ろに感じる小さな気配。振り向かないように、通り過ぎようとする。

「おおい、ちと待たんか」

背中を撫でられたかのようにぞわぞわした感覚が走り抜けた。反射的に駆け足になる。

「こら、年寄りをいたわらんかあ」

年寄り？確かに声はしわがれているし、いや、もしかしたら老人の亡霊なんじゃないか？不況に耐えられなくなって孤独死した……とか、うわあ、想像しただけで鳥肌がやばいよ！

「わしを勝手に殺すなあ！」

うわ、怒鳴られた！運動不足がたたって、ボクは徐々に力尽きていった。やがて息が切れて立ち止まった。そこに一匹の黒猫がやってきて、ボクの足下にすり寄ってきた。ボクを一瞥し、一声、しゃべった。

「おまいさんはブチネコがくわえとったしおりとやらを探しているんじゃない？」

いや、猫がしゃべるはずない。ないない、ありえない。ボクは現

実に立ち直ろうとした。

「いいかげんこれが現実だと理解せんのか？」

猫に何かスピーカーでも取り付けてあるのかな？ボクは猫を抱え上げてそれらしきものがないかチェックすることにした。

「あほんだらあ！！！」

……頬がひりひりする。ボクが何をしたっていうんだ。痛みで猫を手放すところと一回転して地面に着地した。

「ったく、年寄りだからって馬鹿にしようって……これでも乙女なんじゃからな」

はは、またご冗談を。どこまで冗談なのかはわからないが、少なくとも猫の身体には何もなかった。そしてこれからボクがとるべき方法は二つ。幻聴だと理解してこの場から立ち去る。あるいは幻聴だと理解してこの猫（幻聴）に従う。

「あくまでわしがしゃべつとるとは認めんのじゃな？」

ええ、そのつもりです。だってあり得ないし。ただ、しおりのことを知っている以上、この猫（の幻聴）に従ってほうが得策だと思っただ。

「そついや、おまいさんは羊男を知つとるかね？」

全く要領を得ない質問本当にありがとうございます。ボクは首を振った。それなら仕方ないか、と首を振る猫。いや、仕方なさそうに見えただけだね！

「わしの仲間内のようなもんじゃ。適当にヒントを投げかける。まあわしは客引きをするカーネル・サンダースに近いがな。答えまでは知らないが、道案内だけはしてやるのがあいつじゃ。それに引き替え、わしは答えまで知つとる。両手を挙げて喜べ、らんらんるーよろしくな」

最後の呪文みたいなのが一番理解できなかったんだけどどうしよう。

「考えるな、感じる」

何でこのタイミングでそのセリフが出てくるんですか！ツツコミ

を猫はさらりとかわし、話を切り替えた。

「とりあえずブチネコのいる住処まで案内してやろう。あいつのことじゃから大事に持つているに違いない」

そう言いながら先頭に立つ。所々汚れているのを見ると、野良猫なのだろう。後ろ姿はどこか凛々しく、なぜかボクの恋人を思い出させた。商店街の裏路地を入っていく。狭い道の側に立ち並ぶのは造りの古く傷や汚れの目立つ家々。盆栽や花壇が置かれているので人が住んでいることは予想できた。あの商店街の住人だろうか、自分その人たちも含まれるのだろうかと思った。

どんどん奥まったところへ行くと方向感覚がつかめなくなっていく。もしかしたら違う世界にボクはきていて、この非日常もそのせいなんじゃないかと思えてきた。そのほうが自然だし。走ったときだって、いやに商店街が長い気がしたし。

「世界は開かずの扉だらけじゃ」

ボクの心を読んだかのように、黒猫はつぶやいた。

「わしらはさしずめ開かずの扉を開けるための鍵。なに、この仕事もずいぶん楽しい。おまいらのいう『せかんど・らいふ』みたいなもんじゃ」

じゃあ、最初からこの役目をしていたというわけじゃないんだ。

そう感想を述べると猫は鼻を鳴らした。

「いつのころからこうなったかはもう覚えとらん。もしかしたら以前はヒトじゃったかも知らん。まあ、それほど遠いことの話じゃ。

そんなことはもういい。世界はなぜ閉ざされる？……いや、言い方を変えよう、世界はなぜ事実を隠蔽する？」

人が何かを隠したくなるときはその人にとってそれが不都合になる場合だと思う。

「それは、世界にとっても変わらん。不都合を隠蔽することによって世界の均衡を保つ。それがこの地球がまともに回るためのプロセスじゃ。今の世、正直なのは機械だけなもんじゃろう」

しおりに、何かあるのだろうか？そこまではわからない、と歩み

を進めながら猫は首を振った。どこか遠くの方を見つめる。気付けば、ただっ広い空き地にきていた。相当な敷地で、雑草が我先にと背伸びをしていた。

「ここは現実世界でいうとおまいの通っている学校といったところじゃな」

不意に立ち止まり、猫はこれが平行世界なのだ、と簡潔に説明した。

「世界というのはいくつもの可能性が平行線状に広がっている。人間の生きている現実というのは可能性を一つ一つ選択しているに過ぎん。そしてその結果が知られることはあり得ん。また違う可能性を選んだ場合もあり」

まあ難しく考えるな、と頭を抱えるボクに告げた。

「この世界の秘密をおなご一人が知ったところで改変は起きん。せいぜいわしのような猫がいたことを覚えておるだけじゃ。もちろんしゃべるのは幻想だと記憶してのう」

さて、ブチネコのところへ行こうと黒猫はまた歩き出す。ボクはそれを見失わないように着いていった。雑草が痛い。こんな場所で頼りになるのは猫以外にいなかった。しばらく歩いて、猫の歩みが止まった。視線をその先へ向けると、一匹の猫が寝転がっていた。その側には金属製のしおりも見える。猫もしおりも美緒先輩が言っていたそれと一致する。安らかな寝顔だったけど、警戒するようにと黒猫は注意した。

「おまいはなぜここに辿りついた？ただの野良じゃろうに」

猫は黙ったまま答えない。あるいは答えたくないのかもしれない。黒猫がしおりへと近づこうとすると腕で牽制される。寝たふりをしているようだった。どうもやりづらいなと黒猫は一鳴きした。

17th・love：黒猫と新たなセカイ。（B）

二つの鳴き声が交互に響く。何か会話をしているようだけれど、ボクにはそれが何でどのような会話なのかは分からなかった。ときおり鋭い鳴き声がした、それは黒猫のものだった。ブチの方はまるでのりくりとかわすようにゆっくり鳴く。

ボクは彼らの会話（きつと口論なのだろう）から意識をそらし、顔を上げた。なぜ、この世界には何も無いのだろう。世界は広い野原で、生存する動物はボクと猫二匹しかないような気がした。少なくとも、この場にはそれぐらいしかない。ボクが何を選択すれば、このような世界が生まれてしまったのだろうか。いや、その考えは意味のないことなんだ。だって、ボクにできることは選択することだけなのだから。

しばらく時間が経って、黒猫が戻ってきた。あきらめの表情を浮かべ、ときおり鼻を鳴らす。……ちよつと待った、今猫の表情が理解できるように……！？

「やれやれ、引き渡す気はないそうじゃ」

毛繕いをしながら、黒猫は語る。ボクは自分が猫に近づいているのではといやな想像をはじめてしまう。

「ただし、この世界では……おい、聞いとるのか？」

「ねえ、ボク猫になつてたりしませんよね？ ひげが生えたり」

「……馬鹿は休み休み言えと、親から教わらんかったのか？ そもそも、人間は変化できるのじゃ。そういった能力について、人間は著しく制限を受けておる。高い思考能力と引き替えにな」

話がそれたじゃないか、と黒猫は立腹した。

「やはり、おまいさんは元の世界に戻って猫としおりを見つけ出さねばならぬようじゃな」

どうやら、この猫としおりはこの世界ものとして存在してしまっているらしい。そうなってしまうとボクのいた世界とは関係性がな

くなる。ボクの世界に戻ればこの世界の扉は再び閉ざされ、選択されなかった可能性として極限まで圧縮され、やがて消える。まるで空想の話だ。ボクはその説明を鵜呑みにするばかりで、理解までできなかつた。

「考えるな、感じる」

黒猫はいつかの言葉を繰り返した。でも、そうしたらここに残った猫はどうなるのか。この世界と一緒に消えてしまうのか。

「そうじゃな、猫はそれを選択したんじや。それをわしに否定することはできん」

そう言つて、ひとつ溜め息を吐いた。そして、ひとつ考えを思いついたボクを牽制するかのようにつばを差した。

「言つとくが、おまいの世界には戻せんぞ。関係性がないとはいえども、多重存在は認められておらん。もししたところで向こうにいる猫がこの世界に閉じこめられるだけじや。猫が戻るのには、猫がそれを望み、向こうのそれと同一化することを認めた場合のみじや」

ボクはぼんやりと猫を見つめる。ふと猫はこちらに向き、ボクを見つめた。小さく一鳴き、目を細めた。この世界にとどまりたいという意志。なぜそれを選んだのだらう。きっとそれはブチネコしか理解できないのだらう。ボクは、背を向けた。

元の世界に戻る道の途中で、ボクは聞かずにいられたかった問いを口にした。

「この世界にくる意味はあつたんですか？」

どうじゃろうな、と黒猫はとぼけた。

「少なくとも、答えは提示したはずじや。……ここまでは、わたしにも予想はつかなかつたのじやがな。真実に辿りつくことは容易じやない」

ここにこなければ、きっと元の世界での在処を知ることではできなかった。きっとそういうことなのかも知れない。やがて、草原は狭苦しい裏路地になる。一つ言わなければいけない事実があつたのに、結局言えずじまいのまま。

……ふと下へ目線を向けると黒猫がボクに寄り添っていた。どこか見覚えのある猫に、ボクはついていくことにした。

商店街へ戻り、通学路を学校へと向かう。足元を見ると土汚れがついていることに気付いた。ボクはそれを手で払い、足を進めた。猫はそれを気遣うかのようにボクのペースに合わせて進んだ。まるでボクを知っているかのように、ボクを見つめる細い目。土のことに違和感を感じながらも、猫の後ろを歩く。

学校に着き、猫は校舎の中に入っていた。夕暮れを過ぎた校舎に人気はない。ボクは猫の動向だけに集中した。中庭に続く扉の前で立ち止まり、ボクの方を見て鳴き声を上げる。それは廊下によく響いたけれど、ボクは気にしなかった。ボクが扉を開けてやると、猫は中庭へ立ち入る。歩みは今までで最もゆっくりになった。注意深く、鼻をひくつかせていた。

木陰に眠るように、猫はいた。胸が上下して、心地よさそうな寝息。黒猫がブチネコを鼻でつつき、起こした。二匹は一度見つめ合い、そのあとブチネコはしおりへ目を向けた。黒猫はそれを口にくわえ、ボクの元へ戻ってくる。ボクはそれを受け取った。確かに、猫たちは玄関へ戻ろうと歩み始めた。もうここにとどまる理由も、ボクをここに導く理由もないのだろう。最後にボクは玄関まで案内してやった。

猫を見送ると、夕日が沈もうとしているところだった。ボクも帰らなければいけない。下校の時間をとくに過ぎている。しおりを鞆の中にしまつて、歩みを進める。とん、と肩をたたく優しい手。

振り向くと、そこに清華さんがいた。

「どうしたんですか？こんな遅くまで残って」

「むむ、それは私のセリフだぞ。私は部活でちよつと居残りをしていたんだ」

背伸びをする彼女につられて、ボクも同じように背伸びをした。広げた手が、お互いを探す。自然に手を繋げるようになったボクたちはもう立派な恋人だ。はた目から見ればそれは仲良しな女の子二

人組なのかも知れないけれど。

「で、律は何をしていたんだ？」

うまく答えられないかわりに、美緒先輩のなくしたしおりを彼女に見せた。それをみた途端清華さんはボクの髪をくしゃくしゃとかき混ぜる。ボクがずっとこれを探していたように思われたのかも知れない。でも、ボクはどうやって見つけ出したのか、うまく過程を説明することができなかった。だから、中庭で猫と一緒にあったことだけを教えた。猫はもうどこかへ行ってしまったことも。

猫のことを叱ってやろうといきまいていた彼女が意気消沈する。

ボクは苦笑して、しおりを片付けた。清華さんに渡してもらおうかと思ったけれど、それはやっぱり拒否された。

「私は律のそういうところが大好きだ」

頬は赤らめていたけれど、はつきりとボクに告げてくれた。ぎゅっ、と手を強く握る。照れるボクも、彼女にありがとうを告げる。

別れが惜しかったから、それを紛らわせるためにたくさん話をした。部活でどんなことをやっているのかも聞いた。人物画を描いていると聞いたけれど、モデルは教えてくれなかった。今度またボードゲームで暇を潰そうとも話をした。今までで一番話をしたのかも知らない。楽しい時間は早く過ぎると分かっていた。けれど今はさらに分かっていることがある。だから怖くない、ただ、空白でこの時間を過ごしてしまうのもつたいないと思ったから。

二人で過ごす時間は短い。けれど、これで終わりじゃない。夜だつて、明日だつて、いつだつて。ボクは彼女といられるんだ。苦しみが二人を分かつまでは。

18th・love：キスト、スキと、ありがとう。

次の日の朝、ボクの教室に訪れた美緒先輩にしおりを渡した。何をどうしたとかは別に説明しなかった。先輩の瞳は段々と輝きを増し、やがて潤みだした。

「どうやって見つけたですか！ ちゃんくん！ ほんとうにありがとう！」

小さな身体でボくに抱きつく。なぜか教室がどよめいた。ボクは頭を撫でながら今度はなくさないようにね、と微笑みを彼女へ浮かべた。さらに教室は盛り上がりを見せる。百合だ、百合だ、と意味がよくわからない単語が飛び交いはじめる。

「うん、ちゃんと大切にします！絶対に手放しません！」

なくしたというより猫にとられたのかと思い出したけれど、いまさら言い直すのも野暮かなと思ってやめた。ふと顔を上げる泣き顔。……なんか胸にくるものがあつた。説明できないけど。

と。

唇から伝わる熱。目を閉じる間もなく、ボクはそれを目の当たりにすることになった。なんか取り巻きがえらいことになっているけれどボクにはそれを鎮める余裕もなかった。口づけた彼女は首をかしげ、にこりと笑った。

「ありがとうございます、りっちゃんくん」

それを告げると彼女はとたとたと教室を去っていった。しおりは胸ポケットの生徒手帳の中。ボクは取り巻きがちよつとした騒動をはじめても立ちつくしたままだった。

……何も集中できなくて、ただ黒板を書き写すだけで今日の授業は終わった。放課後あわてて美緒先輩のいる教室へと向かった。教室を出て突き当たりを左に折れる。というかその方向以外に行きようがない。中央廊下を走り抜けて再び左折しようとしたとき、悲劇は起こった。

着地と同時に、踏みつけた違和感。もう一步前へ進んで、後ろを振り返る。おお、みたことあるな君。うん、しゃーしゃー言ってるのって、うわあっ！

のんきに話している場合じゃない！踏まれたことに腹を立てたのかボクに襲いかかってきた。ボクは再び床を蹴り上げた。

振り向きながら逃げ、蛇のスピードがゆるんでから早足をやめた。さすがに戦意を喪失したんだと思う。正直そうであって欲しい。

「どーしたんですかりっちゃんくん」

相当大きな叫び声を上げたんだと思う。目をまん丸にさせているのは美緒先輩と清華さんだった。そして。

「うひいっ」

頬を蛇の舌でなでられる。真剣に死を覚悟した。

「おどろくなー、おどろくなーってマロンも言ってるですよ」

むしろたべちゃうぞー、たべちゃうぞーじゃないのかな、うわ、冷静にツツコミを入れちゃうボクってなんなの。

「そんなー、さすがにおなかが破裂しちゃうですよ」

可能だったら食べるの！？その問いに美緒先輩は答えずにほくそえんだ。清華さんはマロンを指先でなでながら疑問をボクに投げかけた。

「そっいえば、こんなところまできてどうしたんだ、私に何か用か？」

はっと用事を思い出す。ですから舌でぺろぺろするのはもう勘弁ください……！

「いや、美緒先輩に確認したいことがあって……」

「ん？美緒にですか？」

ボクは頷く。特にそういう空気を出していたわけじゃなかったけど、何か察してくれたのか、清華さんは部活があるからといって先に廊下を歩いていった。

「とりあえず、さっきはごめんなさい」

マロンに対する失礼を詫びる。それはマロンちゃんにしてください

いと当然の答えが返ってきた。蛇に謝っているボクって何なの？それを考えるときつと辛くなると思ってやめた。

「あの、朝のキスのことなんですけど……」

何であんなことをしたのか、彼女に訊くと彼女は意外そうな顔をした。口に手を当てて、首をかしげる。

「うーん、あんまり気にしないでくださいです。なんというかですね、嬉しかったのでやっちゃったです。心のそこからの感謝を伝えたくて、こういう感じになっちゃいました」

そうして自分で作ったげんこつを頭に当てる。舌を出してえへ、と笑った。

「あ、思いつきなのでそんな気にしないでくださいよ……でもでも？」とボクは聞き返してしまった。

「好きな人にしかこんなこと、しないんですからね？」

思わぬ一言にくらっときてしまう。いや、こんなんじゃないダメだ。だって、彼女はあくまで先輩なのであって、恋人じゃないんだ。ちゃんと関係は整理しておかないと、いざとなったとき大変だ。

「なに考え込んでるんですか？」

その原因を作ったのはあなたでしょうが……。つぶらな瞳がボクをのぞき込む。彼女はボクの気持ちを知ってか知らずか頭を抱え込むボクに微笑んだ。

「そうだ、たまには美緒に付き合ってくださいです」

彼女に手を引かれ、きたところは図書室だった。ちらほらと学習している生徒がいるぐらいで、読書をしている生徒は見受けられなかった。ボクは彼女に誘われ、貸し出しカウンターの中に入っていた。

「え、ボク図書委員じゃないんですけど」

「今日はもう一人の担当の方がお休みなのです。だから手伝ってください」

うーん、それはボクを引っ張り込む前に言うてくださいね？どうにしろ、先輩の頼みには断れないんだけど。貸し出しカウンターに

人がくることは滅多になかった。昼間は忙しかったらしい（そのときは別の生徒に手伝ってもらったという）。昼間の生徒は部活動があったためかわりにボクが選ばれたということだった。本当はボクのクラスまでわざわざ迎えにきてくれるつもりだったらしい。全くの走り損だったということだ。

資料を借りに一人の生徒が訪れる。ボクは貸し出しカードと貸出期限のかかれている紙に日付のはんこを押した。紙を本に挟み、生徒に渡す。慣れないセリフに声がうわずった。生徒が図書室を出て、ボクは溜め息をついた。

「よくできましたですよ」

いやまあこれぐらいだった何とかなるけど……。彼女は貸し出しカードをクラス別になっっている小さな棚の中に置いた。こと、と音がしたけれどみんなの集中力はそれぐらいでは途切れないようだった。ボクは彼らの邪魔にならないように本を選び、読書のための本を選んだ。あまりすることはないので、と彼女がそうするように勧めてくれたのだった。特に何も考えずに文庫本を選び、カウンターに戻ってそれに目を通した。そのあと何人かに対応をしてチャイムが鳴った。ボクらは最後に本棚を軽く整理して、図書館をあとにした。

「今日は本当にありがとうございました、……んー、なんか一日中ありがとうございましたって言ってた気がするです」

その通りかもしれない。ボクがそう笑うと先輩も微笑んだ。彼女となら、またきてもいいかな……。そんなよこしまなことを考えたりも、した。

三人しかいない放課後の第一理科室で、ボクは選択をする。選択の結果は一人以外には分からない。条件の揃ったカードはもういない。そしてボクは選択させる側になる。彼女はボクの顔を窺う。ボクは彼女が何を選んでるかまわなかったんだけどわざと難しい顔をしたり大げさに安堵したりして楽しんだ。

手持ちのカードは二枚。条件は揃った。ボクはカードを捨て、宣言した。

「よしっ、一番乗りー」

「えー、ずるいですー」

「あとは美緒との一騎打ちか」

不服そうな少女と自信満々な女性。二人の選択と結果を眺めることにする。一人がカードを引く。あ、今一瞬間が曇った。彼女は黙ってカードをかき混ぜる。お互いカードが揃えば上がりという状況。二枚のカードをじっくり眺め、真剣な表情で少女がカードを引いた。そしてガッツポーズ。

「やったー！奇跡の大逆転ですー！」

両手を挙げて喜ぶ美緒先輩とは裏腹に、清華さんは心底悔しそうだった。小声で何かをつぶやき、自分の世界に入っている。ボクはそんな彼女にカードの山を押しつけて、シャッフルするように頼んだ。

「ああ、分かってる。やればいいんだろやれば。くそ、まさか私が負けるだなんて……」

いや、結構な敗率ですよ清華さん。

「というか、くそ、とか女の子が言っているいい言葉だとは思えません」

「むむ、気をつける……何で律の言葉には説得力があるんだ？」

「それはお姉様の好きな人だからでしょうー？」

さりげなくそういうことを言える美緒先輩もなかなかの説得力です。確かに、信頼におけない人や自分と関係ない人の言葉って耳に入ってこないもんなあ。でも、こんなボクが女性に文句を付けてもいいものだろうか。そこは深く考えないことにした。照れをごまかすようにシャッフルする手つきが大きくなる清華さん。ボクは次は何のゲームをするか美緒先輩に訊いた。

「んーもう一回ババ抜きをやりたいです」

この先輩幼女はババ抜きと七並べと神経衰弱しかできないと言っていたけど、ボクにしたらそれで充分だ。カードを混ぜ終えた清華

さんがカードを机に滑らせながら振り分ける。同じカードがやたら多い気がした。

「カード混ざってないと思いませんか？」

「むむ、それは美緒の気のせいだろう」

まあ、よくカードを切っていたし。ボクたちは二回戦を始める。楽しくて、淡い時間。こうやって清華さん達と遊べる時間も一年ないんだなと思うと少し胸が痛くなった。おかしいね、消えてしまうわけじゃないのに。

チャイムが鳴って、ボクたちははじき出されるように校舎を出た。美緒先輩は楽しそうにはねながら下校路を進む。ボクもそんな彼女につられて笑みをこぼした。やがて彼女ははねるのをやめ、ボクと清華さんの方に振り向いた。

「今日はとても楽しかったです」

ひまわりが咲くのはまだまだ先だけど、夏のそれに負けないぐらい、満面の笑みを浮かべた。その表情を浮かべながらも、先輩は溜め息をついた。

「それに、君たちならきつとずっと、仲良しでいられると思いますです」

すっかり表情の曇った彼女が気付けばいた。無理矢理作った笑顔、頬が引きつっている。

「実はですね、美緒は二人を監視していたですよ。本当にりっちゃんくんはお姉様にふさわしい人なのか。ちゃんと見極めたかったんです。……でも、そんなこと、杞憂でした」

ボクと清華さんの手を取り、二人手を繋ぐようにと促した。そうして、美緒先輩は手を離す。

「美緒はお二人とは仲良しなお友達に戻ります。恋人じゃ、ありません。だからどうか。お二人は恋人になってください」

彼女は清華さん、と名前で呼んだ。

「怖がらないでください。りっちゃんくんは決して『あんなこと』はしません」

どうかお幸せに。分かれ道で美緒先輩は笑顔を浮かべながらそう言った。彼女は本当に助けなければいけない人を見つけたと言った。ボクはその言葉に頷きを返すぐらいのことしかできなかった。

美緒先輩が去ったあと、ぽつりと清華さんが口にした。

「私は、君に謝らないといけない」

本当は、彼女に心が揺れていたことを告白した。

「この関係が、ずっと続けばいいと思ってたんだ。そんなの、いつかはおかしくなることになるって分かっていたのに。私は、ずるい人だ　っ」

ボクはその弱音をキスで塞いだ。街中で人がいたにもかかわらず。近い距離で彼女を見つめると彼女は涙を流しはじめた。

「それなら、ボクも同じです。みんなが同じ気持ちでいられたらよかった。いつかは選ばなければいけなかったのに、そこから逃げ出したのはボクです」

謝りながら、ボクは彼女の涙を手で拭う。

「美緒先輩はすごい人です。やっぱりかなわない」

そうだな、と頷く清華さん。誰だって、願ってしまう。変わらないことを。いつまでも続くことを。それを望んでしまうのに、美緒先輩は違う未来を選択した。新しい使命を見つけて、その使命を果たすために。

清華さんとも別れて、ボクは我が家に戻る。今日も暖かな灯がともる場所。この場所からも、ボクは巣立っていかなければならない。いつまでも、ボクたちは子供ではいられない。

次の日の朝。いつものように商店街で、いつものように美緒先輩に会う。いつものように笑顔の先輩に、笑顔で挨拶を返す。いつもと違うのは、急に抱きついたりすることがなくなっただぐらいか。いつもの先輩で、ボクは内心安堵した。

途中で清華さんとも合流する。朝から強い日差し。そろそろ雨の多い季節になる。ボクたちは横に並びながら登校した。教室に三人で入る……って、二人は違う教室でしょうが。

「私は純君に用事があるです」

「私も律と世間話が……」

まあ、いいですけど。遅刻しないでくださいねと二人に釘を差した。昨日話していた人のことでもしかして純平のことなんだろう。ボクは気を遣って席を立った。

「今更のことなんだが、私たちって、昼間にその、デートしたことはないよな？」

……意外だった。マスターの店に行ったり、市街地周辺をぶらぶらと散策することはあったけれど、そのどれもが夜のことだった。ボクは二つ返事で頷いた。

「じゃあ、しよう、デート」

変な誘い方だな、と思っただけでボクは吹き出してしまった。怒られながらボクは予定を相談する。あんまり遊べる場所はない街だけど、二人でいるだけで充分楽しい。遊びに行く日は週末に決まった。予鈴が鳴り、先輩達はあわてて教室へと走っていった。遊ぶ時間が違うだけなのにボクの心は浮かれてしまっただろう。ゆるみが純平に指摘されても直せなかった。

19th・love：初体験。

……夢を見た。雨の中、ボクは独りで泣いている。意味もない言葉を叫び続けて、その内喉が潰れて声はかすれる。その言葉は最初には意味があつたはずなのに、最後には喃語と何も変わらなくなっていた。

雨はその叫びすらもかき消す。まるで口を塞ぐように。伝わらない言葉が地面に叩き付けられて碎けて壊れる。ボクは地面にむかつて拳を叩き付けた。痛みが鈍く伝わり、それでもボクはそれをやめない。やがて腫れるボクの手からは赤黒く、濃い血が流れはじめ。神経が麻痺して、運動が止まる。しゃくり上げるボクは空を見上げる。頬に流れるものが涙なのか雨粒なのか、もうよくわからなかった。

その目を閉じて、世界から遮断する。ボクというアイデンティティは認められない。ボクはボクでしかないはずなのに、型にはまらなければいけない。それは今のボクにとっては悪夢に他ならなかった。誰もいない世界で、ボクは崩れ去っていく。何を、どこで間違ってしまったのだろうか。そればかりが頭の中を駆けめぐっていく。

冷たい身体が小刻みに震える。指先は何かを求めて動いている。何を求めているのか、誰を求めているのかは分からない。そもそもボクがどうしてこんな世界にいたのかも。ボクは静かにこの世界から身を沈めた。もう、何も聞こえない。これ以上は何も求められない。求めようがない。誰かの泣き声も、もう過去の話だった。

……痛みでその日は目が覚めた。ベッドから転げ落ちるほど寝付きが悪い覚えはなかった。鳴らない目覚まし時計を見つめる。世間一般的に昼前。あと二時間ぐらいで昼の番組が始まる。

「って落ち着いてる場合じゃない！」

階段を駆け下り、顔を洗った。朝食なんて食べている暇なんかない。あ、でも化粧はしなくちゃ……。どう考えても間に合いそうに

なかったので、清華さんに断りのメールを送った。数分後、文面からしてご立腹な内容の返信が返ってくる。携帯ごしに謝りながら、大急ぎで着替え（服は前日に用意してあった）、ボクはかあさまの三面鏡へと向かった。

「あらあら、グロスが曲がつてるわよ」

立ち上がろうとするボクを再び座らせ、彼女がメイクの直しをしてくれた。メイクはちゃんとやらなきゃダメ、とたしなめられる。

「例えば、あなたの好きな人がだらしなない格好できてごらんない？ 私なら幻滅しちゃうわ。まあ、パパのファッションセンスは最高だね」

さすが、かあさまの選んだ人だけある。確かに、彼女の一言も一理あるなと思えて、黙って彼女の言うとおりにした。それからは大あわてで家を飛び出していった。かあさまが傘を持っていくように忠告していたけど、急いでいたせいでボクはそれを忘れてしまった。悪夢と一緒に、置いてきてしまった。

バスに映ったボクの姿を目に焼き付けて車内へと乗り込んだ。日差しに映える白のノースリーブのポロシャツ。下はスカートにしようか悩んだけど、結局クリームのパンツにした。居眠りしてしまわないように、外の流れていく風景を眺めていた。今日も天気はよく散歩する子供連れやカップルをよく見かけた。会ったらずなんて言おう。そんなことをぼんやりと考えながら、法定速度で進むバスに揺られていた。

清華さんはバス停で待っていた。待合い席に座って、待ちくたびれている様子だった。バスの窓越しに目が合う。ボクはいつの間にか混み合ったバスに辟易しながら彼女の元を目指した。レディーススーツを着た彼女は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「むむ」

「えー、と」

「むむむ」

「ジューズおごります」

よろしい、とすました顔で言われる。ボクはあわててすぐ近くに
あった自販機でコーヒーを買った。もちろんブラック。謝りを入れ
ながら手渡す。

「なんていうか、遅刻はダメだよ、遅刻は」

いいわけとかしたら余計に怒るだろうなと思って黙って彼女の話を
聞いていた。話はほどほどで終わって、立ち上がった。立ち上が
ろうとしたボクの前にきて、そのまま覆い被さってきた。額に小さ
な感触。

「うわ、こ、こんなところでしないでくださいっ」

「いいだろう？ 減るもんじゃないし。これで許してやるんだから、
かわいいものじゃないか」

「でも、白昼堂々とキスするなんて……」

なんか大胆すぎる。ただでさえ人が多いのに、バス乗り場なんて
昼間、人がいないことなんてないのに。実際、こんなボクらに視線
が集中していた。どう考えても程度の過ぎた女同士のじゃれ合いだ
った。

「それなら、夜ならいいのか？」

その発言はこの場では不適切すぎます！ いやどこで言ってもダメ
だから！ にやけ笑いの清華さんを促してこの場を去ることにした。
ほんと、彼女にはしてやられている。まだ昼食には若干の余裕があ
るとのことで、清華さんの買い物先を先にすますことにした。河川敷
の近くに建てられた複合型のビルには、たくさんのブランドショッ
プが入っている。建物中央に設置されたエスカレーターに乗って上
の階へ行く。彼女の足は小物を多く取り扱っている店で止まった。
彼女は迷いなく先へ進んでいく。ボクはきたことのない店だった
ので店先から見物することにした。女子高生や若いカップルが客層
の中心で、商品も女性をターゲットにしているようだった。アロマ
やマグカップ、キーホルダーやネックレス、どれもかわいらしかっ
たりどこか女性的な雰囲気を出していた。

彼女は時計のコーナーにいた。視線をちょこまかとさまよわせて、

やがて肩を落とす。

「どうしたんですか？」

「いや、どうやら私の探してた時計は売り切れてしまったようだ」
店員さんに訊いてみたものの、商品は一点もので、取り寄せも効かないらしい。ボクはよしよしと彼女の頭を撫でた。こういうときはどうしようもない。せつかくだから、とボクはペアのネックレスを買ってあげることにした。二つ組み合わせさせて一つの絵になるなんていうクサイやつだ。

意外とボクの彼女は気分屋なのかもしれない、いや、今までボクが気付いていなかったただけかも。すっかり上機嫌になった清華さんは鼻歌を歌いながらすぐ近くの楽器店へ向かった。あれ？

「清華さん、なんか楽器でもやってるんですか？」

「ん、話していなかったな。趣味でピアノをやっているんだ。もう習ってはいないけどな」

鍵盤楽器の置いてあるコーナーで彼女は試奏がてら、白鍵に触れた。思いのほか音が大きく、音量を調整して弾き直す。猫ふんじやつたでも弾くのかなと思ったら全く違った。彼女の演奏に場がどよめきはじめる。両手は器用に鍵盤を移動する。演奏上の都合なのか、詳しくないボクにはよくわからなかったけどたまに交差をさせていた。

たまたま隣にいた大人の男の人がニコライ・カプースチンの作品だと教えてくれた。と、言われてもボクにはよくわからなかったんだけどね。弾き終わった彼女は予想外の拍手に驚きを隠せないようだった。

彼女はピアノ雑誌の最新刊を買って、さらに違う店に向かう。ボクは荷物持ちを申し出たがその必要はないと断られてしまった。もう一つ寄りたい店があるんだ、と案内をしながらボクの隣を歩く。空いた手をボクの指に絡ませて繋ぐ。彼女の手は冷たく柔らかく、赤ちゃんの肌のような繊細さを感じた。

ここだ、と言って清華さんは立ち止まる。ボクの行ったところの

ない場所だ。だって、いつもかあさまにそういうのは買ってもらっているし……。

「どうした？」

いや、その、ボクあれだし、さすがに恥ずかしいっていうか、いのかなここにきて。店内をざっとみる。シンプルな白から派手な柄のものまで、たくさんのが飾られている。その衣装のすべてが肌着　ショーツとかブラとかキャミソールとか　だった。

20th・love：試着室にて

「ぼ、ボクここで待ってます」

不服だろう、唇を尖らせる清華さん。恥ずかしいから勘弁して欲しいボク。二人に割り込んできたのは笑顔の素敵なメガネの店員さんだった。

「初めてですかぁ？それだと恥ずかしいですよー、でもご安心ください。私たちスタッフがサポートさせていただきますっ」

高価そうな白のスーツにタイトスカートの彼女に背中を押され、結局店内へ入ってしまった。いや、むしろこれを機に慣れておいた方がいいのかもしれない。いざ、ランジェリーショップへ。

白の照明が商品に映える。ボクの目を気にもせず、清華さんは下着を手を取ったりブラを胸のところに当ててボクに似合うかどうか訊いてきた。そんなのうまく答えられるわけがない。でもシンプルの方が彼女には似合うと思ったのでそれは忠告しておいた。

視線を違うところにむける。女性客が数人の他に、カップルのお客さんもいた。男の人はもっぱら視線をいろんなところにさまよわせていた。ちゃんと見なさいよとふくれる女の人。その光景がほほえましい。

「お客様、お気に召す商品はございましたか」

驚いて後ろを振り向くとさっきの店員さんが、メジャーを持って立っていた。今日は清華さんについてきただけと伝える。せめてサイズを測っておくことを勧めてくる。サイズと言われても、これはパッドだから測ってもしょうがない。けどなんか引き下がりそうもなかったので素直に測ってもらうことにした。

……。うん、なんだろう、この虚しさは。Bカップと言われたところで何の感動も起きないんだよね。清華さんはもう違うところに行ってるし。ボクはとりあえず礼を言って店員さんから離れた。

何着か下着を持った彼女は試着室へ行っていると告げた。それを

見送ろうとすると清華さんの足が止まった。

「いやいや、君もきなさいよ」

はい。はい？腕を引つ張られるボクは抵抗もできずに連行されていく。誰かこの暴挙を止めてください。女の子同士でもそこまではないでしょ、普通……！

一般的な洋服店のそれより広めにとられた試着室。カーテンは全身を隠すようになっていて、向こうからこちらの様子はうかがえないようになっていた。……ちょっとした密室だ。

「少し後ろを向いてくれ、さすがに素肌を晒すのは恥ずかしい」言われなくても後ろを向いていた。衣擦れと小さく漏れる彼女の声。視覚がないぶん、その音は余計強調されて聞こえた。ボクは素数を数えながら（途中で偶数を数えていることに気付いた）彼女が着替え終わるまで待った。

「よし、こつちを見てもいいぞ」

いやいやいや。着替えたといっても下着姿じゃないか。やっぱりボクは振り向けない。そんなボクに彼女は溜め息一つ。

「ほれ、どうだ」

ボクの肩を持って強引に振り向かせた。何ですかその握力は。結局彼女の下着姿を拝むことになってしまった。

淡いピンクのブラ、胸元には花の模様があしらわれている。視線を下に動かしたのは間違いだった。下も肌着一枚で、ブラに合わせるように。おそらくワンセットなんだろう。同じデザインのショーツを穿いていた。素肌はなまめかしいというより健康的な肌色といった感じだった。

「意外にじろじろ見られると……恥ずかしいものだな」

少しばかり清華さんの頬が赤い。ボクはごまかすように視線をさまよわせる。その内、腕に小さな痣を見つけた。どうしたのか尋ねると、彼女はそれを片方の腕で隠し、苦笑いした。

「体育の時間にな、怪我をしてしまったんだ」

たいした傷じゃないらしい。ボクはそれ以上気にしないようにす

ると、それよりも腕で胸が強調されていることに気がついてしまった。意外にがっかりじゃないかもしれない。ってなにやましいことを考えているんだボクは。

「さて、違うのも試してみようかな、……ほれ」

後ろを振り向くように指示される。それからはさっきのくりかえしだった。正直どれが一番似合うだなんて分らない。ボクにそういうセンスはないし、あっても困る。ボクは無難なコメントを彼女が怒らない程度につけていった。どれも着こなせてしまう彼女。派手なものは似合わなかったけど、黒や紫のようなきわどいものでも彼女にかければ大人っぽさを強調してくれる。

次第に彼女の下着姿にも慣れていった。恥ずかしさというものはそれなりに薄れていくものらしい。彼女は最後の下着に手をかけた。後ろを向いている途中、衣擦れの音が止まる。う、と小さいうめきが聞こえた。ボクは後ろを向いたまま尋ねる。

「いつ、痛い」

あまりにも苦しそうだったので、ボクは焦って振り返った。彼女はショーツをはきかけのところだった。どうやら足の指がつってしまっただけらしい。……いや、ちょっと待って。足下より上を見ちゃいけないんじゃないか？

「絶対顔を上げるなよ！」

怒号が響く。その声自体に反応してしまっただけでボクは視線をあげてしまった。……言葉にできません。下手に言えば殺されます。

「~~~~~っ！」

その前に、ボクがまずい。今更どこに目をやれというんだ。いや、それは大事な部分からは目を伏せたよ。だけど顔は見られない。絶対に。なるべく違う想像をするんだ、何というか、富良野高原の大自然みたい。もう、いいぞと言われて顔を上げる。って

「うわあっ」

「おおっ、しまった」

なんでブラしてないんですか！見てしまった。ホテルの浴室で邂

逅したときは湯煙でよく見えなかったけど、今回はそれはもう。彼
女の叫びと同時にボクの意識は吹っ飛んでいった。

21th・love:ランチ

耳に入る音が雨の音じゃなくて、換気扇の回る音だと気がついたのは目が覚めてからのことで、清華さんは申し訳のなさそうな顔でうつむいていた。ボクは身体を起こし、清華さんからここが従業員の休憩室だということを教えてもらった。古い型の家電は汚れが目立っていて、テーブルの上にはカップラーメンの容器が置いてあった。箸は容器の上。

ボクはソファに寝かされていて、窮屈な姿勢をしていたせいか、少し身体が痛かった。ボクは背伸びを一つして、心配そうにする清華さんの頭をなでた。……少し気恥ずかしいのは、彼女の素肌を見てしまったからというより、二人であんなところに入ったことを他の人に知られたからという理由のほうが大きいからかもしれない。

従業員のかたは仕事に戻ってしまったらしい。帰りに礼を言っておこう、と思った。恥ずかしはあるけれど、黙って帰るのはよくない。

ボクたちはもう少しだけここに残ってから行くことにした。ボクたちのような一般客がここにはいけないような気がしたが、ゆっくりしていいと言われたらしい。きつと無害に思われたんだろう、そして実際に無害だ。彼女がコーヒーを入れてくれる（それぐらいの備品だったら使ってかまわないといわれたそうだ）。スプーンで粉をすくい、それがさらさらとコーヒークップに流れていく。ポットのお湯を入れ、小さなスプーンでかき混ぜる。

「律は、角砂糖三つだったよな」

うん、と頷きを返す。彼女はもちろん何も入れない。カップを置くと、こと、と乾いた音が部屋に響いた。換気扇の音がうつすらと流れる有線をかき消す。ボクは冷めるのを待ってから一口ずつ飲んだ。

彼女の身体を思い出す。清華さんの腕、いや、腕だけじゃない。

身体の所々に彼女が隠した傷と同じようなものがいくつもあった。

薄紫色の痣は最近つけられたようなものじゃない。だから彼女自身もそれに対して無防備になつていたのかもしれない。ボクは迷つた。今がその理由について訊くタイミングなのか……違うような気がした。今日はせつかくのデートなのだし、お互い気分を害したくない。だからボクは違う話をすることにした。

「そういえば、そろそろおなか減つたね」

そう言いながら、おなかをさする。ふふ、と清華さんは目を細めて笑つた。

「そこはぬかりないぞ。今日もお手製のお弁当を用意してきた」

今日は少し大きめで、二段積みのを箱だけ見せ、またしまう。きつとおかずも用意してきたんだと思う、いつもはサンドイッチだけだから。ボクの気分もだいぶ落ち着いてきたので、ここをおいとますることにした。ボクは彼女とコーヒーカップを洗つて、一緒に店へ戻ることにした。まだ清華さんも会計をすていなかった。

「それにしても、女の子同士で何してたんですかあ？」

待つていたのはニヤニヤ顔の店員さんだった。清華さんがしどろもどろになつて下着が似合っているか確認してもらつていただけだと答えたけれどあまり信じてもらえなかったようだった。赤くなりながら二人は店を出た。

ビルを出ると、店内以上の喧噪が溢れていた。側の道路は混んでいて、車たちはエンジンを不服そうに鳴らしながら先へ進まないものかと待ちくたびれているようだった。クラクションの音から逃げるように、ボクたちは喧噪から離れていった。

歩いて五分ぐらいで着く河川敷。昼の高く、明るい太陽を浴びて川は光の粒で溢れていた。ランニングをする短パン姿の老人、犬に散歩をさせられている女の子とそれを優しい目で見守る女性。さっきの騒音を忘れてかのように、静かな時がここには流れていた。

ボクたちは食事ができるテーブルとベンチを見つけて、そこで昼

食をとることにした。彼女がお弁当を広げて、ボクはプラスチックのコップに二人分の飲み物を用意する。冷えた紅茶。外に出て熱さを感じていたので彼女の判断は的確だった。律儀にボクたちは食事の挨拶をして、パンを口にする。今日は少し豪華に、クラブサンドだった。

「お手軽で、しかもおいしい。片手で作業はできるし、これ以上の料理は存在しないだろう?」

彼女はまるで自分が考案者かのように胸を張る。ボクはなんだかおかしくて笑ってしまった。おかずにも手を出す。唐揚げは噛むと同時に肉汁が溢れて、チーズの入った卵焼きはほんのりと塩味がついていてとてもおいしかった。

二人で昼食に舌鼓を打っていると、一匹の猫がやってきた。首輪はなく、どうやら野良らしい。清華さんはタコさんウインナーをつまむと猫のほうへ放ってやった。うまくキャッチする黒の野良猫。満足そうに背伸びをして、ぶらりとどこへ行ってしまった。彼らはのんきなのか、必死なのか、ぼんやりとそんなことを思った。考えることはあるんだろう。でも多分ボクたちとあまり変わらない。ボクたちだって毎日そんなことを考えて生きているわけではないのだから。そう結論づけて、ボクは清華さんとの会話に戻った。

最後のクラブサンドに手をつけたボクに、彼女がぼそりと言った。「こつやって、外で誰かと食事するのは久しぶりだな」

親は共働きで、滅多に家に帰ることはないらしい。お互いにすれ違いの暮らして、家に帰ってきてても夜中だったりして、ろくに親の顔も見られていないという。

「だからって夜遊びしていい理由になんかならないんだけどな」
笑う清華さん。自嘲じみっていて、どこか切なくて、ボクはそれをごまかすようなことしか言えなかった。それ以外、ボクにはどうしようもなかった。

「でも、そうじゃなかったらボクたちは逢えなかったんだよ?」
そうだな、確かにそうだ、噛みしめるように彼女は繰り返した。

22th・love:おひるねのじかん〜UFO

昼食が終わって、ボクたちは河川敷を散歩することにした。なかなか斜面を清華さんは走るように降りていく。楽しそうな表情はまるで少年のようで、心からの笑顔をボクに向けてくれた。ボクも真似して駆ける。彼女に追いつきそうになったとき、バランスを崩してしまった。彼女がそれを受け止めてくれる。清華さんに抱きとめられながら、ボクは彼女の肩におでこをぶつけた。彼女の髪からはふわりといい匂いがした。

川の水はあまり綺麗とは言えず、また防護柵で守られていたので遠目から眺めることしかできない。でも今日の晴天のおかげで右手下流側に目を凝らせば河口はすぐそこで、海に向こうにはうつすらと島を見ることができた。よっぽど晴れないと見ることは難しい。夏には二人で海に行こうかと提案する。彼女は喜んで頷いた。せっかくなら遠くへ行こうと清華さんが言う。

「もっと北に行くとな、こことは比べものにならないほど澄んだ海が広がっているんだ。私は一回しか行ったことがないから、今度は律と一緒に行こう」

未来の話をすることがすごく楽しい。そういう話ができることがすごく嬉しい。ボクたちは何も、先の見えない現在を生きているわけじゃないんだ、と信じることができたから。

散歩の途中で足を止め、二人は雑草の芝生へと腰掛けた。洋服が汚れるからと用意周到な清華さんがシートを下に敷いた。二人が腰掛けるとちょうどいい狭さだった。肩を寄せ合い、向こう岸を見つめる。無言の、密度の濃い時間が流れる。話しかけようとする、彼女は静かに寝息を立て眠っていた。

彼女の香りを感じながら、ボクは彼女の髪をなでた。さらさらで、首元にかからないぐらいの長さ。ボクのほうが長くて、お互いに似合っていた。ボクは彼女が起きるまでずっと、ゆっくり彼女の髪を

梳いていた。

清華さんはボクに身を委ねてぐっすりと眠っていた。彼女が目を覚ますのに一時間ぐらいかかった。ボクも途中でうつらうつらとしながら、彼女の寝顔とこの街の景色を眺めていた。目を覚ました彼女は背伸びをするともう一度寄りかかり、胸が高鳴るほど甘い声でつぶやいた。

「心地いいな、律の側は……もうちょっと、こうしていたい」

ボクは肩を寄せて、頷いた。しばらく経って、ボクの手を優しくどけた。立ち上がり、繰り返し背伸びをする。ボクはシーツをたたんで、彼女にならった。ここでぼんやりしていてもよかったけど、さすがに手持ちぶさになってしまう。

ボクは次どこに行く予定なのか質問をした。彼女から帰ってきたのは意外な言葉だった。

「律は、ゲームセンターに行ったことはあるか？」

純平に誘われて 強引に引っ張り出されて 何回か行ったことはある。そう答えると清華さんはあごに手を当てて、頷いた。

「私は行ったことがないんだ、だから案内してくれ」

ボクは承諾する。せっかくなのでアミューズメントパークへ行くことにした。アーケードゲームばかりでは飽きてしまっただろっし、第一ボクが得意じゃない。運良く歩いてすぐのところ複合型の施設があった。外観は決して新しいとは言えないけど、昔から人気のある場所だ。自動ドアを開くと、清華さんは耳を塞いだ。ボクは苦笑いしながら店内へ入っていった。人でごった返していたので、二人は手を繋ぐ。片手で耳栓をしながらそわそわと彼女は視線をさまよわせていた。

とりあえずベタに、UFOキャッチャーから遊ぶことにした。あれが面白そうだ、と指をさしたのはお菓子の詰め合わせが置いてあるそれだった。

「清華さん、色気より食い気ですか？」

「むむむ。それは失礼だと思わないかね？」

失礼しました。ボクは外観を眺める。箱形の景品はくぼみができているが、それが上になるように置かれていた。一旦倒して、それから横にクレーンの爪を引っかけなければ取れない仕組みのようだ。ひとまず、ボクがお手本を見せる。お手本、といっても取れる保証はないんだけど。

お金を入れて、ゲームスタート。どうやら決定ボタンを押さなければ自由に方向を調整できるようだ。ボクは運良く横に倒されている箱へ狙ってクレーンを持っていった。彼女は横に行き、そこから案内してくれる。彼女の目は真剣に箱を見つめている。口元はゆるんでいるから待ち遠しくてわくわくしているんだと思う。

二人納得したところに置けたら、決定ボタンを押す。クレーンがゆっくり下へ降りる。もう一回ボタンを押すと、そこからは動かすことができない。うまい位置に持っていたと思った。爪が箱を掴もうと開く。片方の爪が引っかかる。もう片方は……。爪は箱の上を滑っていった。掴んだほうも箱の重さでバランスを崩して外れる。むー、とボクは思わずうなづいてしまった。

今度が私がやってみる、と清華さんが言った。ボクは順番を渡してあげて、かわりに横から指示することにした。窓にかじりつくように箱を見つめる。そのうち箱が逃げ出しそうな気がする。彼女が楽しそうならそれでいいんだけどさ。決定ボタンを押し、タイミングを計ってもう一度押した。

爪が開き、今度は両方がそれをとらえる。クレーンは揺れながらも、出口まで搬送して、爪を開いた。がたん、と景気のいい音がする。彼女は景品を手にとるとボクに見せつけてくれた。本当に子供みたいに笑う人だ。ボクはいい子いい子と頭をなでてあげる。つま先立ちをして、髪を梳くように。心地よさそうに彼女は目を細めた。いつもの凛々しい顔よりこっちの顔のほうが似合っている。けど、それはボクにだけ見せる表情であってほしい。そう願った。

23th・love：離れたくない

「こつちに手相占いがあるぞ！やってみるか？」

ボクは彼女の気のすむように、と笑って返事をした。一見怪しげな機械。なぜかキャッチコピーが『しかし地獄行く』だった。いい結果が出そうにないですよこれ。けど占い師が監修したもので、なかなかの評判らしい。ボクたちは並んで順番を待った。なんか懐かしい感覚だな、と清華さんは言った。

「一度だけ遊園地に行ったことがあつてな、半日ぐらい順番待ちで終わつたんだが、それでも、待っているだけでも楽しかったなあ」

遠い目は何を見つめているんだろう、彼女の横顔を見ながらそんなことを思った。やがてボクたちの番が来て、機械と対面した。顔の大きなおばさんが虫眼鏡を持つて睨んでいる。よくこんなディテイルで流行るな、とむしろ感心してしまった。ボクは左手、彼女は右手を指示された場所に置いた。

結果は横から出てくる紙の中に書いてあった。おみくじみたいに細長いそれを受け取って、機械から離れた。このままの関係を続けることはとても難しい、とまるでボクたちのことを見透かしたかの内容がそこには書いてあった。変化していくことを互いが認められたら、その関係は一生途切れることはない、とも書いてあった。ボクは静かにその言葉を噛みしめた。清華さんはどう思ったのだろうか。彼女は何も言わず、その紙を財布の中にしまった。

気を取り直して、今度は二階へと向かう。二階はゲームセンターではなく、ボーリングとダーツ、それとビリヤード場が設置されている。下に負けず劣らず盛況で、ボクたちはたまたま一レーン空いていたボーリング場で遊ぶことにした。点数表に表示するための名前を書き、シューズを借りる。清華さんはボーリングの経験があるという。一方のボクはやったことのあるものの、あまりの下手さに

絶望してから一回しかやっていなかった。

三回やって清華さんの完封勝ち。すっかり鼻の高くした彼女に機嫌を悪くした（ふりをする）。

「ちよつとぐらい手加減してくれたっていいじゃないですか」

「手加減されて勝ったところで嬉しいのかね、君は」

……もつともすぎてぐうの音も出ません。ボクは彼女からボーリングの特訓を受けるため弟子入りすることにした。

彼女のおかげでだいぶ上達した。スコアが三桁に届くだなんて、今までのボクにはありえないことだった。今までつまらないと思えなかったものが楽しくなっていく、その感覚もなかなかいいものだ。二人ともいい気分で施設を出た。日が傾き始め、人々も帰り路にゆっくり向かっているように見えた。ボクたちも例に漏れず、これから駅へ向かう。ボクはバスで帰るつもりだったけれど、彼女を駅まで送るぐらいの余裕はあった。

別れなんて下校のとき、いつも交わしているはずなのに今日はなんだか言いにくい。彼女もそうなのか、手を繋いだままうつむいているし、ボクもどこか気恥ずかしいのと何を言えいいのかわからないのとで黙って駅へと歩みを進めていた。

歩くと結構な距離があるはずなのに、思いのほかすぐに着いてしまった。何か言わないといけない。簡単な一言でいいはずなのに、それが思いつかない。口火を切ったのは清華さんのほうだった。

「あのな、律、できたら……もうちよつとだけ、あとちよつとだけ一緒にいさせてくれないか」

ボクが迷っているうちに、自宅の近くまで向かうバスが出て行った。寂しそくに眉尻を下げる彼女を突き放すこともできずに、ボクは一緒に電車に乗ることにした。

胸を撫で下ろす彼女を見つめる。いつもの強さは感じられない。そのことに違和感を抱きながらも、ボクは同じ車両へと乗り込んだ。混んだ車内の中、ボクたちだけが取り残されているような気がした。流れる街を眺めて、時間も経たないうちにボクたちの降りる駅へ

と着いた。あつという間に空は低くなっていき、今にも機嫌を損ねそうだった。ボクが別れを口にしようとする、先に彼女が口を開いた。

「あ、あのな、今日は……今日も……ええと」

胸の高鳴りは、きつと彼女が言いたいことに気付いてしまったからだろう。でも、あえて黙っていた。

「今日は、まだ、一緒にいたいんだ……」

頬を真っ赤にさせてうつむく彼女が愛おしい。意地悪をして、ボクは黙り続ける。ちゃんとやってくれるまで、わからないふりをする。

「だから、私の家に来ないか……？」

首をかしげる彼女。声は震えていて、今にも泣きそうだった。ボクの心臓は、きつと清華さんと同じように、強く、強く、繰り返すボクの心へノックしている。ボクは彼女の手を強く握り返して、笑った。

「いいですよ、ごちそう期待してますからね」

彼女はあわてたように何回も首肯して、ボクを彼女の家まで案内し始めた。彼女の家は駅にほど近い住宅街にあった。学校からは遠く、ぎりぎり歩いていけるような距離だ。きつい坂になっている住宅街の、一番高台のところに彼女の家はある。一戸建ての家は急に変わった天気の子かどこかくすんで見える。彼女が鍵を取り出し、玄関を開ける。清華さんに促されお邪魔するとどこかひんやりとした空気に包まれた。玄関の照明をつけるとその空気は気のせいだということに気付く。

ボクはダイニングへと通された。三人掛けのソファに座る。適当に観てていいから、と清華さんはテレビを点けた。ボクは何を話しているのかわからないニュースキャスターのまじめ顔をぼんやり観ながら、きつと昔はこのソファに三人で座っていたんだよな、と考えていた。ボクは彼女をそこまでよく知っているわけじゃないから、なぜ彼らがばらばらになっちゃったのか推測することしかできない

い。そんなことをしても意味がないと気付き、詮索することをやめた。

彼女は大きなネズミのような絵柄の入ったエプロンをして戻ってきた。

「ネズミ？」

「むむ、カピバラだ。全国のカピバラファンに謝れ」

謝れと言われても、どう見てもネズミと大差ない気がする。

「あーやーまーれー」

「ごめんなさい……。それでよし、と頷く彼女。何が食べたいか尋ねられて、ボクは逆に何を作ってくれるのか尋ねた。彼女が悩んでしまう前に、冷蔵庫の余り物から作ってくれてかまわないと答え直した。わかった、と間延びした返事が聞こえてくる。

鼻歌を歌いながら調理にはいる。最近凜々しさよりかわいらしさのほうが目立ってきた。きっとボクというのと気がゆるむのかもしれない。リラックスしてもらえらるならボクにとってはそれほど嬉しいことはない。ボクは彼女が調理する様子を見つめていた。その途中、律、と声をかけられる。なに、と返すとしどろもどろに彼女が返事をした。

「その、あんまりこつちを見るな、恥ずかしい」

怒られてしまった。ボクは仕方なくテレビの画面に戻る。ニュースは終わって、ゴールデンタイムの番組に変わっていた。ボクはかあさまに遅くなるとメールを送った。数分後、了承の返事が返ってきた。にしても、『今日は朝帰りかしら、きやつ（ハートマーク）』じゃないですよかあさま。そこは止めるべきでしょう親として。

やがてダイニングに炒め物の香ばしい匂いが漂ってくる。もう少しでできるからな、とボクに微笑んだ。何か手伝いをしようかと申し出たが彼女は首を振った。

「今日の律はお客様なんだから、ちゃんとてなさせてくれ」

そう言われると背中がこそばゆい。ボクは再び退屈なテレビへと向き直った。テレビを消して、オーディオをつけてくれと言われた

ので言われたままに操作する。枯れた癖のある男の声はボクもよく聴いたことのあるものだった。今は一旦活動を停止しているけど、彼らの音楽はいつまでも愛され続けている。

「私が好きな音楽の種類、覚えてる？」

テーブルに配膳しながら、彼女が尋ねた。

「ただ古いだけのものとか、ただ新しいだけものにはあまり興味がない……だっけ」

「うん。彼らはしつかり流れに乗り新しい音楽を作りながらも、オールドのよさを決して忘れることがない。それってすごいことだとは思わないか？」

ボクは強く頷いた。そういう音楽を作って、いまだに有名なのは彼らぐらいなものだったから。

どう考えても、清華さんの料理がまずいわけない。当然のように夕食はおいしかった。しつかりとした味付けがされていて、彩りも鮮やかだった。残り物で間に合わせたとは思えなかった。もちろん、冷蔵庫の中を確認したわけじゃないから定かなことは言えないんだけど、それを考える必要もなさそうだった。

ボクは彼女の言葉に甘えておかわりまでして、料理を平らげた。食器ぐらい洗うよと強引に手伝った。時々肩が当たるのがくすぐったい。洗ってる途中、じつと彼女に見つめられた。指の腹でボクの鼻をなぞる。泡がついていたらしい。ボクらはどちらともなく笑った。なんか今のこの時間が幸せだった。好きな人と二人で一緒にいれること。もっと近づきたかった。ボクは、彼女の肩を抱いた。

「あの……」

「いいぞ、して」

理性をつなぎ止める。こういうとき、ボクのアイデンティティは脆いものになる。奪ってしまいたい乱暴な感情と、胸をかき乱すような痛い切ない感情が同時にボクを奪う。女の子でも、こんな気持ちに襲われるのだろうか。

彼女は目を閉じて、静かにボクの唇を待っていた。ボクは顔

を傾け、瞳を閉じた。柔らかく冷たい感触が痺れに感じる。ゆつくり、繋がりをを感じる。唇を離してから、ずいぶん長いキスができるようになったなと思った。ボクたちの息はひどく荒い。ただ、微笑みは消せない。不意に感情が溢れ出してきて、それを抑えることができなくなった。なんでそうしたかったのかはわからない。同情でも、喜びでもない。ボクは彼女の胸に顔を埋めて、ただ泣いた。

「……………落ち着いた？」

うん、と返事をして、自分でもわかるぐらい子供っぽい声だったことに気がついて苦笑した。彼女から離れて、自分の腕で残りの涙を拭いた。ボクはどうして泣いたりしたんだろう、それを彼女にうまく説明できない。別に説明なんかいらない、と清華さんは苦笑いで答えてくれた。

「なんかして遊ぼうか、それとも帰る？」

こんな情けない顔のまま帰るのもどうかと思ったので、もう少しいさせてもらうことにした。今更、帰る理由も見つからなかった。なぜか親が公認している状態だし。清華さんのご両親にもちゃんと説明できると思った。

清華さんはオーディオの電源を消し、ボクを二階へと案内した。

……………正直に言えば、少し緊張している。

24th・love:その気/言葉

白いつまみを掴んで、ひねる。ポールに旗が引っかかり、かたかたと音がする。その回転はやがて緩やかになり、旗によって止められる。それが示す数字を見て、ボクは青い車を指でつまみ、駒を進めた。

彼女が押し入れから引っぱり出してきたのはボードゲーム版の人生ゲームだった。女の子の部屋にしてはシンプルで、無駄な装飾のない部屋。そんな彼女の部屋に遺物とも言えるものが眠っていると知らなかった。野球盤もあると言っていたけど……お父さんが買ってきたものを大事に持っていたと聞いて、納得した。きっと、彼女が小さいときに彼と、あるいは家族でよく遊んだんだろう。それに付き合っただけなのは当然だ。何よりも、彼女の喜ぶ顔が見たくて。

二人で遊ぶ人生ゲームはどこか物足りないものだったけれど、時間を埋めるのには充分だった。マスに書いてある指示に対してコメントを入れたりして、会話が途切れることもなかった。遊んでいるうちに、あくびの数が増え始める。ボクたちはゲームを片付けて、しばらくぼんやりとしていた。

時計の針の音は規則的で、気のせいかなだんだん大きくなるような気がした。間が持たなくなつて、ボクは清華さんに話しかけた。

「なんか、することなくなっちゃいましたね」

そうだな、と小さく答えが返ってきて、うつむいた。と、突然頭を振って、シャワーを浴びてくるとボクに告げた。覗くんじやないと釘を差される。そんなことしないよ……ていうか、清華さん、人のこと言えないじゃないですか。

「む、それも、そうだな」

口元だけ笑みを浮かべて、彼女は部屋を出て行った。詮索するのもよくないな、と思つてボクは律儀に何もせず待った。シャワー

という単語を聞くだけでよからぬ想像をしてしまう。自分の家なんだから、お風呂に入るのは当たり前じゃないか。彼女は三十分もしないうちに部屋に戻ってきた。生地の薄いホットパンツにＴシャツという昼に比べてずいぶんトラフな格好だった。白い足が露出している、でも彼女はそれを気にしていない様子だった。

彼女の髪からはシャンプーの香りがした。彼女はボクにシャワーを浴びていけいいと言った。着替えがないことに気付いた彼女が着替えを貸してくれた。行きかたを教えてもらって、そのとおりに進む。ボクは引き戸を開けた。

決して広いとは言えないお風呂場にはまだ湯気と彼女の匂いが残っていた。鏡越しに自分の白い肌を見つめる。ボクは結局のところ男なんだ、と思い知る。どんなに肌が白くても、メイクをとってしまえば浮かぶ本当の顔。童顔なのには変わりないけど、やっぱりごまかせないものはごまかせない。このボクでも、清華さんはちゃんと好きになってくれるのだろうか。いや、好きになってほしい。ボクに新たに芽生え始めた、この自我を摘み取らないでほしい。ボクは心の中で願った。

夏用の長袖の寝間着に着替えて、ボクは部屋に戻った。清華さんはベッドに腰掛けてじっとしていた。声をかけると彼女はあわてるように返事をした。ボクは彼女の隣に落ち着いた。

「やっぱり、男の子なんだな」

素顔を彼女に晒すのは二回目だけど、最初は若干酔っていたらしい。ダメじゃないですか、未成年が飲んじゃ……。じっと見つめられて、ボクは戸惑う。やっぱり、今日は大人しく床で寝よう、と心に決めるとそのことを清華さんに伝えた。

「いや、一緒にいてほしいんだ、わ、私……準備はできているから」でも、ボクたちはまだ学生だし、そういうのはまだ早いような気がする。結局、彼女を納得させて、ボクは同じ部屋の床に眠ることにした。

「……律、どうしてもダメか……？」

暗い部屋、甘える声は今にも泣きそうで、ボクはそれを無視することができなかった。明かりを点け、ボクは横になっている彼女の頭をなでた。

「どうしたんですか？なんか今日の清華さん、甘えんぼうさんですね」

恥ずかしくなったのか、彼女は毛布で口元を隠した。

「こんな私は、らしくないか？」

いつもの彼女からは想像つかないけど、そのギャップがかわいい。そのことを素直に伝えた。ますます毛布をかぶる彼女。

「かわいいつて言うな……でも、なんか、嬉しい」

こんな清華さんをどうにかしてしまつていいのだろうか。葛藤が胸の中、強く渦巻いている。彼女は布団から顔を上げ、うまく眠れないと告げた。唇が細かく震えている。

「私たちはまだ未熟かもしれない。でも、今じゃなきゃいやなんだ。好きだから、一緒になりたいというのは悪いことなのか？私は律と、一緒になりたい」

……ボクは、彼女から毛布を優しくはいだ。彼女は仰向けのまま、何かにこらえるように必死に目をつぶっている。まだ触れてもいないのに。ボクはそんな彼女の顔に近づいて、優しくキスをした。それは、長く、熱いものになつていく。ボクは一旦唇を離れた。

「ちよつと、一歩進んでみますか？」

清華さんは頷きだけを返す。承諾と受け取つて、ボクはもう一度唇を重ねた。唇と唇の間から舌を出してみる。それを彼女へと割り込ませてみた。吐息が漏れる。ボクはかまわずに舌を動かした。なんでこんな乱暴な、それなのに優しく包み込みたい感情が同時に襲ってくるんだろうか。この感情だけは何度味わっても説明できないものだった。

もう一度唇を離すと、彼女が荒い呼吸をした。ボクも胸を上下させる。

「ごめんなさい、苦しかったですか……？」

彼女は首を振って、目を細めた。

「いや、大丈夫、だ」

「なるべく優しくしますから」

それは心からの言葉で、それ以上の意味はない言葉だった。

それだけだった、はずだった。彼女の表情が変わった。目を見開いて、ボクを押しつける。ボクは尻餅をつき、部屋を出て行く彼女を見送ってしまった。ワンテンポ遅れて、彼女を追いかける。

25th・love：変わりゆくこと

キッチンに響くのは水の音で、それに隠れるようにもう一つの音がした。そこに清華さんはいた。肩で息をしている。胃液の匂いが強く鼻につく。ボクは彼女を楽にさせようと背中をなでる。

「……でくれ」

ボクは聞き返す。彼女はボクを払いのけた。その勢いでボクは背中を強く冷蔵庫にぶつけた。

「触らないで、くれ」

腕で口元を拭う彼女は誰の目から見ても明らかなくらい怯えていた。全身が、身震いしている。

「君は違うと思ったのに、あの人と同じことを言うんだな」

「え……」

「男はみんな、ウソツキだ……あんなの、苦しいに決まってる……怖い……苦い……君は……怖い……」

頭を抱え、一つの言葉を繰り返し始める。怖い怖い怖い怖い……。支離滅裂な状況で、彼女が破綻してしまいそうになっていた。

清華さんは虚ろに同じ言葉を繰り返していたかと思った矢先、突然発狂したかのように叫び出した。ボクはなすすべもなく、彼女が疲れ果ててその場で眠るまで、ただ立ちつくして待ち続けるしかなかった。ボクはそれでも彼女に手を差し伸べなければいけなかったんだろうか。答えは出なかった。

眠った彼女を抱きかかえて、ベッドへと運んだ。清華さんはじつとりと汗をかいていて、ボクはそれをタオルで拭ってあげた。ベッドのシーツには彼女が強く掴んでいたんだろう、皺が寄っていた。いつかボクがはがした毛布をかけ直す。眉を寄せた彼女はときおり辛そうな寝言をつぶやいていた。ボクはパジャマを脱いで、着替え直した。置き手紙を書こうかと思ったけど、なにを書けばいいのか

いけないのかわからなくて、結局ペンを置いた。そして、この家を出た。

外では、雨が地面を打ちつけていた。コンクリートに雨音が落ちる音は群れになってボクの耳と胸を責める。綺麗な旋律に聞こえた小さなころが懐かしい。暗闇に姿を紛らせた雨粒は、あつという間にボクを濡らす。夢の中のボくと、今のボクがシンクロする。でも……涙は出なかった。彼女の絶叫を受け止めるだけで、ボクの心は損なわれてしまったかのように空洞に感じていた。

……胸が痛いのに、その悲しみを表現する手段がない。暗闇がボクを奪う。雨に打たれ、ボクはひざまずいた。ボクは夢の中の自分になりたくなくて、必死にボクを取り戻そうとする。ボクにできることは何なのか、どうしたら彼女を変えることができるのだろうか。ボクは奇跡を信じない。でも、悲劇なんかいらない。すべては、二人を取り戻すために。

そういうふうと考えられてからは、ボクはだいたいぶ落ち着くことができた。再び立ち上がり、夢の中の自分と決別する。ここでうずくまっけていても何も変えられないんだ。変えるためには動かなくてはいけない。悲しみに暮れていいのはヒロインだけだ。ボクは、誓わなければいけない。彼女を変えるんだ。例えそれがボクの自己満足でエゴだったとしても、ボクは彼女の笑顔を取り戻さなければいけない。

そのかわり、ボクには目をそらすことができない事実があった。そこはボクが変わらなければいけないところだ。そりゃ、彼女の初めてにボクはなりたかった。でも、そうじゃないからとしてどうなるっていうんだ。ボクが彼女を好きな気持ちは今もこれからも消えることはない。それによって辛い思いをしたのなら、ボクが忘れさせてあげたいとまで思った……ボクは経験ないし、それをうまくできるかどうかなんてわかんなかったけど。

彼女が変わるためには、きっとボク自身が変わらなければいけないんだと思う。ボクが変われば、きっと彼女も変わってくれる。そ

んな簡単に切れる絆だとは思えなかった。いくつかの日々を越えて、ボクたちはここまでできた。ここまでこられたんだ。きっと難しくない。ただ、時間がかかるだけだ。ボクは深く深呼吸した。ボクは変わっていく。

次の日、昼近くに目が覚めた。タイミングよく携帯が鳴り、それは清華さんからのメールだった。しばらく逢うのはやめよう。そんな内容のものだった。今のうちは仕方ないだろう。彼女だって、気持ちを整理する時間ぐらいほしいのだと思う。ボクは心穏やかに承諾の返事をした。彼女がどういうつもりなのかはわからない。けど、二人に時間が必要だったのはわかっていた。ぱたん、携帯を閉じて、ボクは新しい朝に挨拶をした。

ダイニングに置かれたテーブルには朝食には遅い食事が置かれていた。かあさまが最後の盛りつけを終え、椅子に座った。ボクも向かい合わせに座る。うまく切り出せるかな、パンをくわえながら考える。食事が終わってから、ボクは話すことにした。

「かあさま、ボク、決めた」

首をかしげる彼女の顔はとても優しく微笑みを浮かべている。ボクは一呼吸置いて、切り出した。

「やっぱり、ボク、男の子として生きるよ」

26th・love：ボクの決心

微笑みを絶やさなにかわりに彼女は溜め息を一つ、吐いた。ちょっとの時間があつて、頷きを返す。

「理由だけ、訊いてもいいかしら？」

責めるわけではなく、興味というか、ただ知りたい様子だった。それに、ボクが隠し事をしなければいけない要素は何一つとしてない。ボクは正直に話した。ある一人の女の子のこと。彼女を助けるためにはボクが変わらなければいけないこと。そのために、ボクは自分を認めなければいけないこと。身体がこうである以上、ボクは性をこまかすことはできない。それが、この『病氣』に対して自分で導き出した答えだった。

「そつか……ごめんなさいね」

眉尻を下げた彼女はそう返事をした。謝ることなんて一つもないのに。彼女はそれなのにボクの頭をなでてくれる。

「やっぱり、りっちゃん男の子だったのね。うん、そつか」

彼女のしてくれたことはすべて、ボクのためを思つてのことだった。いつか言つたように、ボクはそのことを否定できないし、否定したくない。このままじゃいられない、そのモラトリウムが予想より早く終わってしまっただけ。二人、小さな涙がこぼれる。

「かあさま、心配しないで。ボクはボクだから」

「そんなの、わかつてるわよう……」

途中で、彼女が悲しくて泣いているわけじゃないだと気付く。ボクの決意が嬉しくて泣いているんだ。そのことがわかると余計に涙がこぼれた。悲しいから涙を流すんじゃない。涙だって、喜びを表すことができるんだ。ひとしきり泣いたあと、ボクたちは涙を拭いて食器を片付けた。今日はボクを引っ張り回すつもりらしい。新しいボクになるために。

化粧はしないですむように、女物しかない洋服ダンスの中でもユ

二セックスなものを選んで着た。ジーンズにボタンシャツ、中に柄物のＴシャツ。ちょっと清華さんの趣味っぽくてくすりと笑った。なんか心地がいい。

「今日はせっかくのオフですもの、りっちゃんをかわいい男の子に変身させてあげる」

ん？余計な形容詞がついていたような気がしたけど。

「かわいい、ですか」

「ん。かわいい」

「妥協する気は」

全くありませんと気持ちのいいぐらいはつきりとした返事が返ってきた。とりあえず髪を切りたかった。自慢の長い髪を切ってしまうのはもったいない気もしたけれど、それじゃあまり変わらないし、ハードロックのメンバーよろしくなるのもなんか違うと思ったので切ることにしたのだ。

「ああ、それだったらいい美容室があるからそこへ行きましょう？心配しないで、今は男の人美容室へ行くことが多いんだから」

それと、下着も男性用にしなきゃいけないし、洋服だってそうだし、いきなりかあさまの出費がかさんでしまうのは困りものだったが、彼女にとっては些末な問題らしい。

「大丈夫大丈夫、いざとなったらりっちゃんの今まで着てた服売るから」

容赦ないですねかあさま。ボクはもちろん、外見が変わったところで清華さんに拒否されることはわかっていた。これは下準備。本当の辛さに耐えるための、前段階。強く生きるための、誓いのようなものだった。

買い物から帰ってくるともう夕暮れで、かあさまはすぐに夕食の準備を始めた。ボクも手伝いをする。基本的なことは変わらない。ジャガイモの皮をむきながらボクはパパのことを尋ねた。

「パパ、いつごろ帰ってくるのかなあ？」

かあさまはにんじんを切りながら答えた。

「今月の終わりぐらいって言うってたと思うわよ」

こんなボクを見てパパはどう思うだろう。残念がるだろうか、きっと最初はそうかもしれない。でもちゃんと見てくれると思う。だってボクはボクなんだから。カレーの下準備をしながら、ボクはそう納得した。

夕食のあと、ボクは早めのお風呂に入った。首元を触って、改めて髪を切ったことに気付く。ずいぶん身体が軽くなった感じた。鏡の前でボクはどうしてもにやけてしまった。ちよっと浮かれすぎている。湯船につかって、考えることは清華さんのことだった。明日はちゃんと学校にきてくれるのだろうか、心配だった。きたとしてちゃんとボクを見てくれるかどうか、本当のところは確信がなかった。怒り出すかもしれないとさえ思った。なんとも言えなくて、明日の流れに身をまかせるしかなさそうだった。きてくれなかったら、どうしよう。ボクをもう一度迎え入れてくれるだろうか。そこまでの確信はなかった。

今日は何にも力が入らなくて、すぐに眠ってしまった。長く睡眠をとるのは久しぶりのことだった。

27th・love:トマドイノココロ

……目覚ましは無情にもボクに朝を運んでくる。ボクは仕方なく時計のアラームを止め、一階へと下りていった。いつものようにかあさまが朝ご飯を作ってくれている。ボクは眠たい目をこすりながらご飯を口に入れる。相変わらず内容の伝わってこないニュースをぼんやりと見つめながらご飯を平らげた。

自分の部屋に戻り、洋服ダンスを開けた。そこにはブレザーとズボンがハンガーに掛けられていた。昨日の朝急ぎでクリーニングに出したおかげでカビ臭くなっていた。初めて着る男子の制服。こんなときのために買っておいでよかった、とかあさまは言っていた。制服なんて、安くない買い物なのに……自分を、少し恥じた。

女子用の制服より生地がしっかりしているんだなと着てみて思う。下半身もズボンだから暑いかもしれない。鏡の前でくると自分を見回す癖が取れなくて、一人苦笑した。ふと時計を見て、焦る。笑っている場合じゃなかった。ボクは自分の部屋をあわてて飛び出した。

家を出る間際、かあさまが言った。

「がんばってね」

ボクは頷く。きつとかあさまは何でもお見通しなんだ。わからないことなんて何も無いような気がする。もう状況に甘えることはできない。ボクはこれから変わっていくことを願ったのだから。ボクは玄関を飛び出していった。

商店街まできてボクは走る速度を緩めた。目の前に美緒先輩が見えればまず遅刻の心配はない。ボクは彼女の肩をたたいた。

「にやつ、びつくりしたですよりちゃんくん……？」

まあ当然といえば当然の反応ですよね。改めて挨拶をすると彼女

は律儀に腰を折った。

「もしかしてりっちゃんくんの弟さんですか？」

まさか。ボクは一人っ子だし、ましてやボクはボク以外の何者でもない。ボクは首を振り、生徒手帳を見せた。

「えーっ、どういうことですかりっちゃんくん！まさか今流行りの『いめちえん』ってやつですか？」

別にイメチェンは流行ってないと思いますよ？といっても、それに近いものがあつたので曖昧に頷いておいた。立ち止まった彼女を促した。清華さんの話をすることは避けて、ボク自身が変わりたかつたと説明した。答えの一つには違いない。

「そですか。でもこう考えれば解決です」

彼女はボクの鼻筋に人差し指を当てた。

「りっちゃんくんは男装しているだけなのだ、と」

だからですね美緒先輩？そういう問題じゃないです、いや、なに攻めが清華さんとかボクが受けとかていうか男でもボクが受けなんだってなんか論点がずれてる！何をボクたちで妄想しているんですか！

「ふふ……ふふふ……」

やばい、戻ってきて……！そうこうしているうちに坂の前に来た。いつもならここで清華さんと一緒になる場所だ。周りを見回す、同じ色の制服の中に、見落とすはずのない、知った顔があつた。

清華さんは学校にはきてくれた。そのことに少し、安堵する。

けれど、声をかけるかは躊躇した。うまく声をかけられるか自信がなくて。そんなボクの気持ちを知ってか知らずか（多分知らない）、美緒先輩は一目散に清華さんのところへ駆けだしていった。ボクは二人と距離を置こうとする。結局美緒先輩がボクを指さして、清華さんと目が合うことになった。

彼女はボクを見たきり、うつむいた。口元が動いたけど、何を言っているのかは聞き取れなかった。美緒先輩が戻ってきた。

「用事があるから、先に行くだそうです。……もしかして、清華さ

んとかあったですか」

ボクは口ごもってしまう。沈黙はどんな言葉よりも雄弁だった。先輩は珍しく難しそうな顔をして言った。

「二人のことにはもう口出しはしないです。でも、もし清華さんを絶望させるようなことがあったら美緒、許さないんですからね」

思いのほか真剣な口調で……考えれば当たり前か……彼女はボクに伝える。ボクはその言葉を噛みしめて、二人で坂を上っていった。

朝の挨拶をしながら教室に入っていく。返事の途中で教室がざわついた。あの純平ですら、目を白黒とさせていた。転校生？それにしてもナチュラルな入り方だったぞ、それにしてもベビーフェイスだな、俺、こいつにだったら惚れてもいい、馬鹿、無茶しやがって……。ひそひそ話しているつもりみたいですけど丸聞こえですからね。というかお前ら妄想に対して自制心はないのか。

「お前、なんかあったのか？」

勘ぐられても困るので身の上だけ話すことにした。一通り話したあと、彼はこう切り出してきた。

「で、男装ということでもいいんだよな俺の希望的には」

誰が純平の希望通りにしますか！ボクは彼のこめかみを容赦なくげんこつでぐりぐりとしてやった。純平のうめき声って初めて聞いた。さすがに数秒でやめてあげる。

「男装違いますからね？男としてこの格好をしてるんだからね？」

おい、もうパンチラ拝めねえのかよとか言ったやつ表出る。ていうかナニのついてるやつパンチラ拝んで喜ぶってどんだけ変態なんですか。こっちはどん引きですよ。おかしなクラスメイトのおかげで口調までもが歪みそうになった。

そうして朝のホールルーム、担任によってまた一騒動が引き起こされるのであった。しっかりしてくださいよ、まったく……。

ボクのいわば『変身』は学校中でちょっとした話題になっていた。女装していたときに一度名を知られたけど、一年以上経ってだいぶ

落ち着いてきたので、自分が有名人だという自覚が薄れていた。こんなことで有名になっても全く名誉じゃないんだけどね。

こそこそ陰で言われるのは好きじゃないからいちいち首をツッコんでははつきり言うようにお願いしたんだけどこれじゃあきりがない。途中で投げて純平と美緒先輩にもそれとなく言ってもらうように頼んだ。味方がいるっていいことだな、とぼんやり思った。

それとは別に。理由がよくわからないのだけど、いつも以上に女子から話しかけられることが多くなった。クラスメイトから初めて名前を聞く先輩や後輩、授業を受けもらっていない女教師までもが色々と素性を聞いてきた。なんで女装をやめたかというよりはやら外見をほめ殺された感じだ。うーん、性格は変わってないし、ボクはボクなわけだけど、大きな変化に戸惑いを隠せないというか、やたら彼女たちの視線が熱っぽいというか、ボクのことを知ってどうする気なんだろうか。とりあえずボードゲーム部に部員が入りそうなので部長（そういえば、名前が思い出せない）にでも報告しておこう。

そのことよりも、ボクは一つのことだけが気がかりだった。それなりに授業をこなして昼休み、ボクはチャイムが鳴ったと同時に純平に断りも入れず教室を飛び出した。別に学食戦争へ飛び込んでいったわけじゃない。清華さんの教室へと一目散に向かっていく。途中で教師に見つかって速度を緩める。でも姿が消えたのを確認してまたスピードを上げた。

扉の前で呼吸を整え、引き戸を開けた。

……教室を見回したけど、彼女の姿はもうそこにはなかった。ボクは先輩をつかまえて彼女がどこに行ったのか尋ねた。よくはわからないけど、と返事の歯切れは悪かったけど、いつもの場所にいると思う、と返事が返ってきた。小さく礼をして教室を出る。廊下の窓から下を見る。彼女の姿は確認できなかったけど、彼女に追いつこうとまた廊下の床を蹴った。

28th・love：戸惑いの心

転げそうになりながら一階まで降り、中庭に続く扉を開ける。緑の匂いが鼻をくすぐる。湿っぽい風。ボクは肩で息をしながら彼女の姿を探した。いつかのことを思い出す。あのときは彼女が何年生で、昼間どこにいるのか、ましてやボクと同じ学校の生徒だなんて思いもしなかった。だから学校中を走り回って、結局彼女に先に見つけられたのだった。ボクのことを子猫だなんて呼んで、胸パッドをもみしだいて……あのときの笑みが、今は涙に変わる。ボクのやっっていることは間違いなのだろうか。でも、ボクが変わって、このボクを彼女が受け入れてくれたら。きっと、そこが本当のボクたちのスタートラインなのだろう。まだボクたちはそこにすら立ていない。

ボクは無人のベンチに腰掛けた。今までは隣に清華さんがいてくれた。ボクはこれからその幸せを取り戻さなければいけない。少しの時間だけそこで過ごして、立ち上がった。ここで待っていても、きっと何も変わらない。ここににいるだけでは何も手にすることはできない。ボクはこない彼女の姿を探しに再び足を進めることにした。廊下に戻り、扉を閉める。振り返ると、そこに清華さんがいた。

思わず、互いに息を飲む。そしてすぐ、彼女はボクに背を向けて逃げるように去ろうとする。ボクは彼女を呼びよと声をかけた。けれど、彼女は訊く耳を持つてくれなかった。話を聞いてほしいから、ボクは彼女に呼びかけながら彼女についていった。

「……ついてくるな」

「いやです、話を聞いてくださいっ」

誰をも遠ざけそうな冷たい口調に胸が軋む。ボクも懲りずに言葉を返す。それは胸の痛みを隠すため、それとたとえ今は嫌われても、きっと取り戻してみせる確信があったからだ……根拠はないけれど。

彼女についていくと、屋上まできた。基本的に立ち入り禁止で、人気もなかった。ここまで来て、彼女はやっとボクに振り向いてくれた。

そして、ボクの頬に痛みが走った。清華さんは、ボクに平手打ちをした。瞳は涙で潤んでいて、ボクはそれが怒りなのか、悲しみなのか、そのどちらともなのか判断がつかなかった。歪んだ口元が、皮肉を口にする。

「君は、私を馬鹿にしているのか？もういい、はつきり言うよ、私はね、『女の子としての逢坂律』が好きだったんだよ。私をただ優しく包んでくれるだけでよかった、ただ君は笑っているだけでよかったんだよ……。それなのに、なんなんだ、それで私が変われるとも思ったのか？外見でしか判断できない私を、本気で好きにさせようとしたのか？君に抱かれかけてよくわかったよ、男なんて、結局女に傷をつけるだけつけて自分はいい思いしようっていうことがね、もっと早く気付いていれば、繰り返さずにすんだのに……」

まるで支離滅裂だよ、清華さん。論点はすり替わっている上に、ただわがままと文句を並べているだけだ。彼女に何があつたかはまだわからない。薄々感づいてはいるけど。でも、その言い分はまるで間違っている。それだけはよくわかる。やっぱり、苦労するのはこれからだ。それに、ボクだって思う。そんなことを言われたところで、ボクの気持ちに変わりはない。だから、それを見越した上で、言つてやる。ボクは内心を悟られないように視線を彼女から少しずらした。

「じゃあ、別れましょう。今度は素敵な女性を捜してくださいよ」
息を飲む彼女。それをすぐ隠し、清華さんは溜め息混じりに言った。

「そうだな……こんな関係、うまくいくわけがなかったんだ」
沈黙はすぐ、予鈴でかき消される。ボクは先に屋上を去った。外は雨の匂い……。ボクが一番嫌いな匂いだった。

教室に戻ると、純平が珍しく困ったように眉尻を下げていた（そして、それは彼にとっても似合っていないかった）。ボクが首をかしげると神妙そうに言葉をボクにかけた。

「律、なんかあったのか……涙でぐしゃぐしゃになってるぞ」

ボクはあわててブレザーの袖口で指摘されたものを強引に拭う。

「また誰かに文句つけられたのか？ 誰だ、また俺が懲らしめてやるぞ」

違うよ、違う。あのころのような弱さ、もう今のボクにはないんだ。だから、純平が怒る必要はないんだよ……彼の優しさと強さに礼を言いながら、彼をなだめる。純平は納得がいかない表情ながらもボクの言うことを聞いてくれた。でも、けして何があったかは言わなかった。彼は、そのことを最も話してはいけない人だから、地雷を踏むわけにはいかない。

教師が何か説明している。ボクはぼんやりとしか聞いていなくて、何を言っているのかはわからなかった。彼が黒板に何か記号やら表やらを書き記している。何を示しているのか頭に入らないまま、黒板の内容をノートに書き写していた。そうして授業が進んでいく。

ボクは一つのことだけ考えていた。どうやったら彼女は彼女自身の傷と向き合うことができるのか、ボクがどうやれば彼女にそういうふうにするができるのだろうか。ボクは彼女に何を示すべきなのか。誠実でいること、と言葉にすることは簡単だけど、その誠実さをどうやって示すのかそれだけを必死に考えていた。

何も考えたくなくて、ボクは理科室で一人になろうと思った。どうせ今日も人がいないんだ。いつものように鍵を取りに行くと教師になぜかさつさとやれと怒られた。腑に落ちないまま理科室に向かう。ボクはそこに着いてやっと肝心なことに気付いた。そこは女生徒だらけでえらいことになってた。ボクの姿を見つけて群がってくる。正直逃げたかったです。ええと、部長ってどこの誰だったっけな……？

29th・love:告白(Intro)

昼休み、中庭で一人食事をする女生徒に声をかけた。

「隣、空いてますか？」

彼女はボクを一瞥すると溜め息混じりに食事に戻った。

「……勝手にしろ」

ボクはベンチに腰掛けると、戦利品であるカツサンドを口にしたら雨は午前中には上がっていて、ベンチも乾いていたようだ。第一そうじゃなかったら女子はここに座らないと思う。ボクは清華さんに適当にな話を振る。当然答えなんか返ってこない。それでよかった。今はゆっくり、関係を構築し直していくほかない。今までの関係は壊れてしまったのだから、新しく作るのが今のところ近道だと思った。

最初なんか相手にされないどころか逃げられてしまった。ただ、この場所が気に入っているのだろう、ボクがここを覗くとだいたい彼女がいた。お互い学習しないもの同士だな、と心の中で苦笑した。いちいち逃げ回るのが面倒になったんだろう、そのうちベンチを離れることはなくなった。

この日もボクは彼女と食事だけをとって、席を立った。明日もきっと、ここに来るだろう。明日は話を切り出してみよう。いいかげん話題もなくなったし。……結構案配は適当だった。そんなに悲観的な状況ではないことは確かだったから。これからボクは彼女のことを聞かなければいけない。それを知って、ボクが耐えられるかどうかだ。つけなければいけないけじめはいくらでもあるんだ。

そして、次の日、ボクはタイミングを見定めて、話を切り出した。

「真枝純平と清華さんの間に、何があったんですか」

いつかは訊いてくることを、彼女だってわかってたはずだ。ボクだっていつまでも、何もわからずじまいにしたいわけではないのだ。彼女

の横顔は、彼女と知り合ってから一番悲しそうな顔をしていた。遠くを見つめる瞳が、焦点を結ばない。唇を軽く噛むのは言いづらいというより言葉を選んでいるときの癖だった。ボクは彼女の返事を待つ。断られてもかまわない。時間はまだある。ただ、一步を踏み出さなければいけないだけだ。

「話せば、長くなるんだ……放課後、屋上にきてくれないか」

ボクの覚悟はとつくのとうに決まっていた。彼らにどんな関係があろうと、そのすべてを受け入れる。その意志に、揺らぎなんてものはない。ボクは有意義だけど退屈な授業を受けながら放課後までをなんとかやり過ごした。

屋上までの階段は自分の教室からはすぐのはずなのに、いやに遠く感じられた。緊張からくる胸の高鳴りは押さえようがなかった。なんてことはないんだ、と自分に言い聞かせて階段を進んでいく。扉を開け、彼女の姿を探す。梅雨の中休みに入ったようで、空は綺麗な茜色をたたえていた。その日が逆光になる位置に彼女はいた。フェンスにもたれかかって、缶コーヒーを飲んでいる。ボクは彼女に声をかけ、彼女の元まで歩いた。

「私は、元々こんな冷たい性格じゃなかったんだよ」

彼女は、昔話をそう切り出した。

30th・love：告白

「昔の私は男口調で、ぶっきらぼうなやつじゃなかった。どちらかというとなつぽくて、誰かに守られてないと安心できないやつだった。自分主体で動くこともない、まあ、地味な女という感じだったんだ。高校二年生になって、君たちが入ってきた。そのときは君のことは知らなかったし、真枝君のことも知らなかった。しばらくすると一年生が委員会なり部活動なりを始めるだろう？私は整備委員会に入っていたんだが、そこで初めて真枝君、彼と会ったんだ。仕事が彼とダブることが多くて、よく一緒に作業していくうちに色々と世間話するようになっていった。結構体格もよかつたし、何かと頼りになるところがあつてな、親密になるのにあまり時間はかからなかった。私も彼に対して浮ついてしまった部分があつたんだらう、だから気を許した。告白は彼からだった。私は断る理由もなかったし、何より好きだったから付き合うことにした。彼はとにかく頼りになって、私の指針になる人だった。彼に心を預けると、彼はその心の広さで受け止めてくれた。私はとても心地がよかつたんだ。……でも、それはただの夢だった。付き合いが深くなつて、何度かデートを重ねて、私は彼に身体を許した。お互いぎこちのない恋だったが、そこまでは問題もなく進んでいった。そこから歯車の調子がおかしくなっていたことに私は気付かなかつたんだ。彼の態度が徐々に怪しいものになっていった。素っ気ない態度を取るようになって、私は最初浮気をしているんじゃないかと疑った。でも、それはなかった。だけど、彼の態度はどんどん悪い方向に進んでいった。そのうち、彼は私に暴力を振るうようになった。いきなり、理由もなくなつた。しかも、人目につかないところを狙つて。肌が晒されるところはけして狙わなかった。彼ね、急に煙草を吸うようになってね、その火を腕に押し当ててきたりした。今はだいぶごまかせているけど、へこんじゃったのはどんなことをしても隠し

きれない。だから君を試着室に連れて行ったのは間違いだった。あのとき、傷のことを一瞬忘れていたんだ。隠さなければいけなかったのに。……いずれは晒そうと思ってたけど。首を絞めるのがとてもうまいんだよ、どこでそんなの覚えてきたのってぐらい。なんてこんな話、笑いながら、泣きながら語ってるんだろうね。でも彼のやり方だと跡に残らないんだよ、ちゃんと封じる場所がわかっているんだろうね。そんなことをしといて、そのあとで彼ははつとなった顔で、ぼろぼろに涙を流しながら謝り続けるんだよ。俺を許してくれて、すがりついてくるんだよ。私も馬鹿で、そんな彼を嫌いになれなかった。頭おかしいだろ、私を失神させようとする男を好きのままにいるんだよ。私は彼と離れることなんて考えもしなかった。だって、暴力を振るうのは時々で、それ以外ではとても優しく力強い人だったからな。きつと、私は彼に依存してしまっていたんだ。依存じゃない、寄生に近いものがあつたと思う。もつとも、そんな関係がいつまでも続くわけがなかった。私はついに病院送りにされてしまった。彼が謹慎していた時期があつただろう？ あれは喫煙が見つかったわけじゃなく、彼は学校では決して吸わなかったから。私に暴力を振るつたことが原因だった。私が辛いから、大事にはしてほしくないと頭を下げて、事件に発展することはなかった。けれど、そこで二人は終わってしまった。私は空っぽになってしまった。彼を失ったからだとかじゃなくて、単純に私には何もなくなってしまった。家では腫れ物当然に扱われた。意外に家族って冷たいものなんだよ、私を汚れたもの。実際汚れてしまったわけだけど。クズ当然に扱うようになった。なんでだろうね、痛い思いをしたのは私なのにね。文句言われたりはしない。ただ人としてみてくれないだけ。食事も餌も変わらない。ただ何かを与えられて私はそれを享受するだけ。そんな暮らし、逃げたくなるでしょ？ 結局親戚の家に一時的に預けられることになった。ちょうど叔父さんが武道家でね、色々武術から精神の鍛錬から色々教わった。空っぽなら、違うもので満たさなくてはいけない。枯れたままでは

よくないって叔父さんから教わった。厳しい人だったけど、決して暴力や暴言に訴えようとしなかった。性格が変わった私を見てやつと両親は私と向き合ってくれるようになった。ただ、男としての優しさ　あの肌の感触とか、安っぽい言葉　には拒絶反応を起こすようになった。学校でふと優しくしてもらっただけで、私はトイレに駆け込んで吐いた。君は外見上女性だし、思考も女性寄りだったから平気だった。再会してからの真枝君は気を遣ってぶつきらばうに接してくれたし……勘違いしないでくれ、今はもうあんな思いはごめんだ。昔の自分とは違うんだから。でも、君が男として肌に触れてから息苦しくなって、ついに耐えられなくなった。発狂するしかなかった。拒絶するしかなかった。もう、私はダメなんだ。君が男として優しく接してくる度、私はトイレに行って食べたばかりものを吐き出す。本当はこんなこと言いたくはなかった。だって本当はまだ　。でも、身体がこういう反応を示す以上、君は私にとって足かせにしかないんだ。君は私のために鬼になれるか？鬼になって、それでも私を愛せるのか？……君がどうするかはまかせる、けど忘れないで。君が優しく接する度、私は吐き続けなきゃいけないんだってことを」

31th・love：傘一つ（告白：Outro）

眩暈をこらえる。怒りと後悔が静かにボクを襲う。ボクはそれをこらえて、言葉を返した。

「いつまでも、そうやっていくつもりなんですか？ 清華さんは辛い辛いと言って逃げているだけだ。それじゃ、いけないんですよ」

「じゃあどうしろっていうんだ！ このまま私はお前の見えないところで吐き続けなければいけないのか？」

彼女はボクを睨み付けて、慟哭する。そうじゃない、そうじゃないよ清華さん。ボクがその苦しみから解放してあげるって言ってるんだ。

「ボクは絶対にあなたを傷付けないし、他の人だってあなたに危害を加えることはないんです」

「ふざけるな、誰がそんな理由もない詭弁を信じるかつ」

「……純平にはボクから話をつけます。もし清華さんを傷付けるような人がいてもボクが守りますから」

子供のように頭を振り始める清華さん。嘘だ、とだっ子のように言葉を繰り返す、泣きじゃくりながら。

「口だけならいくらでも言える」

「そうですね、だからボク自身で証明してみせます」

ボクは彼女に即答してみせた。ボクの中に、迷いなんてものは存在しない。清華さんは百面相のように表情を変えていく。自嘲じみた微笑みで、口元を歪ませた。

「だったらやってみろ」

そうですね、と言いながらボクは彼女に右手を差し出した。ボクは、その手で彼女の涙を拭いた。ボクの一挙一動に彼女は身体を震わせ、足は静かに後ずさりする。それでも、慎重に彼女に近づき、静かに彼女の涙を拭ってやった。ボクは泣きそうだった。でも、ここで泣いてはいけない。辛いのはボクじゃない。優しさを信じられ

なくなつた彼女なんだ。

はたして、彼女は怯えこそは示したものの、それ以上の拒絶を見せることはなかった。我慢しているのかもしれない。でも、そうだとすると、そう考えてくれただけで大きな変化だと思う。

「吐きそうですか」

「……そこまでじゃ、ない」

人にとって、一番の恐怖は『わからないこと』だ。想像の悪魔は、時に現実のそれよりも凶暴な振る舞いをする。予想は実際をはるかに超えて恐怖するものの心を蝕む。だったら、その恐怖はまやかしののだと、直接示してやればいい。そのやり方は色々あるだろう。でも、少なくとも言葉だけでは足りない。態度だけでも伝わらない。清華さんはボクを知っている。女装していたってやめたって、その態度は変わらないことを教えてあげればいい。そこから徐々に、心を広げてあげればいいんだ。

「ボクは、ボクです。清華さんと出会ってから、今日の今まで、ずっと清華さんが好きなままです。たくさんあなたのことを知って、なおあなたをもっと知りたくて仕方ないんです。辛かったらボクに伝えてください。全部受け止めてあげます。そしてそれは恐怖じゃないんだ、ちゃんと理由があるんだよ、と教えてあげます。ボクは、あなた 菜月清華さん を、愛しています」

雨が、降り出した。今日は晴れだと言っていたのに。暖かい雨の匂いが、鼻につく。それでも、ボクたちは濡れ続けた。雨に涙を紛らすことはできなかった。涙は出なかった。清華さんはどうすればいい、と大声を上げて泣きはらした。

……風邪をひくと思って、ボクは彼女の手を取ってお台場まで戻ることにした。小さく震える手は雨に冷たく、濡れていた。彼女を壊してしまわないようになるべく優しい力で掴み、導いた。雨をよけられる場所に来た二人は腰を落着けた。壁に背中を預け、力を抜いた。なんで、こんなときでもボクの心は穏やかなんだろう。ボクの心は実は知らないうちに麻痺していたんじゃないだろうか。力の

ない笑みが浮かんでくる。ボクは思い出したように彼女の手を離した。

「今のボクを、ちゃんと見てください。清華さんの気持ちがまだ変わらないのなら」

ボクが彼女に視線を向けると、彼女はボクに視線を合わせようとした。何度か試みたのち、彼女は諦めてうなだれた。ボクは気にせず、また前を向いた。

「……ろくに視線も合わせられない。気持ちは変わらないのに。ちゃんと君……り、律を、みたいのにつ」

泣き叫ぶ声が階段を反響する。誰か来るかと心配はしなかった。ボクは黙って彼女が泣きやむまで待ち続けた。帰ろう、と清華さんを促すと彼女は頷いて、ボクの後ろを付いてきた。きっと直視しなくてすむと思ったんだろう。ちゃんと見てほしいって、そういうことじゃないんだけどな、と苦笑をしながら、ボクは階段を下りていった。

彼女は一旦自分の教室へ戻った。ジャージに着替えてくると言われ、制服がびしょ濡れだったことを思い出した。のくも彼女にならって着替えることにした。口約束もしなかったけど、清華さんは玄関で待つてくれていた。

「か、勘違いするな。ちゃんと律が来てくれるか心配で仕方なかっただけ」

ボクは頷きだけを返して下駄箱へと向かった。彼女も納得いかな顔ながらも靴を履き替えに行った。玄関を出て、ボクは傘を持ってきていないことを後悔した。清華さんが大きめで黒い傘をさす。

「入っても、いいですか？」

「……勝手にしろ」

彼女はいつかの、けれど投げやりではない言葉をボクにくれた。もちろん、辛いようだったら離れるつもりだった。彼女はそっぽを向いていたけど、拒絶することはなかった。言葉もなく、二人は歩いた。清華さんが途中で店に寄るといので、そこまでついていき、

そこで傘を買うことにした。安いビニール傘を買って、ボクたちは店で別れることにした。別れ際、彼女が言った。

「わ、私も、律が好きなんだ、今は何もかもが怖くて、本当はすべてから逃げ出したいんだ、でも律がいるなら……」

そこで言葉を切って、彼女は首を振った。

「また、明日」

ビニール傘が透過して低い空を見せている。ボクは彼女が去ってからそれをぼんやりと眺めていた。

家に帰ると、ボクを一目見たかあさまがボクをいきなり抱きしめてきた。今までしてくれた抱擁の中で一番強かった。ボクはそれに身をまかせる。自然と、涙がこぼれて止まらなくなった。どうしてなのか、あやふやで説明がつかない。泣いている理由はなんとなくわかる。でも、本当は、ボクに泣いていい資格なんてないはずなんだ。

「りっちゃんはずいよ、すごくがんばった顔してる。だから、辛いことがあったなら私にちゃんと行ってね。私は全部受け止めてあげるんだから」

かあさまは、ボクと同じことを言う。やっぱりボクと清華さんは似たもの同士なのかな？ だから惹かれあつた部分もあるかもしれない。こういうとき、ボクはどうすればいいんだろう。うまくできるかわからなかったけど、彼女に身を委ねることにした。ほら、味方がいるってことはとても素敵なことなんだよ。だから、ゆっくりでいいから、いつか、ボクの隣をまた歩いてくれますように。

32th・love：青い鳥はどこに

かあさまが新しい洋服を買ってくる度、ボクはそれを着るのが楽しみで仕方なかった。フリルのついたワンピース、細身のジーンズ、七分丈のロングシャツ。それらに袖を通すことを考えただけで胸がわくわくして、またそれらを着たときの喜びは両親に愛されることの次に嬉しいことだった。コーディネートはもちろんかあさまだ。鏡の前でかわいらしくなっていくお姫様。まだ幼かったボクは自分が女の子であることを疑わなかったし、それを望んだ。かあさまは満足したように鏡越しに微笑んだ。パパにこの姿を見せる。パパはどこから取り出したのかカメラを用意してボクにポーズをするように言った。フラッシュに目をつむってしまつて、もう一回。今度はちゃんと撮れたみたいだ。かわいい、と呼ばれることが何より嬉しかった。愛されていると知ることができたから。認められることが、ボクの世界の土台だったから。

幼稚園のころのアルバムを眺める。そのころから女物の服を着ていた。ボクは最初からそのつもりで生きてきた。幸い、そのころはまだそれを咎める人もいなかった。

ボクは汚れてもいいような服に着替えさせてもらつて、外へ遊びに出かけた。公園に行く友達が待つていた。今日は何の遊びをするか相談して、じゃんけんをする。女の子の友達が多くて、男の子とも遊ぶようになったのは小学校に入学してからだった。今日はいくれば。ボクはじゃんけんに勝った。一目散に駆けだして、鬼に見つかからないような場所を探す。いつ見つかってしまうかははらするのと同時に、このまま見つからなかったらどうしようと不安になったりもした。結局、最初のほうに見破られてしまっただけ、それでなぜか安心できた。昔から心配性だったのかもしれない。見つけた瞬間困り顔をしながらも、心の中では胸を撫で下ろしていた。

服を汚して家に戻る。服を脱いで、今日着飾った服を着直した。手洗いうがいはいしたの、とかあさまに言われてもちろんといわんばかりに頷いた。頭をくしゃ、となでる彼女の手は冷たくて心地よかった。そんな満たされかたをしてボクは育っていった。

やがて小学校に上がり、見知らぬ顔が増えていった。低学年のころというのはあんまり男女の意識がない。男の子も女の子も混じって同じ遊びをした。その中で知り合ったのが真枝純平だった。クラスのカキ大将で、みんなをまとめることはうまかったけど、同時に先生を困らせる厄介者でもあった。けど、その背中ではボクから見ればとてもかっこよくて憧れだった。彼のようになににことにも物怖じせずに立ち向かっていければいいのと思った。

そんな彼と知り合うようになったきっかけは、実は覚えていない。何かきっかけがあったのかもしれないし、自然にお互い仲良くなったのかもしれない。そこはあんまり思い出せず、また気にする必要もボクはないと思っている。

ボクは彼の背中についていくようになっていた。彼は邪魔だともいていいとも言わなかった。そのかわり、この町のいろんなことを教えてくれた。ボクは記憶にこの街を刻んでいく。視野が広くなつてよかつたし、それと同時にこの街が不意に見せる様々な景色を見ることができてボクは幸せだった。

学年が上がっていくにつれて、自分は何者なんだろうという思いが膨らんでいった。女の子と男の子の身体の違を特別授業で教わったのがきっかけだった。ボクの身体は、男の子のそれだった。体育も男女別になつて、自分は男子に振り分けられた。納得がいかなかった。ボクは体力もなかったし、何より女の子だと疑わなかったからだ。でもこの感情をどう伝えればいいのかわからなかった。だから黙って先生の言うことを聞いていた。けど、そのうちに違和感はどうどん膨らんでいく。ボクはそれを抱え込んだまま学年を上がっていった。

ボクの味方がどんどん減っていくような気がした。そのかわりボ

クのことをおかしい、という人たちが増えていった。その言葉はボクの気持ちを代弁するものではなかった。むしろボクを排除しようとする意思だった。ひそひそ話だった言葉が、徐々にボクへと向けられていく。ボクはその言葉に耐えられるほどの心の強さは持っていなかった。

それでも、ボクは女の子として生きようとした。両親に悲しい顔をしてほしくなかった。ボクがこの格好をすることをやめたい、といったらきっと、その理由を知ろうとする。そのことを話したらどうなるだろう。きっと今以上にひどいことになるんじゃないだろうか。そう思うとそれがすごく怖くて、どちらにも継ることができなかった。ボクは大事な親友のこと忘れて、やがて図書館や保健室にこもるようになっていた。

特に誰もいない授業中の図書館はお気に入りの場所だった。司書の人が無言で解放してくれた。柔らかな笑顔の似合う初老の女性で、彼女と話をすることも多かった。彼女は決してボクがこういうことをしている理由を訊いたりしなかった。だからなお、安心してそこにいることができた。

本はよき友達となってくれた。ボクにたくさんのことを教えてくれた。同年代の人たちが知らないことに対してとても雄弁でわかりやすく語ってくれた。かつ勝手に結末をしゃべることもなく寡黙でいてくれる。インクの匂い、本棚の木の匂い。それに優しく包み込まれるとき、ボクはとても幸せだった。

授業についていけなくなることはなかった。教師はプリントを渡してくれて、それに追いついていけば特に何も言わなかった。気付けばボクは特別クラスに編入されていて、どこにいてもいいようになった。……どうでもよかったのかもしれない。そのままのクラスにいて、問題が大きくなるよりはマシだと思ったのかもしれない。今思えば、腐っている体勢だったけど、今更もう、笑い話にしかない。

ボクは学校が始まるまで適当に（例えば、まだ寂れていなかった商店街とかで）時間を作って、本鈴が鳴ったのを見計らって学校へ入っていった。少なくともこれで生徒と鉢合わせることはない。放課後、夕暮れが終わるようになったら保健室のベッドから起き上がった。保健室の先生としゃべることはなかったけど、どちらかというと否定的な態度を取っていたみたいだった。ただ、ボクはもいたクラスより高い点数をとっていたから教師に文句を言われることはなかった。要は、目の上のたんこぶだった。

この生活がいつまでも続けばいいと思っていた。やっと歯車がか

み合っただ。誰も傷付かなくて、どこにも問題ないじゃないか。今更、元の授業に戻るわけがないんだから。でも、終わりは静かに近づいていた。ある日、図書館に向かっていると司書室に案内された。ストーブで暖められた部屋は心地よくて、うとうとしてしまっただった。司書の先生は珍しく困った顔でボクを見つめていた。なんだろう、とボクはその理由を尋ねる。彼女は言葉苦しうにボクに告げた。

もう図書館は使わせてあげられないと、先生は首を振った。逃げ場所が一つ、なくなった。ボクがそうしていたことを、苦情として誰かが連絡したらしかった。ボクのことなんて忘れ去られていると思っていたのに、ひどい仕打ちだった。

保健室に向かう。ここなら、まだ大丈夫だと思ったから。けど、保健室の先生はボクに冷たい言葉を告げた。銀縁の眼鏡がボクを拒絶する。言っただことは司書室の先生と同じだった。ボクは特別クラスにしかいられなくなった。いわゆる『問題のある児童』をまとめたクラスだった。ボクには彼らのどこに問題があるのかわからなかった。授業らしい授業もなく、ボクは遊んだり突然叫び出す彼らを横目にプリントを解き続けていた。

隅に追いやられたようなこの教室で、ボクは窮屈だった。ボクが何者なのかわからなくなる過程で、自分というものが希薄になっていくような気がした。ボクはぼんやりと辺りを見回した。彼らは楽しそうには見えなかった。ボクと同じ、どうすればいいのかわからずにもがいているようだった。

一人で何かを考えることが多くなった。知識だけは多かったから、空想をそれが手伝ってくれた。ボクは何者なのかを考えることはやめた。とりあえず置いておくことにした。もし空を飛べたらとか大ざっぱで子供じみたことから、この世界の他にはどんな形の世界があるのか、それをボクたちが、影でも見ることができるとか今のボクには考えられないことまで、その空想は幅広かった。それを

考えるだけで楽しかった。

その日も、ぼんやりと空想にふけていた。その学年で学習する内容はだいたい勉強し終わっていて、その知識を忘れることもなかった。だから今日も一日中ぼんやりと過ごすつもりだった。教卓の横に椅子を置いて座る教師は本を読んでいる。騒いでいる児童とときおりたしなめる以外はずっと本を読んでいた。

誰からも傷付けられることのないこの場所はひどく心地がよかった。心地がよすぎて、感覚が鈍磨していく。そのことにすら気付かずに緩い時間の中を泳いでいく。そのうち深海魚のように目が見えなくなるんじゃないかと思った。ただ生きるために生きる、そこに目的なんてない。一日をなんとかやり過ごして、それを重ねて……それからはどうしようか、どうすればいいかなんてことも考えていなかった。

終業のチャイムが鳴って、教室を出る。ボクはそこからすぐの裏口から、逃げるように学校を出て行った。後ろから誰もついてこないことを確認して、やっと足を緩める。こんな生活がいつまで続くんだろう。このごろはあまり眠れなくなっていた。何かに監視されているような気がして、目がさえてしまっていた。目の下のくまをこすりながらボクは下校路を辿っていた。一人だと思っていた。このまま、やり過ごせると思っていた。

けれど、立ち止まった交差点、赤色の信号機の下、人がいた。彼はボクを睨み付ける。大柄な彼はそのときのボクにとっては恐怖の象徴だと思った。だから怖くなって逃げ出した。驚いたように目を見開いた彼の表情を横目にしたあとは脇目もふらずにただ前に走っていった。けれど、ろくに運動をしていないボクが逃げ切れるわけがなかった。結局追いつかれて、腕を捕まれた。まるで悪夢の再現だ、と思った。怖さが現実のものになってボクは叫ぶ。どうにかなくてしまいそうだった。ボクという片鱗がぼろぼろとはがれて、中身のない自分をさらけ出されるような気分だった。

泣き叫ぶのが辛くなって、ボクはそれをやめた。彼はボクを強く

抱きしめている。恐怖が徐々に安心感に変わっていく。こうやって誰かの胸に落ち着くのは久しぶりのことだった。ボクは静かに顔を上げた。見覚えがある顔なのに、誰だか思い出せない。世界から心を閉ざすようになって、ボクは人の名前や顔を忘れるようになっていた。

彼が自己紹介をする。マエダジュンペイ……やっぱり、思い出せない。ボクが首をかしげると、ボクを抱きしめる力が弱くなった。マエダジュンペイ、と彼の名を言葉でなぞってみる。自分の声がかすれてしまっていることに初めて気付いた。両親の前では気丈に振る舞っていたのに。

34th・love：季節の終わり

ボクはしばらく学校を休むことになった。と、同時にボクの問題が明らかになって、学校はちよつとした騒ぎになっていた。学校側の謝罪と配慮でボクの家自体に被害が及ぶことはなかった。ボクは療養のためカウンセラーのいる施設に送られることになった。素行の悪かったものから両親に問題があるものまで、小学生から高校生までがそこで暮らしていた。特別クラスとは違って、生活に若干の緊張感がある。カウンセラーはみな優しくも優しい人たちで、ボクはそこで人間関係を一から学んでいった。

ボクがそこで暮らしている間、両親は裁判を起こしていた。それに彼らは勝利して、小学校は教師数名の処分と学校システムの改善を求められることになった。でも、もうボクには関係のないことだった。ボクは中学生になった、施設で。

中学二年になって、ボクの精神状態がだいぶ落ち着いたとして施設を出ることになった。三年間の療養だった。しばらくのつもりが、だいぶ長くなってしまった。純平のこともちゃんと思い出した。彼は一ヶ月に一度のペースでここまで足を運んでくれていた。

最初の登校日、迷うことはなかった。それに、純平もいてくれた。初めて袖を通す制服はスカートにブレザー。似合っている、とみんなが言ってくれた。嬉しかった、受け入れてもらえたことが。今、一人じゃないんだということが。

学校側にはだいたいの連絡がいつていた。なので対応もだいぶスムーズだった。男女別の授業は女子のほうを受けさせてもらった。いいのかなと、最初は不安だったけど、意外にも女生徒たちはボクを拒否することはなかった、それよりも友人になってくれることのほうが多かったので驚いた。

男子のほう扱いに困っていたようだ。特に気にせず、女子としてみてくれればよかったのに。その様子は少しどこがおかしくて、楽しかったけれど。勉強の面での心配はなかった。元々できた身だし、コツ次第で勉強というのはうまくいくものなのだ。そのこつに気付くまでが難しいと言われるればそれまでなんだけど。

中学校生活はほんの一時といった感じだった。すぐに受験シーズンが訪れて、ボクは純平と同じ高校を受験することにした。たいした理由はない、といったら嘘になる。ほんとは彼の背中を守ってほしかったからだ。……一応言っておくけど、彼を人間として頼ってただけで恋愛感情はなかったんだからね。

そんなこんなで受験はうまくいって、晴れて彼と同じ学校に通うようになった。ここでもボクは女子の扱いを受けることになった。ここまではつきりした態度を取られると、両親があらかじめ（いろんな方法で）根回しをしているんじゃないかと疑えてくる。尋ねたところでそんなことはないと言顔の返事が戻ってくるだけだったけど、逆におっかない。

どたばたした四月を駆け抜けて、ピンク一色だった坂道が爽やかな緑に変わったころ、美緒先輩と出会った。世界地図を片付けるように教師に頼まれ、社会科資料室に向かったときのことだった。なんともしに目的地に向かっていると目の前に足の生えた段ボールが歩いてきた。明らかにおかしいと思って目を凝らす。自分の背丈より高い荷物を持ち運ぶってどんな腕力だと思いつつちに向かった。

自分より幾分か背丈のちっちゃい女生徒が息を切らしながら荷物を持っていた。ボクは彼女に声をかける。返事がなかったので承諾だと思いこんで一番上の荷物を取り上げた。段ボールはほぼ空のようで、あまり重くなかった。世界地図は黒板用で大きさもあつたけど、脇に挟めば問題なさそうだった。前が見えない彼女のほうがつうにも危ない。視界が開けた彼女はおお、と言いながら立ち止まっ

た。

辺りをきよろきよろと見回して、ボクの姿を見つける。危なっかに見えたので手伝う、と彼女に言うところと暖かな微笑みで首をかしげた。

目的地は彼女と一緒にだった。何年生か訊かれ、簡単に自己紹介をした。なら私が先輩ですね、物腰の柔らかな敬語で彼女は答えた。そう言われて、改めて彼女を見る。……どう見ても小学生だった。ボクも背丈に関してはあまり人のことは言えないんだけど、それにしては幼すぎる。思わず何回か聞き返してしまった。そのうち彼女はふくれてしまった。何かあったらよろしくと言われ、ボクは頭を下げた。

いつの間にか彼女はボディタッチをするようになってその度に教室がどよめいた。純平はなぜか顔を真っ赤にさせてそれを静観する。

何も知らないボクはきつと幸せだった。けど、ボクにはそれは許されない。傷付けた人と傷付けられた人がいたなら、ボクは二人の手を取らなければいけない。日常を取り戻すために。

……ボクが清華さんと出会う、前の話。

35th・love：静かな畏れ

季節を思い出したかのように雨は降り始めた。あのあと、雨は降り止むことなくコンクリートを濁った色に湿らせていた。ボクは不機嫌そうな空を眺めて、授業が終わるのを待っていた。チャイムが鳴って、ボクは清華さんのクラスに顔を出した。彼女に声をかけると、輝いた瞳でボクを見つめた。……その一瞬前まで、ひどく怯えた表情をしていたのに。

怖くて外を歩けない、という内容のメールをもらったのは今日の朝のことだった。学校と逆方向の彼女の家まで、ボクは迎えに行くことになった。早めに家を出て、彼女の家チャイムを鳴らす。ベル越しにボクの声を聞いて安心したのか、彼女は玄関から出てきた。身だしなみはしてきたようだったけど、目の下のくまがひどい。おはようと声をかけると、彼女は急に抱きついてきた。

「ずっと一人だったんだ」

怖かった、とひたすら連呼する。ボクは、なんで彼女がこう変わってしまったのか理解できなかった。壊れてしまった、と感じた。それとも　壊してしまったのか？家で何かあったのかもしれないし、まだ予想でしか語れない状況だった。でも、昨日の彼女とは違う。それだけははっきりとしていた。

彼女と手を繋いで、学校まで向かった。彼女は終始おどおどとしていて、顔を上げてはまたうつむき歩く。ボクは頭をなでて、誰も危害を加えようとする人はいないんだと言い聞かせた。けど、耐えられなくなるのかすぐにまたうつむいた。ボクはそれ以上の無理強いをせず、彼女の手を引いていた。

坂の前まできて、美緒先輩に会った。彼女はいつもの子供のような笑顔を凍りつかせた。彼女と目があっても清華さんは笑いかけてもせず、ただぼんやりとした目で彼女を見つめるだけだった。泣きそうになまなざしをボクへと向ける。

「りっちゃんくん……何かあったですか？」

ボクにも何があったのかわからない。だからボクはただ首を振った。

坂道、ボクたちの空気は呼吸がしづらくなるほど重く、三人とも無言のまま校舎へと入っていった。靴を履き替えるのにも彼女はついてきて、決して離れようとはしなかった。二度手間になるとはわかってはいたけど、ボクは内履きを彼女の下駄箱まで持っていき、そこで履き替えた。それから外履きを自分の下駄箱へと片付けた。

さすがに教室は正反対なので、別れようとした。けれど手を離そうとはしなかった。ボクは美緒先輩に目配せをしたけど彼女は苦い顔をするばかりで、結局教室までついていくことになった。別れの挨拶をする。行ってもいいけど、また戻ってきてくれと言われた。清華さんはまるで親とはぐれた子供のように、辺りを不安そうに見回した。ボクは目を伏せ、彼女に背中を向けた。

どうしてこんなことになっているのか、ボクは原因を探ろうとした。昨日までの彼女とはまるで違う。まるで……昔の彼女に戻ってしまったかのような感覚だった。話でしか知らない、内向的でふさぎ込むような彼女に。

昼休み、ボクは清華さんの教室で彼女のことについて考えていた。隣の人の席を貸してもらい、何かあったら対応できるように努めた。純平と会ったのかもしれないと思い訊いてみたけど、それはないと否定された。それに彼女は言っていた、ずっと一人だった。それは比喻であり、事実でもあるようだった。それなら一人でいたときに、何があったのだろうか。何かを思い出したのか……でも、何を？ 彼女が不意にボクの肩をたたき、ボクに呼びかけた。

「なあ、この人たちは何を考えているんだろう」

周りを見回し、首をかしげる。そんなの、誰にもわかりようがないことだ。だから、普通はそんなことを考えないでいる。考えないように、している。

「私は、それを考えずにいられないんだ。これっておかしいか？」

ボクは、最初曖昧に答えを濁そうかと考えた。でも、すぐに思い直す。ここで正直に答えなければ、きっと彼女はまた悩んでしまうと思ったからだ。

「うん、おかしいよ。そんなこと、誰もわからないよ。だって、今清華さんが考えていることすら、ボクにはわからないのだから」

そうか、と彼女は頷いた。しばらく考え込むような素振りを見せて、彼女は切り出した。

「あのな、律。私はいつもの私なんだ、それをわかってほしい」

その言葉に安心する。ボクの考えていることが杞憂で終わったからだ。

「ただ、自分でもわからないくらい、人に対して恐怖心を持ってしまっている、今は律の言うこと以外信じられないし信じたくない」
だからって、このままでいるわけにはいられない。ボクがそうであつたように。

「清華さん……ちょっとずつで今はいいから、心を開いていこう。確かにいいやつばかりじゃないけど、少なくともボクの知る中では本当に清華さんを傷付けたい人はいないんだから」

純平にだって、彼女を傷付けなければいけない『理由』があつたはずなんだ。例えばそれが許されないことであつたとしても、その理由がわからなければ解決にならない。ボクは彼女のためにすべてを明らかにする必要があつた。そして、彼女が不条理に巻き込まれたとき、彼女自身がそれに負けない強さを手にする必要も。それだけは、ボクが手に負える相手ではなかった。理由のない暴力だって存在する。ただ純平はそうじゃないと信じていた。だからこそ、彼とは対峙しなければいけない。

努力してみる、と彼女は頷いた。まずは友達と会話してみよう、とボクは背中を押してあげる。たどたどしい口調で、彼女は友達の輪へと入っていく。急に大人しくなつてびっくりしたんだよ、と彼女たちは清華さんのことを心配してくれているようだった。彼女が生徒みなに好印象を持たれていたことは前々から知っていた。ボク

は彼女に目配せをして、教室を出て行った。

36th・love：不器用な心

ボクの家にはほど近い公園。大人数で遊ぶには適していないそこには少ない遊具と木のベンチが置かれていた。夕方より暗く、街灯がちらほらとつき始める。ボクは約束の時間よりも早く来て、彼の到着を待っていた。正直、どう切り出そうか悩んでいた。聞き出したところでどうしようかとも思った。どちらにせよ、ボクは怒らなくてはいけない。誰のためなのかはうまく答えられる自信がなかったけど。

約束の時間に五分遅れて彼はやってきた。ジャージ姿ということばさっきまで部活をしていたということだろう。案の定、部活で急に呼び出しがかかって遅れたことを伝えてきた。ボクは彼をベンチに案内した。

「それで、話って何なんだ」

腕を組んで腰掛ける彼の表情は引き締まっていて、いつもの馬鹿話ではないことを悟ったようだった。うん、と小さく頷き、ボクは質問を投げかけた。

「正直に答えて。……純平は、清華さんと付き合っていたんだよね」
一瞬、瞳が曇ったようだった。深い溜め息に混じらすように、ゆっくり言葉を吐いた。

「ああ、そうだ」

「どういうきっかけとか、何があったとかは清華さんから聞いた」
愚痴をこぼすわけでも、表情を変えるわけでもなく、純平はぼんやりと遠くを眺めていた。ボクは言葉が続ける。

「なんで、清華さんに暴力を振るったりしたの？」

「なんで、と言葉を繰り返す彼。何度かその言葉を口の中で小さく転がして、また深い溜め息をついた。ボクは彼が説明を始めるまで待ち続けた。

「なんでなのか、俺にもわからない」

ふっと、抑えていた怒りが沸点に達した気がした。無意識に立ち上がり、彼の胸ぐらを掴んでいた。彼はボクから目をそらしてつぶやいた。

「殴りたきゃ、殴れよ」

ボクは腕の力を抜いて、彼を解放した。怒りにまかせて殴ったところで、状況は悪くなるだけだ。彼は首元をさすりながら苦虫を噛み潰したような顔になった。

「俺は、菜月先輩を愛してた。誰にも、負けないくらい。なのに、憎くなる瞬間があったんだ。なんでそうなるのか自分でも理解できない。ただ、その衝動が抑えきれなくなって、手が出してしまった」
どうして、こんな身近に不条理が隠されていたんだ、よりによって、純平がそういうことを言うなんて。ボクは納得がいかなかった。
「何かあったんじゃないの、人に何かをぶつけなければ耐えきれないほどの辛いことが」

ベンチに座る彼はとても小さく見えた。ただ見下ろしているだけなのに。ボクは彼の言葉を待った。理由がないなんて許されない、だってそこには救いがないじゃないか……！

重い空気が流れている。雨は午後の始めにやんだけど、また泣き出しそうにぐずついていた。ボクは気付かないうちに拳を握っていたことに気付いて力を抜いた。

「俺は、身勝手な人間だったんだ」

それは今でも変わらないな、と自嘲する純平は初めてボクにまなざしを向けてくれた。

「陸上部に限らねえんだが、運動部の一年は『ボウズ』と呼ばれてな、ほぼこき使われる。まあ先輩のはたいしたことじゃない。なぜか俺はタメのやつにも同じような扱いをされた」

思い出すように、何があったのか並べていく。

「部室の掃除やら片付けやらから始まって、気付けばパシリの仲間入り。なぜか俺の味方をするやつは一人もいなかった。そのうち、俺の態度が気に入くわないと言い出すやつがいた。理由がわからない

から聞き返した、そいつら、こう言いやがったよ…… お前に幸せは似合わないって」

幸せ、とはきつと清華さんと付き合い始めたことだろう。それを快く思わない人間がいた。それは、どう見たって私怨だ。

「そいつら、俺のことをいきなりボコリ始めてさ、その日は日が暮れるまで殴られ続けた。俺は手を出さなかった。そしたらこいつらと同じになっちまう、最悪、俺が被疑者になるかもわからなかったからな」

最初のうちは黙って殴られていた。そのことを誰にも言わず、一人で抱え込んでいた。でも、限界は誰にも訪れる。

「なんで、こいつといることで苦しい思いをしなくちゃいけないんだろうなと思うようになっていったんだ。だんだん、彼女が憎らしくなっていた。おかしいだろ、菜月先輩は何も悪くないのに。でも、当時の俺は、彼女と別れることで痛みから解放されると思ったんだよ」

そこからは清華さんから聞いたとおりだった。嫌われるような行為をわざとして、それでも彼女は動かなかったから、暴力に走った。でも、彼女は離れるどころかより近づくようになってきた。俺のためなら何でもやるから、私から離れないでくれって、泣いてせがんだ。俺はだんだんいたたまれなくなつて、謝るようになっていた。そのうち、彼は煙草を吸うようになった。苦くも心を安らげるにはちょうどよかった。彼女を傷付ける道具にもなった。彼女がどれだけ傷付けば、彼女は目を覚ましてくれるのか。いつの日か部員に暴行されることよりもそっちのほうが気に掛かり始めていた。

「そして、俺は暴行事件を起こした。彼女の首を絞めたんだ。あまりに彼女が安らかな顔をするから、俺のほうが怖くなった。彼女の強い希望で、立件されることはなかった。ただ、停学をくらった。名目上は喫煙だったけな。まあ、ここもあいつから聞いてるんだろ？」

ボクは一つ、首肯した。

「もうどうでもよくなっちまって、部員を数名ずつ呼び出して今までの鬱憤を晴らしてやったよ。今思えば、俺はぼろぼろだった。何もいらなかったと思った。いつそ死んでしまおうかとも思った」

でも、律がいたからな、と笑う。その微笑みはとても不格好でどこか引きつっていた。でも彼らしいな、と思った。

「それは思いとどめて、でも、これからどうしようか悩んでいた。今更部活にも戻れないと思っていたし、停学中は家でぼんやりしているか外をぶらつき回っていた、そんな矢先、美緒ちゃん いずみ 和泉美緒に会ったんだ」

もう二人は彼女と知り合っていた。ただボクは清華さんと美緒先輩が友人（といっても当時は彼女の片恋慕だったつけ）だということを知らなかった。

「彼女は出会い頭、俺に平手打ちをした。誰に殴られるより、彼女のそれが一番痛かった。ぼろぼろに涙を流し、俺に怒りをぶつけた。俺は虚しくて、彼女の言葉を飲み込むしかなかった。でも、虚しかっただけの胸が、どこか満たされていくような気がして、溢れて、涙になった」

ボクは、彼に何ができるだろうと思った。もしかしたらボクにできることなんてないのかもしれない。なんとなく確信する。もう、純平が一人になる必要はないことを。美緒先輩がもっと近くで彼を見守ってあげてほしいということ。

「俺は、当分一人で生きることを決めた。これは戒めだからな」

ボクは、それは違うよ、と言ってあげた。もう、一人じゃなくていいんだよ。彼と別れたあと、ボクも家に戻った。明日、最後にもう一つやらなければいけないことができた。ボクが唯一、できると。

37th・love：消えていくセカイで

昼休み、ボクは美緒先輩のいる教室へと顔を出した。もちろん彼女と話し合う約束をするためだ。扉の近くにいた生徒に声をかけて、彼女を呼ぶように頼む。けれど、生徒から返ってきたのは芳しくない返事だった。

「うちのクラスに、そんな子いないわよ」

最初は冗談で言っているのかと思った。あるいはわざと意地悪しているのかもしれないと思って、もう一度尋ねた。けれど彼女の答えは変わらなかった。違うクラスも回って、同じように確認した。けれど返ってくる答えは同じで、ボクは肩を落とした。でも、そんなおかしなことがあったらたまったもんじゃない。ボクは清華さんに美緒のことを尋ねた。

「いずみ……みお？」

血の気が引き、鳥肌が立った。なんで、覚えていないんだ。ボクはふと、昨日のことを思い出す。朝、彼女を清華さんが認識しなかったのは清華さんが心を閉ざしていたわけではなく、その時点で『忘れ去られよう』としていたからじゃないのか？……そんなことがありえるのか、まさか、と思った。

とりあえず、自分の教室に戻る。純平はいつも通り、机に突っ伏していた。もう昼食はとったようだった。彼の頑丈そうな肩を揺らし、無理矢理起こす。

「ねえ、起きてっ、大変なんだよっ、美緒先輩が、美緒先輩が」

不機嫌そうな顔を彼は見せる。そして、首をかしげた。

「美緒先輩って……誰だよ」

おかしい。いつの間にか、何かが狂い始めている。しかも、急すぎる。そんな馬鹿な話があるもんか、しかも、昨日彼女のことを純平は話したじゃないか。それなのに、覚えてないだなんて。もしかして、彼女の身に何かあったんだろうか。ボクは携帯電話を取り出

した。最初からそうすればよかったのに、ボクは失念していた。彼女の名前を探す。

なんでだよ。

彼女の名前はアドレス帳になかった。それどころか、通話記録も彼女と交わしたはずのメールまでも消えていた。彼女を必要としているボクがそんなことをするなんて考えられない。頭がこんがらがって、叫びたくなる。ボクはなるべく冷静になるように努めた。常識に照らし合わせれば、よほどのことがなければ急にいなくなったりできないんだ。ましてや、ボク以外の人の記憶を消すなんてこと、普通はできない。

彼女はどのタイミングで消えたんだ。そして、この世界で何が起こっているんだ。ボクはこのまま学校にすることができなくて、純平に早退すると告げた。

「どうしたんだ？」

「理由はあとで話す。先生には具合が悪くなったとか言っておいて、まあいいけどよ、と間延びした返事のあと、彼が言った。

「無理はすんなよ」

ボクは手を振って、それに答えた。

ボクには行くあてがあつた、いや違う。ボクが行くべき場所は決まっていた。だからその足に迷いはなかった。帰路を辿る途中の道、ボクはそこがいつもと違うことを見破った。誰の仕業なのか、それとも彼女がそれを望んだのかはまだわからない。でも、それはまだ開かれていない扉があるからだ。それを開かない限り、世界はやがてループする。その前に、救わなければいけない。

商店街に入り、ボクは辺りを見回した。なくなってしまうはずの記憶をなんとかつなぎ合わせようとする。微かに見覚えのある裏路地を見つけて、ボクは細い道へと入ろうとした。その前に立ちはだかる一匹の黒猫。かつて、ボクにしおりの在処を教えてくれて、また平行世界へと案内してくれた。

ボクたちは対峙する。どちらも引こうとする意思はない。ボクは、

猫に頭を下げた。戻るためではなく、進むために。

「なぜ、忘れておらんのじゃ」

顔を上げると、細い瞳がボクを責める。人間は記憶を完全に消去できるわけじゃない。表に上がらないようにゴミ箱へと入れるだけ。そこから記憶を取り出したのは馬鹿力というか、半ば強引で自分でも具体的な説明ができないんだけど。

「ほう……ちよっと侮っておったな。で、用件は何じゃ」

「美緒先輩を取り戻す」

ボクは即答した。ボクは自信があつた。彼女は『向こう側』にいる。なぜその世界を選択したのか、ボクは聞き出さなければいけなかった。そして、強引だったとしても元の世界に連れて行く。

「まあ、よかるう。じゃが、わしにできんかったことをおまいさんができるのかね？」

できるできないじゃなくて、やるしかない。そう答えると、人間らしい屁理屈じゃ、とぶつきらばうに答えてボクに背を向けた。ボクはその背中についていく。以前通ったことのある道をなぞっていく。やがて方向感覚はなくなったけど、怖いものはなかった。

程なくして、雑草の生え広がった平野へと出る。風が心地よく吹く。向こうとは違い、雲一つない青空だった。ボクは彼女の姿を探し始めた。あまり迷うこともなく、彼女は見つかった。白い麻でできたワンピースのような織物を着た美緒先輩は、雑草のベッドに身体を預けていた。彼女の髪が風にそよいで、小さな身体は呼吸によつて揺れていた。ダメだよ、こんなところで寝ていちゃ……。猫は遠くで待機しているようだった。ボクは彼女の頬をなでた。

「ねえ、起きて。ボクに、お話を聞かせて」

彼女はゆっくりと目を覚ました。ボクの姿を確認すると、跳ねるようにして起き上がった。けどすぐにボクから目をそらす。

「なんで、ここに来たんですか」

ボクは猫にしたように、即答した。でも、彼女は喜ぶどころかむくれて、ボクから目をそらす。不意にかわいい、と思ってしまう自

分が情けない。

「なんで、戻らないといけないですか、そのための用意もちゃんとしたのに……やっぱり、りっちゃんくんに対しても記憶を消しておくべきでした」

「そこまで大がかりなことをして、なんでこの世界に生きようとしたのさっ」

溜め息を短くつき、美緒先輩は言い放った。

「りっちゃんくんは勘違いしてるです。美緒は元々この世界の住人。美緒という名前は仮のものです、そしてこの身姿も」

ボクの行為の意味が希薄になった。元々こちら側の人をボクのエゴで引っ張ってきてしまってもいいのだろうか。簡単にはいいと思えなかった。ならせめて、と提案した。

「なんでボクたちの世界に現れたのか、それだけは聞かせてよ」

彼女はふくれ面をやめて、ボクに一瞥をくれた。

「それを聞いて、りっちゃんくんはどうするですか」

……どうするんだろう。ボクはその質問に対して適確な解答を見つけることができなかった。でも、聞かなければいけないような気がした。そうしなければ、ここから動けないと思った。この先は始まりなのか、それとも終わりなのかわからなかったとしても。ボクの熱意に押されたのか、彼女は遠い目をしていった。

「長い、話になりますです」

38th・love：一人のセカイ

初めて見た空は、途方もないぐらいに高かった。初めて目に入った世界はただただ広く続く平野だった。私は自分が何であるか把握していなかった。する必要もないと思えた。空腹もなく、時間という概念もない。朝日が昇れば目を覚まし、闇が訪れれば眠りに就いた。それだけで私は満たされていたから、この場所がすべてだと思っていた。

目を覚まししている間、私はぼんやり何もせずに過ごしていた。網膜に映りこむ風景を焼き付ける。毎日同じように見えて、そんなことはありえないんだと気づき始めた。風の向きは刻々と変わっていくし、日の長さなが徐々に変わっていくことにも気付いた。そしてだんだん私の中で新しい感情が芽生え始めていることに気付いた。でもそれをしばらくの間持て余していた。どうすればいいのか、答えをしばらくは探していた。

ある日、雨が降った。私にとって初めての経験だった。私がいたところには隠れる場所もない。私は冷たさに身体を震わせながらそれに耐え続けた。苦しくはない。ただ、熱っぽくなつてぼんやりとして、やがてその瞳を閉じてしまった。まぶたを開くと再びの青空が広がっていた。私の目の前にある草葉は雫に濡れていた。私は舌でそれをなめてみる。味はしなかった。よく考えれば私の身体もずぶ濡れになっていた。全身をぶるぶると震わせ、水気を飛ばす。そのうち乾くだろう、と思つてそれからそのままにした。

今度は濡れたくないな、と思つた。せめてこの身体を雨からしるげる場所がほしい。私は決心した。その場所を探すために。そしてこの場所以外の世界を知るために。私は雑草を払いのけながらその足を踏み出した。太陽が真ん中まで昇つたころ、雑草だらけの平野を抜けた。所々に花が咲き、奥のほうには大きな水たまり。あとになって、それが湖であることを知つた。があつた。私は自然と、

湖のほうへと足を向けていた。そこに着いて、水面に顔を向けた。

自分の顔を見るのはそれが初めてだった。今まで自分の顔も知らないまま過ごしてきた。それで不自由がなかったからだ。とんがった三角の耳。まんまるくさせた瞳の色は金色。頬には長いひげが生えていて、顔全体が身体と同様、真つ白な毛で覆われていた。最初からそうと自覚していればよかった。最初の言い出しで自分が猫であることを宣言すればいいのだから。でも、そのときの私は自分を表現する言葉を持ち合わせていなかった。

名称がないということは、自分の存在を曖昧なものにさせる。名前を与えられて、それは目的を持つ。でも、私がなぜそのときなぜ名称を与えられていなかったのなんとなく納得がいった。私には目的がなかったから。ただ生きているだけ。ここへ来ただけでも大きな進歩なのかもしれないけど、それでも私がここにいるための理由にはならない。どうしたら私は目的を持つことができるんだろう、と思った。

まだ私は誰にも会っていないことに気がついた。私がいるということは、私の他にも同じような状況に置かれたものがいるかもしれない。湖は大きく、その先に何があるかわからなかった。それが正しいことかわからなかったけど、試しに湖の周りを歩いてみた。もしかしたら反対側に着くかもしれない。はたして、私はその先がどうなっているのか知ることになった。

その先には、何もなかった。正確には、閉ざされていた。最初見た時点で気付いた。目の前に、もう一人の私が映っていた。私はそれに向かって爪を立てる。手に入れたのは痛みだけだった。後ろを振り向き、もう一度前を向く。……それで私はそれが何であるのか知った。それは世界を反射させていた。こういう物質なのかはわからない。ただ、その先へ向かうことは絶望的だということははっきりしていた。

私の視界の限界を超えて、それは高くそびえ立っていた。私は壁沿いに進んでみた。再び雑草が増え始め、やがて私の背丈を越す。

方向感覚を見失い、やがて湖に戻った。いつまで壁沿いに進めていたかと思い出せない。気付いたらまたこの場所に来ていた。この世界には果てがある。そういう世界なのか、誰かがそういうふうに取り替えたのかはわからない。私はどうしようもなくなって、道を引き返すことにした。元いた場所に戻ったところには日が暮れていた。私は眠った。

39th・love：望み

……目を覚まし、今日はどうしようかと思ったけど、今度は違う方向に進むことに決めた。まだ雨宿りできる場所を見つけられていない。この世界の仕組みについてはもう諦めることにした。その先がないのならば、今のこの世界の中、新しいものを見つけるしかない。私は一步を踏み出した。

しばらく彷徨っていると森を見つけた。どのくらいの規模なのかはわからない。迷う心配もあつたけど、そのときはそのとき、と腹をくくことにした。食事をとらなくても平気なところ、死ぬことはなさそうだったし。そこは轍もない場所だった。私しかないのなら、それも当然だ。自分がどこに向いているのかもわからないまま、森の中を進んでいく。白い毛は土に汚れて、落ち葉はちくちくと痛い。それでもどこに続くような気がして、彷徨い続けた。

……どれくらい進んだのだろうか。足を止めたくないのに、身体が言うことを聞かなくなり始めていた。それでも、それでも、と意地になって足を進める。でも限界だった。疲れないはずなのに、と苦笑したけど、頬は引きつるだけだった。私はゆっくり、意識の泥に沈んでいった。

……瞳をこじ開ける。しばらくぼんやりとして、ピントを合わせることになった。そこは森でも、雑草の続く平野でもましてや湖でもなかった。頭に静かな感触があつて、それは私の背中をなでていた。悪い心地ではなかった。私は全身であくびをして、そこから降り立った。今までいた場所のほうへ目を向ける。そこには、見たことのないものがいた。私とは身姿がまるで違う。大きな存在だったそれを私は警戒した。なんと呼べばいいかわからなかったし、どう対処すればいいのかもわからなかった。

「心配しないでもいいわ」

……それが私にわかるように伝えたのか、その言葉を私は元か

ら理解できたのかわからなかった。わからない存在に対して、しばらく畏怖していたような気がする。それは自分が人間であることを伝えた。人間とは何か、と私は問うてみる。それは表情を変えずによくわからないわ、といった。その言葉は本心からのような感じがした。私は静かに警戒を解いていく。なんでこの世界にいるのか訊くとそれはしばらく黙り込み、そうね、と言葉を紡いだ。

「あなたに名前をつけてあげようと思ったのよ」

私は驚いて、それを見上げた。それでもそれは表情を崩さない。

それを微笑みと呼ぶと知ったのは少しあとのこと。それより、名前をつけることの意味を思い出す。誰にそれを教わったのかは知らない。最初に与えられた情報の一つだった。

「私が、色々なことを教えてあげる。この世界から、羽ばたくために」

それは自分の名を名乗り、それが女性であることを知った。女性に対する代名詞はそれではなくて彼女。彼女は黒い長袖と同じ色のズボンをはいていた。人は洋服というものを着なければいけないらしい。絶対というわけでも、いつまでも着ているわけにもいかないけど、基本的には裸で生活することはない。彼女と私がいる場所は木で建てられた小屋。ここには最低限のものが揃っていて、ここからでないで暮らすことができた。この世界で食事が意味を持たないのは人間も変わらないようだった。

私はしばらくこの小屋の中で、色々なことを学ぶことになった。いろんな言葉を覚え、自分が何であるかを学んだ。私にとっては彼女から与えられるものがすべてで、受け入れられないものはなかった。私は外の世界のことを考えるようになっていった。そこで待っているのは試練だということも、使命とは絶望的までに苦しいものだということもわからずに、夢だけを描き続けていた。

彼女は、いつものように私に話しかけた。穏やかな微笑みと瞳をたたえて。それは、初めてのお誘いだった。この世界を出て、違う場所へ行かないか。私は冗談だと思って聞き返した。そんなこと、

できるのかと。彼女は頷いた。

「でも一つ、条件があるのよ」

私は、向こうの世界に行くために人間にならなければならないという。彼女も、向こうの世界では猫に変わるらしい。なぜ、猫と人間なのか。その問いにはわからない、と彼女は答えた。そして、一度変身してしまうと二度と元の姿に戻ることができないといった。この世界に戻ることができても、猫になることはできない。今の二人の関係とは真逆になるのだ。私は三日三晩悩んだ。もちろんここではない世界には強く憧れた。だからといって……。

充分に考えた上で、結論をまとめた。私は、この世界を出ることに決めた。保証がないことは心配だったが、なんとかなると思った。人間になることにも憧れた。彼女に伝えると、早速身支度を整え始めた。彼女が用意しているのは私のための服だった。

小屋を出て、森を抜ける。彼女は地理を知っていたのか、迷うことはなかった。私には抜けられない壁の前で彼女は何かをつぶやく。何のきっかけもなく、彼女は頷いた。私は彼女の後ろをついていった、そこには壁なんてなかった。彼女の足取りに迷いはない。どこがその境目だったのかはわからなかった。気付いたら、違う世界に来ていた。そろそろね、と小さく言う彼女。

次の瞬間、一気に視界が高くなった。下のほうから声がして、私はその指示に従った。人気がないところでよかった。私は裸身で、なだらかな胸や白い肌を晒していた。素肌のままでいることは寒いし、それ以上に恥ずかしい。私は恥ずかしいという感情を感覚的に理解した。あわてて鞆を開け、とりあえず上にあるものを引っ張り出してそれを着た。それは私の身長にちょうどよかった。昔の洋服を持ち出してきたのだという。とっておいてよかった、と今となっては黒猫となった彼女が苦笑した。

再び彼女の後ろをついていく。どこの商店街に出た。けど、誰かがいる気配は全くない。彼女と私はそれが来るまで待つことにした。しばし沈黙が続く。あまり穏やかではない空気がここには流れてい

た。程なくして、暗闇より黒いスーツを着た男が現れた。夕暮れにそれは決して溶け合おうとはしなかった。二人とも彼が話を始めるまで待つていった。柔らかな表情を浮かべているように見えて、その逆のような気がした。彼は決して自分の身元を明かさなかった。そして私たちのことについても質問することはなかった。無機質な口調で彼は言った。

「これから別行動をしていただきます」

40th・love：絶望

それは、彼女との別れを意味していた。彼は二人とも別の使命があることを淡々と説明した。もう一人男が現れて、私は彼についていくことになった。一番最初に現れた男は細身で理知的な印象を与えたけれど、私の前でどんどん進んでいく彼はどこか屈強そうな印象があつた。彼は道の途中、いくつかの質問をした。

「武道の経験は」

「銃器を扱ったことは」

「運動神経はあるか」

ない、あるいはわからない、と答えるしかなかった。その言葉の意味は彼女から教わったけど、それを実際に利用したことはなかった。運動神経、といわれても人間のときと猫になつたときとは違いがあるだろう。彼は一旦立ち止まり、私へと振り向いた。なめ回すように私を見て、小さく溜め息を吐いた。私がその理由を説明しても彼は答えなかった。そういうことになっているのだろう。きつと、彼女がどうなつたのか聞いても答えないだろう。少しずつ何かを諦め始めていた。やがて、何を諦めていたのかも忘れた。

どれほど歩いていたのだろう、もうどの道を歩いたのか忘れてしまった。やがて大きな通りに出て、そこには白いバンが停まっていた。人波を彼は進んでいく。かき分けることもしない。彼の前には自然に道ができる。不思議に思いながら、彼の後ろを進んだ。あまり、恐怖心はなかった。彼女との別れを引きずっているだけ。バンに乗り込むと、車はすぐに動き出した。運転手が待機していたらしい。私はぼんやりと外の風景を眺める。そうしていると彼が眠くないか、と聞いてきた。眠くないと答えると、小さな白い布　正確には、布に染みこまれた液体　をかがされた。抵抗もできないまま私は眠りを強制された。

目が覚める。そこはそれなりに綺麗な部屋だった。荷物は私の鞆

ぐらいで（中身は出されていて、検閲されたようだった）、本棚や机の上は空で、気になる匂いもなかった。フローリングの床が足に冷たい。宿を提供されたのかと思ったが、それにしてもやりかたが強引すぎると思った。薬までかがされて、ようこそいらっしやいませなんてことありえない。

とりあえずこの部屋を出ようと思った。まずなんでこんなことをされなければいけなかったのか、説明がほしい。私はドアノブを回して扉を開けようとした。……案の定というべきか、それは開けられなかった。内側に鍵はなく、外からしか鍵は扱えないようだった。窓はあったものの、細い格子で囲まれていて、道具でも使わなければそこから出られそうになかった。興味が、畏怖に変わっていく。無理矢理寝かされたのも、ここがどこにあるのかわからせないようにするためだろう。私はこの組織が私に何をしようとしているのか、彼女はどうなってしまったのか理解できず、その恐怖に怯え始めていた。

暴れたところでどうしようもないと悟った私は部屋の真ん中で三角座りをしていた。自殺するための道具もなかったし、しようとも思わなかった。空腹を覚え始めたころ、ノックの音がした。私は勢いよく顔を上げ、そこへとまなざしを投げる。そこには私とあまり背の変わらない女の子がいた。ただずいぶん大人びた表情をしている。私は逃げたいと暴れるには空腹過ぎた。力なく彼女の元に近づき、なぜ私がここにいるのかと理由を尋ねた。彼女はただ首を振った。答えられないのか彼女にもわからないのかは知りようがない。彼女は私に洋服を手渡した。彼女が着ているものと同じ、濁った緑色の軍服、だった。

それに着替えると、私についてきて、と口数少なに指示した。途中、もう一言付け足す。

「ここから逃げようなんてこと、考えないほうがいい」

私はうまく答えられず、頷いただけだった。

コンクリートを打ちっ放しの廊下を進み、階段を下り、広い場所

へと出る。何十個と適当に並べられた丸いテーブル、横のほうには大きな厨房、食事の匂いからここは食堂だとわかった。そこには同じ服装の人たちがたくさんいた。男女の人数は半々ぐらいで、若い人から初老の人まで広い年齢層の人がいた。ただ年齢が上がるごとに男性の割合が増えていくような気がした。彼女に促されるまま、配膳場所まで向かった。彼女の身振りを真似しておかずを皿へ盛りつけていく。最後に厨房担当の方から白米をもらった。彼女は空いているテーブルを見つけて、そこへ案内した。

彼女は何も語ろうとしなかった。ただ一言、おいしい？と投げかけてくれたのが印象に残った。私を気にかけていないわけではないと思えた。発言をここでは制限されているんだ、と聞かされた。実際、ここじゃべっているのは年齢の高そうな男の人たちと厨房にいる人たちぐらいのもだった。

初めての食事はとてもおいしかった。もちろん、まずいものを食べたことがなかったので比較しようもなかったが。食事が終わるとまた彼女の後ろをついてさっきいた部屋に戻った。しばらく休んでいるといい、と彼女はつぶやくように言って、扉を閉めた。鍵の閉まる音。また私はとらわれの身になった。

その日は、それ以降の訪問者もなく終わった。私は備え付けのベッドで眠った。次の日、日が上がってからノックの音がした。朝食かな、と思って顔を上げる。案の定、昨日の女の子が顔を出してきた。昨日と同じように食事をとると、彼女は違う部屋へと案内した。私の部屋とは違う、幾分か立派な造りの扉だった。彼女がノックをする。低い男の声がして、扉が開いた。促され、部屋に入る。

大きな机、黒く大きな椅子に座っていたのは初老の男性だった。横にはスーツを着た女性が待機していた。彼はいいよ、と隣に並んでた女の子に声をかける。彼女は一礼して部屋を出て行った。重そうな音がして、扉が閉まった。私は視線を前に戻し、彼を見つめる。一見した限りでは優しそうなおじさんといった風貌で、むしろ軍服が似合わないぐらい優しい細い目をしていた。人当たりのよさそう

な彼は自分の手を組んで、私に顔を下げた。

「昨日は手荒な真似をしてしまつてすまない」

……謝られても仕方がない。私はなぜここに連れて行かれたのか、その理由が知りたかった。単刀直入に、それを訊いてみた。彼は顔を上げ、首を振った。

「すまないが、それに答えることはできないのだよ。ただ、君についで情報は把握している。君はしばらくここで使命を果たしてもらう」

私はまず名前を与えられた。イズミ・ミオ。どういった字を書くかとかは教えられなかった。そして、使命を与えられた。

「君には、特務部として任務を果たしてもらふことになる」

任務とは、何なのだろうか……？私の胸は怖いぐらい高鳴つて、唇は震えて言葉にならない。彼は柔和な表情を崩さないまま、答えた。

「任務は、暗殺だ」

アンサツ……その言葉が焦点を結ぶには時間がかかった。意味のある単語だと気付いたとき、はっと息を飲んだ。この人は、私に人殺しをしろと言っている……！私は首を振つて、それはできないと否定した。彼の表情が曇った。

「君には身寄りが無い、だから私たちが生活を保障すると名乗り出たんだ、君が使命を果たすかわりに。別にここを出て行つてもかまわない、ただこの場所を知った以上生かしておけん」

横で待機していた女性がいいのですか、しゃべってしまったと、と声を出す。語気が少し荒い気がした。なに、答えにはなっていないと涼しい声を出す男。

「もちろん私たちが訓練をし、その上で任務に参加してもらふ。そう難しいことではないから安心していい」

安心？それは、訓練に？それとも、人殺しに……？彼は聞こえなかったふりをして、話を続けた。

「ここに来たからには心を決めて望むこと。我々は、人の望みを叶

えているだけなのだよ」

……部屋を出ると、さっきの女の子が待っていていた。彼女は自分の名前を告げた。ユノ。名字はない。フルネームを与えられるのは限られた人たちなのだという。ここでは以前の名前を奪われ、この組織としての名前で生きることになる。私はこらえきれなくて、彼女に訊いてしまった。

「あなたは、人を殺したこと、あるの？」

彼女は答えなかった。

41th・love：希望

その日から、訓練は始まった。護身術から始まり、それと同時に銃を使った訓練も行われた。最初は銃に触るのも嫌だったが、いつの日にか慣れてしまった。時間が経つにつれて、私は組織の中でもなかなかの狙撃率を得るようになっていた。そして、外での活動が始まった。

心を鬼にしろ、と一緒に行動した上司に言われた。指示の上で、初めて引き金を引いた。足を踏ん張り、反動に耐える。乾いた音が心臓に響いた。次の瞬間見えたのは遠くで力なく膝を折る人の姿だった。一気に血が冷め、身体が震える。拳銃が手から離れ、コンクリートに音を立てる。私は彼のように倒れ込んだ。人殺し、と誰かが叫ぶ声がした。甲高いその女の人の声を私は忘れられない。私は地面に向かって吐き続けた。吐くものが何もなくなくても、胃液だけを流し続けた。嗚咽を上司が口を塞いで隠す。私を抱きかかえると、待っていたバンに乗り込んだ。私は車の中で叫び続けた。

その日から、私の心は乾いてしまった。何度も引き金を引いて、何度も人を殺した。急所を外すと出血性ショックで死ぬまで若干意識が残る。そのもがく数秒の時間が私が経験した中でも最大の恐怖だった。数人殺すと罪悪感はなくなった。やがて組織の中でも忌み嫌われる存在になっていった。報酬のためならいくらでも人を殺す、と罵られた。そんな言葉で傷付くほどの余裕は私にはなかった。私はただ銃弾を放つ殺人機械になっていった。私は人間になって何をしたかったのだろう。でも、そんなことを考える余裕があったら訓練をしていたほうがマシだった。ユノと会うことはもうなくなっていた。

そんな日々がいつまでも続くと思った矢先、呆気なくこの組織は崩壊した。任務に失敗した人間が逮捕されたのだった。そこからこの組織の全貌が明らかになり、国家権力の手が入った。上部の人間

は逮捕され、その行方は知れない。私や他の未成年の人たちは被害者として罪を問われることはなかった。保護されたとき、私の目の前で引き金を引く人もいた。洗脳の話聞いていた私はそういうふうに訓練されていたのかな、とその人を冷たい目で見送った。警察官が私の目を塞ぐ。そんなことをしなくても大丈夫。私はもう数え切れないほどの死を見てきたから。

身寄りのない私は孤児院へと送られた。名前は一つしか知らなかったから、読みしかなかった名前に和泉美緒、と当て字をつけた。年齢上高校生になっていた私はそこからほど近い学校に編入することにした。運良く私は組織の中で教育を受けられた身分だったので、それは難しいことではなかった。そこでの暮らしは、幸せそのものだった。鉄の塊の重みに耐えることもない。誰も血を流さないですむ、平穏な世界。私にとってそこは切ないぐらい幸せすぎた。私はこの最悪だと思えた世界で初めて安らぎを得ることができた……！

素敵な人たちは、みなそれぞれに痛みや悩みを抱えていたけれど、みんなそれを克服する力を持っていた。だから私はその手伝いをした。最初は大人しかった清華、彼女に恋をした純君、そしてりつちやんくん。素敵な二年半だった。どんなに傷付いても人は救われることができるんだって知ってから、もうこれ以上はないというほどの幸せに包まれた。私、おなかいっぱい。だから、私はこの世界に戻ることにした。

あのときはぐれた彼女は猫ということもあつてのんきにやっていたみたいだった。気楽ね、と笑うと冗談半分に怒ってくれた。私は彼女を抱きかかえた。彼女はずいぶんと年老いてしまったけれど、彼女の瞳は絶望に汚れてなんかいなかった！ そのことがすごく嬉しかった。私は彼女に道案内をもらった。何度も説得された。でも、私は断った。……もう、理由はわかるでしょう？

だから、私はここにとどまることにした。

「……そんなの、いやだよ」

律君は、首をだだっ子のようにぶんぶんと振り回した。

「ずっと、幸せにしようよ……ずっと、幸せでいてよ、ボクたちと一緒にっ」

私は、それでも首を振る。律君、罪人は幸せになっではいけないんだよ？

「そんなの、間違ってるっ、だって、先輩はそれを強要させられたんじゃないか」

それでも、罪は罪なんだよ。幸福になることを認められてはいけないんだよ。

「だとしても、せめて、純平のことを見守ってあげてよ！記憶から先輩が消えたら、純平は独りで生きようとする、それがボクのがままでも、見当外れでもかまわないから、純平の側にいてよ、美緒先輩だって、好きなんでしょ、彼のことか」

……まさか、ばれてるなんて思わなかった。でも、この恋は土に埋めると決めたんだ。もう、引き返さないって あれ、でも、なんで、涙が止まらないんだろう。一度溢れた涙が、頬を濡らしていく。どうしたんだろう、私、おかしくなってしまったのだろうか。どうするべきなんだろう、私は。

「ねえ、戻ろっ」

まだ、幸せな時間は続いていくんだよ。ボクたちが前を向いていられる限り、ずっと、ずっと。だから、せつかく掴んだ幸福のしっぽを離すようなことはしないで。それほど辛いことはないんだから。

「りっちゃんくんのくせに……あなたは、ずるいです」

何がずるいかわからない。けど、言わざるを得なかった。私は、彼女に声をかけた。

「全部、元に戻せますか？」

彼女はお安いご用だと胸を張った。その姿がかわいらしくて、誇らしい。あと、ともう一つお願い事。

「この世界の扉に、鍵をかけてください」

この世界がある限り、私は逃げてしまう。だから、さよならしな

くちや。彼女は頷いた。私は別れ際、一度だけ振り向いて、バイバイとつぶやいた。

後日。私は放課後の中庭に純君を誘った。今日は部活もないらしく、訝しがりながらも了承してくれた。誘いながら顔が真っ赤になってはいなかったか、そのことがものすごく心配だった。今日は穏やかに晴れ、今週中には梅雨明けするらしい。どう言おうか必死に考えながら彼が来るのを待った。

「……んで、用事って」

急に声がして私は飛び上がる。うわ、純君がきよんとしてる！私は必死に言葉を紡いで、下手なりにも気持ちを彼へと伝えた。沈黙が数秒あって、彼がうつむいた。

「俺は、また人を傷付けるかも知れ」

「そんなことさせません」

私は彼の言葉を遮った。そして微笑む。

「知ってました？美緒、武術の達人なんですよ？そりゃ、えいやーって！」

彼が顔を上げる。彼は泣き笑いで私を見つめた。

「じゃあ、そんなときは俺のことぶっ飛ばしてくださいね、それはもう、てやー、って」

私はその言葉に力強く頷いた。きっとその顔は、純君とそっくりだったに違いない。

律君……ありがとう。

Last love：夏来たる

駐車ガレージのシャッターが開くと、ファミリーカーが顔を出した。ボクの家のように横付けして停まり、ボクとかあさまはそれに乗り込んだ。

「二人とも、準備はいいかな？」

元気よく返事をする二人に、とおさまはそっくりさんだねえと苦笑した。手揚げには水着と宿泊道具。車は目的地へ向かう前に、まずは全員の集合場所へと走った。クーラーの冷気が強いとかあさまが設定をいじる。ボクは窓から空を見上げた。まぶしい太陽が、新しい季節がきたことを強烈に教えてくれる。

朝の道路は空いていなくて、程なく車は学校に続く坂の前に着いた。ボクは一旦車から降り、彼らを迎えに行く。ボクが挨拶をする気持ちいいぐらいに爽やかな返事が返ってきた。純平がまたわけのわからないことを言い出す。

「今日は用意してきたんだよなつ、スク水」

「へっ、律、そうなのか!？」

「ま、まさかそんな日が来るとは思ってたなかつたです……」

いやいやいやいや、そんなわけありませんからっ!で、どういう魂胆かな、純平は。

「いや、今のはちょっとした冗談なんだけど、な？」

「うん、わかつてる。宿に着くまでに純平を処刑する方法を九十九個ぐらい考えとくから安心してね？」

頭を抱える純平に他の三人は笑った。そんなこんなで半分冗談を交えながら雑談を短めにすませて、ボクたちは車に乗り込む。再び車は動きだし、今度こそ目的地へと向かった。車中、隣に座った清華さんはボクに話しかける。

「今日が楽しみで仕方なくて、一睡もできなかった」

ボクはそんな彼女の頭をなでてあげる。短い時間だけど、おやす

み。清華さんはあくびをして、まぶたを閉じた。それは本当に安らかな寝顔だった。ボクも自然と、眠りに就いてしまった。なんて心地いいんだろう、車の中って……。

美緒先輩に肩を揺すられ、ボクたちは目を覚ました。時刻は昼前。食事をとったら泳ぐことに。とりあえず宿にチェクインすることが優先だけだね。部屋で水着に着替えることになった。女性陣はシヤワールームで着替えることになった。淡々と言葉もなく三人着替え終え（とおさま、なんでフリータイプの水着なの……もっこりしてるよ）、三人が着替え終わるのを待った。狭いだの何だの、きやつきやとした声が聞こえてくる。ぼそり、と純平が口にする。

「楽しそうだな、おい……」

頷き以外のどういう反応を示せばいいんだ。さらに時間がかかって彼女らは出てきた。かあさまはビキニでパレオを巻いている。清華さんはかあさまより露出は控えめながら、かなりの色っぽさだった。フリルが胸元を強調している。そして美緒先輩は……。彼女の姿を見て、反射的に純平がつぶやいた。

「お前、どこの小学生だよ」

セパレートタイプのスクール水着。よりによつてというか案の定というか似合いすぎです。純平の一言に頬を膨らませる先輩。でも彼の言うことも一理あるよ、これじゃあ。奥のほうでとおさまが何かつぶやいていた。ちよつと、大丈夫？

「いい……すごくいいよ……」

「さて、何がいいのかゆつくり聞かせてもらいましょうか」

かあさまがとおさまの耳を引っ張っていく。ボクたちは苦笑しながら二人についていった。

海の家のカレーを食べて、いざ海へ。すいすいと泳ぐみんながうらやましい。ボクはかなづちだから浅瀬を沈んだり浮いたりしていた。清華さんがこつちにきて、水泳の指導を名乗り出てくれた。

唇が紫になるまで泳いで、疲れたところでボクと清華さんは海を一旦上がった。他の二人はまだ楽しそうに遊んでいる。両親は大き

な日傘の下、お酒を飲みながらボクたちの様子を見守っていた。砂浜に三角座りをして、自分の町のそれとは違う、青く遠くまで広がる海を眺めていた。境界線は、空に溶けてよくわからない。ボクは、彼女に訊いた。

「二人きりじゃなくてよかったの？」

彼女は一瞬目を丸くさせ、すぐに笑う。その人なつつこい笑顔こそ、ボクの取り戻したものだった。

「だって、みんなというほうが楽しいじゃないか」

あの日、関わりを畏怖していた彼女はもう、どこにもいない。ボクはその言葉に安堵して、確かに、と頷いた。

あとがき：終わりに

初めまして、蒼井碧です。

完結しましたね。

『小説家になろう』様で連載した小説で、

この『たち×こね!』は始めて書ききった作品となりました。
もともと、とある賞に出すために書き始めたもので、

ろくに校正もしておりません。

いきなりの超展開でかなりの読者がついて行けなくなったと思い、
猛省しております。

ボクに連載は向いていないとはつきりわかりましたよ、ええ。

プロット作ったのにこれだからね！

現在は校正中で、だいぶ内容も変わっております。

当然だと言えばそれまでですが、

逆に言えば、ここでしか明かされることのないエピソードもあるわけ。
で。

なんにせよ、お楽しみいただけたら何よりの幸せです。

最後に、いくつかの方にお礼を言わせてください。

まずはブログにちらりと書いた構想を拾ってくださった金谷さん。

あなたがwktkしてくれなかったらこれに着手することはありませんでした。

そして彼女と出会うきっかけを作ってくれたCarnival Nightsのメンバーのみなさん。

また、彼らを知るにはThe Wallocksにいなければありえませんでした。

深く感謝しております。

それから、『小説家になろう』様。
このようなサイトがあれば、この作品が世に問われることはなかったと思います。
ますますの発展を期待しております。

最後になってごめんなさい。

あとがきの最後まで呼んでくださった画面の向こうにいるあなた。
よくぞ付き合ってくださいました。

あるいはここから読んでいるなんていうあまのじゃくな方もいらっ
しゃるかもしれません。

ちよつと体裁の悪い小説ではありますが、何かしら感想をいただ
けるとありがたいです。

さて、これで終わりというわけにはいきません。

しばらくは校正に追われるとは思いますが、落ち着いたら次の作品
に手を出そうと予定しています。

それまで、しばらくの間お待ちください。

また、お会いしましょう。

2009/06/06、蒼井碧

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5871g/>

たちこね！

2010年10月8日13時37分発行